9 1 2 3 4 5 6 7 8 9 19/m 10 1 2 3 4 5

投函

36
15

事業と人物

361-115

事業と人物

大正
6. 9. 10
内交

自序

近時事業と人物を論ずるものゝ多き、僕を易にて數ふるに堪にざらんとす。而も其評論の多くは肯綮に中らず、甚しきは全然正鵠を失するものあるは何の故ぞ。蓋し作者が人物事業を鑑識するの明なきにも因ると雖も、亦絶にず活動せる今人を捉に來りつゝ、成敗の跡を趁ふて古人を論ずと同じ態度に出る過にして、之が爲に讀者より、爲にする所あるか否らずんばたゞ漫然是非の言を弄するのみど蔑視さるゝに至りては、己を損し世を害する沙汰の限りといはざるべからず。抑も國家は事業によりて榮に事業は人物ありて後興るに見れば、事業人物の批評は漫然之を爲すべきに非ざる也。吾徒深く時弊に慨する所あり、最も公平にして親切なる事業と人物の評騰を下さんが爲に、曩に社中同人を東京に、北陸に、四國、中國、九州に分派して、初を原ね、終りを要め、枝葉を尋ねて、窮まる所を究め、是に一大確信を以て、誤謬百出せる人物事業評論界の革命を試み、敢て此書を編輯す。

私に惟ふ、是非は一人の私なりと雖、褒貶は天下の公也。吾徒公人として操觚の任にあり、已に萬一の誤謬なからんを期し、充分の精査を遂げて、後書するに謹慎の筆を以てして、一句一字も苟もせず、情に拘はらず、理に阿らず、現代史家の權

威を以て、褒すべきは褒し、貶すべきは貶して些の拘束なし。不文讀者をして江海膏澤の浸潤、渙然として解け、怡然として順ひ、然る後得る所あらしむる事尠かるべしと雖も、志の存ずる所、法を春秋に亨けて、遵を經世に取るに於て、聊か一歩を進め得たりと信ずるものあり。其時に或は意の到らざるものあるが如きは、吾徒努めざるが爲にはあらず。蘇軾曰く、春秋も亦人の言のみと。春秋且然り、果して然らば吾徒の調査と雖も、時に一二の脱漏なきを必する能はざるべき乎。敢て大方の是正を竢つ。

大正六年八月

工業之日本社舊同人を代表して

泥牛學人、

例言

一本書は序文に於て告白せし如く、評論界の革命を期し、公平を經とし親切を緯として編述すべく、事業と人物の調査には、多大の勞力を吝まざりしも、最初の試みなるを以て、尚編輯者自ら其不完全に慊らざる所頗る多し。

一評隲せる人物事業、悉く現代に活躍せるもののみなれば、時日の經過は多少の變更を免れず、然るに編者昨臘以來病に臥し、筆を執る能はざる約半年、其間諸會社の形勢著るしく變せるものなきにあらずと雖も、病後の身悉く之を改むるの努力をさゝぐる能はず、是れ偏に編者の陳謝する所也。

一本書完成に付き編輯上には親友山口孤劍、中村碧湖諸氏の多大なる助力を仰ぎしは、編者の感謝已まざる所なり。

一本書は昨年十一月脱稿の儘、工業之日本社の都合に依り、公刊延期されしものなり、今まや之を編輯し、在社三年間、多大なる厚意を辱うしたる知巻諸氏へ之を頒ち、一面以て圓滿退職の好記念となし得るは、編者の深く欣ぶ所なり。

一本書は現工業之日本社と全然關係なし、此段特に明記し置く。

大正六年八月

泥牛生

『事業と人物』目次

一　三井家の事業と人物……（一）
二　東洋第一の王子製紙と其經營者……（一五）
三　藤山雷太氏と大日本製糖株式會社……（三三）
四　中日實業會社と其經營人物……（四六）
五　糖界の權威臺灣製糖株式會社……（五二）
六　大日本麥酒會社と馬越恭平翁……（六〇）
七　日本石油會社と經營者……（七一）
八　共同火災と其經營者……（七六）
九　小池國三氏と其事業……（八五）
一〇　整理されたる東洋毛織と藤田謙一氏……（九〇）
一一　久原鑛業株式會社と久原房之助氏……（九五）
一二　化學工業界の偉績を奏せる日本窒素肥料會社……（一〇一）

一三　巨額の預金を吸收せる浪速銀行……（一二六）
一四　公稱二千萬圓の山口銀行と經營者……（一三三）
一五　整理殆ど成れる北濱銀行……（一二九）
一六　名譽ある大阪電燈會社……（一三六）
一七　一世の才人小林一三氏と箕電……（一四四）
一八　策の爲に誤れる阪神電鐵……（一五一）
一九　松風嘉定氏と其事業……（一五七）
二〇　湯淺吉七左衛門氏の爲人と其事業……（一六二）
二一　加州横山家と其事業……（一六七）
二二　タクマ式汽罐の發明家田熊常吉氏……（一七三）
二三　逝ける炭鑛王貝島太助翁……（一七六）
二四　筑豐炭鑛界の五大人物たる安川敬一郎麻生太吉伊藤傳右衛門堀三太郎中野德次郎五氏……（一八四）
二五　鎭西唯一の電氣トラスト王……（二〇七）
二六　將來最も囑目すべき九州電氣軌道と其經營者……（二一四）
二七　安川氏事業の一たる明治紡績合資會社……（二二一）
二八　世襲的事業の深川造船所……（二二四）
二九　佐賀セメントと其經營振り……（二二八）
三〇　原冨太郎氏の事業……（二三七）
三一　茂木總兵衛氏の事業……（二四三）
三二　中村房次郎氏の事業……（二四九）
三三　大阪及大阪人……（二五五）
三四　怪物福澤桃介論……（二七三）

目次終

事業と人物

泥牛學人編

三井家の事業と人物

——所謂天下を兩分して其半を保つものか——

我が日本の實業界、其事業固より多く、其人物亦乏しからず、而も其何れの事業人物と雖も、僅に澁澤系安田系以外に岩崎家か然らずんば三井家に隷屬せざるは莫かるべく人の之を稱して岩崎三井は我が實業界を兩斷して各其半面を保有するものなりと曰ふも强ち不當ならざるが如し、而して彼の明治四十二年十一月に創立せられたる『三井合名會社』なる三井同族總出の連名會社こそは三井家が大株主として特種特別の關係ある諸會社事業を統一整齊せんとの目的の下に生れたるものにして曰く三井鑛山株式會社、曰く株式會社三井銀行、曰く何曰く何と、三井の系統に屬する事業の多くして盛且つ大なる、蓋し吾人の想像以上のものあり、いざや之より少しく之を述べ、三井家の全盛紀念の爲に壽を献じ、所謂千里の江山一家に屬する三井同家に其事業の『君が代は天の羽衣まれにきて、なづともつきぬ巖なるらん』

の懽びを、本書愛讀者諸賢と倶にせん哉。

三井家の關係事業

三井家が直接的自家の事業と堂々銘打ちたるは其資本各二千萬圓なる、三井鑛山株式會社、株式會社三井銀行及び三井物産株式會社の三大事業なるも、ソレ以外間接的に三井の事業として世間に通りたるは左の如し

▲王子製紙會社　資本金六百萬圓　社長　三井得右衛門氏
▲堺セルロイド會社　資本金二百萬圓　社長　三井養之助氏
▲芝浦製作所　資本金二百萬圓　社長　三井守之助氏
▲三越呉服店　資本金二百萬圓　社長　朝吹常吉氏
▲北海道炭鑛株式會社　資本金二千七百萬圓　代表社員　團琢磨氏　磯村豐太郎氏
▲鐘淵紡績株式會社　資本金一千六百萬圓　代表社員　武藤山治氏
▲臺灣製糖株式會社　資本金二千五百五十萬圓　相談役として　益田孝氏
▲日本製鋼所　資本金千五百萬圓　代表社員　高崎親章氏

此外三井家が近時著るしく力瘤を入れつゝある倉庫事業（東神倉庫）等其關係事業の投資約二億に近からんとするは、流石の岩崎家と雖も到底及び難しとする所に

して其全盛蓋し日本一と稱すべき也。

同族總出の責任

三井一家の事業に對しては三井一族いづれも公然其名を現はし、各事業の一部分を擔ふて責任を分擔しつゝあり、弟なりと雖も現に總本家を相續せる以上、三井八郎右衛門氏は三井合名會社々長にして、而して三井同族會議長たり、而して三井八郎次郎氏は三井物産株式會社々長、三井高保氏は三井銀行社長として、俱に三井合名會社業務執行員たり、而して三井武之助氏、三井源右衛門氏等は合名會社監査役たり、其他三井元之助、三井得右衛門、三井三郎助、三井養之助、三井守之助、三井壽太郎諸氏孰れも多少共それ〴〵に責任分擔を辭するところなく、富家の子弟といへど徒らに花落ち風に隨ひ鳥雲に入るの閑日月を許さず、彼の竹院に眠りて永日を銷し、花亭に醉ふて殘春を送る底の無爲道樂華族と大に其趣を異にする所に大町人としての大理想を有せし先々代三井高福翁の俤ばるゝあり、豪放寛濶大町人の風丰態度を具備せし先代三井八郎右衛門翁の風格の遺さるゝなり、明治二十九年特旨を以て此名譽ある大町人の總本家主人は男爵を授けられたりと雖も、其日本一大町人としての權威風格態度は五爵の最下位たる男爵なんどゝ比ぶべきものにあらざるなり。

大町人と華族との調和整正されたる新らしき家庭は吾人之を三井一家に多く之を

見るを得たり、而して其琴瑟相和し、親族關係の最も濃やかなる、ソコに位階と富との巧みに結ばれたる調和と整正とを看るべきなり、即ち八郎右衛門氏は伯爵前田利同の令妹苞子の方を娶りて妻とし、其他八郎次郎氏の夫人照子の方は侯爵伊達宗陳の叔母、得右衛門氏の夫人鉞子の方は伯爵松平直亮の令妹、壽太郎氏夫人鎌子の方は子爵田村丕顯の令妹にして而して武之助氏夫人文子は子爵吉田清風令姉、高保氏長男高縦氏は其名の現はす如く眞に天縦の英才なりしも不幸夭折せるが、氏の夫人蓁子の方は實に侯爵德大寺實則の姫君なりしのみならず、高保氏の四男高昌氏は侯爵嵯峨公勝二女を娶りて妻とせり斯くて夫婦相和し兄弟相信じ同族相親み本分家相睦み常盤なる松の翠りは今しほ色まさり、君子の德風此にいよ〳〵顯はる、碧落に雲なく寔に能く鶴の心に稱へり、玉くしげ、此娛しみ、此祝ひ、我れ三百盃といへども強て辭する所にあらざる也。

三井一族中の中心人物

三井一族は、其いづれも山家育ちならず、いづれかと云へば寧ろ賢明利巧過ぎるの嫌ひある位なれば、三井家の公達は特に自重を必要とすべく思はる、されば三井家の將來には或は一方の將となり、或は進んで總帥となるべき大器は輩出すべけんも、過去及び今日に於ては何といつても中心人物は三井八郎次郎、三井高保兩氏ならざるべからず、現に三井三大事業の一たる三井鑛山會社長三井源右衛門氏輿望を

負ふて代表社員たりと雖も、三井銀行は高保氏、三井物產は八郎次郎氏そが社長たるにあらずや。

先々代高福翁の四男たる八郎次郎氏は明治十二年に第一國立銀行取締役として金融業務にたづさはり、次で博覽會審査官、帝室博物鑑査員等に度々擧げられ其博覽强記の多才多能は到る處可ならざるはなき寧ろ駭心驚目すべし、若し夫れ高保氏に至りては、明治の初年京都府勸業課に出仕して事務を練習する所あり、博覽會の事業事務に精通し、又た銀行會社の事業事務にも暗からず、而して其人と爲りや温舒方正にして恩威幷び行はれ、曾て三井家の內憂外患あり內外眞に多事多難を極むるの時奮勵黽勉、眞に晨炊褥食の苦を嘗め以て三井家をして遂に九鼎大呂よりも重からしめたるの大器量人なりと云ふ、三井家には高材逸足頗る多く悍馬も稀ならざれど、一たび高保翁の前へ出でゝは何人と雖も其德に服せざるは莫しと云ふ、蓋し三井家の柱石とは乃ち此人を謂ふなり。

金融界の大覇王たる三井銀行

我等若し德川幕府末世金融史を編むことあらんか、越後屋八郎衛門の名を逸する能はざるなり、幕末の金融界は小野組、三井組、鴻池等によりて彼の兩替制度の保持されたるなるが幕府倒れて明治政府起り、國力疲弊政府の財力極めて乏しきの折柄、自家の利益を損するとも君國の爲なりとて新政府の爲に盡せし三井組の功勞は

財政金融史上特筆大書すべき一大事件なりとす、而して此功勞に何等酬ゐらるゝなくして死せるは實に越後屋八郎右衛門翁にして、翁は實に三井家をして國家の爲に盡さしめたる偉器なりし也。

明治九年七月一日三井銀行創立せらる、總長は三井八郎右衛門氏(先代)にして副長は三野村利左衛門翁なりき、此三野村翁は三井家の大番頭中の偉物にして、而して彼は大阪支店長として西村虎四郎を派遣せり、所謂英雄は英雄を識りしものか。

恩人中上川彦次郎氏

三井が文明的模範銀行たりしは中上川彦次郎氏の入りて專務理事たりしに始まる『大凧に近よる鳶もなかりけり』彼れは眞に天馬空を行くの快男兒なりき、小廉曲謹なる當時の群小銀行者は大凧のやうなる彼の前に出でゝは小さなる鳶のオド〳〵せるが如かりき、益田孝翁は三井の大傑物なりき、然れども中上川は或點に於て或塲合に於て益田をして後へに瞠若たらしめたりき、其潑溂たる精氣の發する所金石をも貫かずんば已まざるの概あり、一切の情弊を打破し、人材を網羅し、悍馬御しがたしとせられたる岩下清周の如きをも、一見喜んで予は彼を御すべしと傲語し、彼をして當時三井として最も大功ありし大阪支店を監せしめたりし也、彼の豪放以て知るに餘りあり、斯くて彼はまんまと中上川式の大斧鉞を加へ、大改善大刷新行はれ、彼の手腕識見信望天下に重んぜらるゝに至りしに、不幸にして明治三十四年病歿

したり、三井家の損害蓋し莫大なる哉。

守成の將早川千吉郎氏

勇猛剛毅、懸軍萬里の兵を提げて短兵急擊するの中上川氏去りて、眞摯篤厚石橋を叩いて渡る式の堅造たる早川千吉郎氏、井上馨元老の拔擢推擧によりて三井同族會理事より銀行專務理事に轉じて中上川氏の後を襲へり、恰も火の後に水を以てせるが如き乎。

亂世の英雄不幸にして去れり、治世の良臣此に現はれざるを得ず、中上川氏逝て早川氏到れるは將に斯の如きか、地味にして落付き拂つて毫も動せざる早川式の營業ぶりは、守成的時代に頗る相應しかりしなり、而して明治四十二年十一月、合名會社は株式會社に改められ內部の組織變更され

池田成彬、米山梅吉兩氏

拔擢されし常務取締役となり、重役の顏觸更に新たなり。

取締役社長	三井高保氏	常務取締役	早川千吉郎氏
常務取締役	池田成彬氏	常務取締役	米山梅吉氏
取締役	三井守之助氏	取締役	團琢磨氏
監査役	三井得右衛門氏	監査役	波多野承五郎氏
監査役	林健氏		

實際を云へば中上川氏時代より其副役として波多野承五郎氏ありしなり、而も早川氏の入りて專務たるや波多野氏は能く早川氏を補佐する所ありて敢て背反するなし、此の如くにして波多野氏の人物一段と高まるに至れり、而して其株式組織となるや彼は遂に監査役となり、新進氣鋭の才人池田成彬氏營業上の實務を掌り、大阪支店長より一躍常務取締役たりし米山梅吉氏は彼のやゝ先輩にして而して親友たる池田と机を列べて、俱に最大權力者たるに至り、兩氏の調和よく取れ、實務著るしく擧げらるゝに至り、人は稱して池田米山の配合を以て最も妙を盡せりとなす、蓋し當れり矣。

池田氏は山形のズーズー出身にして、其人物の手堅きと其度胸の据はれるに於ては恐ろしい傑物なり、故人中上川氏が其愛孃艶子の君（中上川治郎吉氏の令妹）の配偶者たらしめし丈けに、中上川氏の眼識誤まらず、彼は稀代の才物たりし也、米山梅吉氏は江戸ッ兒なり、彼が明治三十一年池田氏と同行して銀行事務取調べの爲に歐米へ派遣せらるゝや、兩氏俱に得る處尠からず、而もそれよりして池米兩氏の兄弟も啻ならざる交情は此間に結ばれたるなり、彼は池田氏が一歩一脚も本店を離れざる間に、横濱を歴て大阪支店長たり、長老平賀敏氏の後を享けたる彼としては年は餘りに若く、體軀はあまりに小なりしも其平凡ならざる人物たることは忽ちにして同業者間に認められ、强情我慢强き志立銕二郎（當時住友銀行支配人）町田忠治（當時山口銀行理事）兩氏も、退いて米山の侮るべからざるに警戒用心せしといふに

あらずや。彼の自ら標置する頗る高かりし本多雪堂（君當時大阪朝日新聞經濟部長）と雖も、當時吾輩が阪朝記者として雪堂君の下に在りて執筆せる金融諸問題に關し材料の出處、其附記せる意見の米山氏なるを告ぐるや、記者の原稿は雪堂君の筆を加ふるなくして通過したりき、以て雪堂氏が如何に米山氏の人物識見に重きを措きしかを知るに足らん、氏去りて市川氏來れるも病み、英物田中德次郎氏（現九州電燈鐵道專務）副長として未だ手腕を示すに至らず、やがて菊本直次郎氏來り、氏去りて間島弟彦氏の來る、其人物恰も是れ池田成彬氏を見るが如く感ぜらる、即ち間島氏の純清精敏、周密細看、而して其嚴正深沈なる、吾輩曾て之を小林一三氏に質して曰く、間島弟彦氏は池田成彬氏と肉骨の至親關係ありやと、小林氏一笑して曰く、其志を同うすれば其人同じからずやと、吾輩其至言に服し、如何にも御尤々々と首肯かれたり。

早川氏＝池田氏＝米山氏

『栄の花や鳶天に冲し魚躍る』池田氏の冷々然たる處湛々然たる處、ソコに池田式の美妙の發揮せらるゝなり、打てば錚々、叩けば鏗々、引けば曳々、其おめず臆せざる蹇々たる態度、其ほれ〴〵と惚つとりする容貌の中に落々物事に拘泥せざる大度の仄みゐる、是れ池田氏の僞らざる全性格なり、而して蕩々として平らかなる貌、團々として圭角なき其格、而して漾々として停滯なく、雍々として安らかなる其態度

の美しき、米山氏の池田氏に對して、時に柔克く剛を制することなからずや、有体に云へば自己の主張を一歩だも枉ぐる能はざる主張の强烈なる池田氏も、時には温柔にして八方に氣を配る米山氏に、苦笑して讓歩するの雅量あるべきも、其一たび重役會に出でて意見を陳ぶるや、正々堂々何人にも異論を狹ましめず、若し米山氏ならんには、サアそれは……』と餘地を與へて、當らず障らずの態度に出づべきも、池田氏は『それはいけません』と一言の下に拒絶する丈けの堅き信念と强き主張を押し通す丈けの根底牢として拔くべからざるものあり、されば池田氏の然、否、の一言によりて問題は直ちに決せるゝなり、池田氏のエラキ處はコヽにあり、而して米山氏の美しき處もコヽにあり、兩者の優劣長短豈に容易に言ふべけんや、たゞ兩者の提携して一團となれる、是れ所謂鬼に金棒なり。

早川氏は所謂將に將たるの大器なり、三井銀行の專務として事務的に批判せんか失禮ながら池田氏優れりとの評は至當なるべし、然れども早川氏にはソレ以外に長所あり、あの重々しい處、あの何となくどつしりした處、而して其瓏玲恰も明鏡の晃々たるが如き麗々たる心事、其人物の大なる其品格の良き、蓋し金融界の一品なるべきか、池田謙三氏も及べからず、三村君平氏も追ふべからず、勸銀總裁志村源太郎氏、興銀總裁志立鐵次郎氏等各々其長所の早川氏の及ぶべからざるものはありと雖も、其人品骨柄に至りては兩氏遂に早川氏に隨ふべからず、其大に於て日銀總裁三島子爵と比すべく而して其對照に於て全然相反する幾多の點を發見するも亦至

極妙なり、三島子爵をして大藏大臣たらしめば卓勵風發の慨あらん、而して早川氏をして之に代らしめば春風春水幷び到るの趣あらん、其藏相としてのタイプは若槻禮次郎氏の如くに利巧ならず、勝田現藏相のやうに拘々焉たらず、また高橋是清男のやうに突拍子ならず、さりとて武富時敏氏の藏相ぶりのやうなキビ〳〵した鮮なる手際をも拜見し得べからざるべきも、或は温柔和平怡々翼々たる裡に若干の成績を擧ぐるの妙手腕を有せし山本達雄氏のそれと早川氏は比較し得べきにあらざるかたゞ山本氏には何となく人を親しましむる德亡しと雖も、早川氏は千萬人悉く彼れに悅服する丈けの德化力を有するは不思議なり、吾輩今此に同じ石川縣出身の先輩たる豪傑中橋德五郎氏との比較をするを憚ると雖も中橋氏は鄕人を威服し早川氏は悅服さる、此相違點は兩傑物の人物の差ふ所にして吾等は中橋翁に學ぶ點もあり去つて早川氏に敎を受くべき事もあり、斯る兩性格風度骨柄の全然異なれる兩先輩を有する同鄕後進生は幸福なり、何となれば甲に赴きては甲の長處を探り、乙に往きては乙の美點を酌み、兩先輩の長處美點を打つて一丸として之を己れの有するを得べければなり、たゞ石川縣の後進生の存外に迂愚庸劣なる、兩先輩の長美を捉ゑて己の所有たらしむるの人物なく、たゞ僅に倉知鐵吉氏（前外務次官、現中日實業會社副總裁）の少しく之を學び得たる位ならんとは餘りに情けなく、彼等後進生の或は中橋氏に組し、或は早川氏に黨して大丈夫の雅量を有せざる、百萬石提封の鄕土人としも思はれず、將に一大鐵槌を彼等の頭上に加へて三省せしむべき也。

多士濟々雲の如し

銀行として最も多くの逸材を有するは三井にして、住友第一之に次ぐと稱せらるる吾輩の知れる所若し誤りなしとせば高材逸足は寧ろ第二流どころ、即ち支店副長若くは各課次席各係主任中に潜めるものゝ如しと雖も、未だ捉ゑ來りて議論するの早きに過ぐるを以て、姑らく世間並に平凡ながら左の一流株どころを列記せん

秘書課長　福田秀五郎君
整理地所課長　神崎平二君
調査役　金塚仙四郎君
營業部長　菊本直次郎君
横濱支店長　門野錬八郎君
大阪西支店長　山崎吉次郎君
神戸支店長　亀島廣吉君
廣島支店長　永田隼之輔君
福岡支店長　下田守藏君
小樽支店長　林德司君

業務課長　杉山虎雄君
外國課長　片山繁雄君
調査役　山本亀光君
大阪支店長　間島弟彦君
深川支店長　長谷川數衛君
京都支店長　今井利喜三郎君
名古屋支店長　小野幸三郎君
門司支店長　二宮峰男君
長崎支店長　河野新太郎君

何と申しても民間普通銀行としては日本一の大勢力を有し其信用實力倶に比類を見ざるの大銀行なれば其各支店の信用も大、隨ふて支店長の選任は常務取締役の尤も苦心する所なるべく惟はる、間島弟彦君が第二の池田成彬と稱せらるゝ位のエラ者なることは吾輩既に之を說けり、されば同君に就ては最早再說すまじ、次に大阪

支店長より營業部長に轉じたる菊本直次郎君なり、君が深川支店長より大阪に榮轉せし當時は一代の才人小塚正一郎氏が北銀專務として花を咲かせし頃とて君の出處進退は頗る人の注目を惹きしなり、君は大銀行の大支店長として其人物風采の揚らざるものありしも其デスクの人としては才華の煥發せるものあり、福岡支店長下田守藏君は新店開業に方り拔擢されて店長たりし英物也、君が福博金融界の長老たるのみならず、田中德次郎、松永安左衛門の如き傑物と肩を並べて毫も見劣りせざる是れ吾輩の特に感服する所なり、親切にして故舊に厚く友情の特に濃なるものあり一見輕薄なる才人のやうに看らるゝも其實質の全然之に反する恰も小林一三氏の如きが、小林氏の多血多感の士たることは氏の風采態度辯論にては全然反對に見らるゝなり、下田君の如きも即ちそれなり、長崎支店長河野新太郎氏は新任なれど好評なり、其他長谷川數衛氏今井利喜三郎氏が大阪に在りし頃青年銀行家としての聲望ありし事、調査役金塚仙四郎氏が門司神戸にありて重んぜられたる人物なる事、同山本亀光氏が大津にありて市人の相重ずる所たりし事等は吾輩の今に記憶に存する所なるも、其他の諸君に就ては未だ多くを知らず、知る所多少ありと雖も詳らかならざるものあり秘書課長福田秀五郎氏は英物なりとは豫々承り及ぶ、而も吾輩の無性なる近時兩三回同鄕の先輩たり且つ恩師たる早川先生を訪ひ、曾て大阪に在りて知を辱ふせし米山常務にも刺を通じて面會を乞ひしことあるも舊知金塚仙四郎氏、菊木直次郎氏には久しく面會を得ず、隨ふて以上記すところは三井銀行並に其人物

に就て知る處の概要に過ぎざるの憾みありと雖も、聊かなりと三井家、わけて銀行の半面を描き得たりとせば、筆者の望足れり。（三井鑛山株式會社、三井物産株式會社は續篇）

附記　舊臘末來藥餌に親しみ、空しく花に背きし吾輩も、頃來病少癒し、落花の梢に來り鳴く小鳥の愛らしきを眺めつゝ、春を惜しむ情いとゞたゞやらず、晏起筆を執りて此稿を草して午に及び、粗辭雜文忽ちに成る幾千言、乃ち筆を投じて門外一歩すれば、延び揃ひたる麥の穗先に日の暖み一段なるものあり、衣を脱して日光浴を試み、麥に手入れする翁と相語る、揚雲雀若、葉の搖ぎ、手拭に唄恥かしき村の少女、われは是れ恰も太古の民の如し、あゝ官僚政治か國民政治か、天下分け目の大決戰の日なるをも、吾れは忘れ居たりし也。（一票を投ずべき總選擧の日に）

■上流者は腐敗せるも中流者は健全

でいぎう生

◉我國の諸物價は最近二三年間に於て著るしく騰貴し、爲に勞働生活者の生計次第に不安と不如意を感ずるに至り、而して偶ま家長の老衰疾病等により所得の減ぜらるゝや家族の不幸見るに忍びざるものあり、經濟組織の不備なる我國に於ては、富の分配が勤勞と平均せざるの免れざる事とは云へ、上流者は空手飽食し得るに、中族社會は一生懸命の勤勞も、以て家族を養ひ子弟を教ふるの資、やゝもすれば、缺如たるは、社會政策上欣ぶべからざる事象なりとす。

◉之を阪神地方に見るに、上流社會は其風紀紊亂し、其個性も頗る尊重すべからざるものあり彼等は安逸に流れ、其體軀は精神と倶に次第に退歩するものゝ如し、近時上流社會の家計頻々として不祥の事起り家門の名を辱かしむる、識者の眉を顰む處なり、然るに中級者に至りては比較的健全なる家庭を有し、其體軀も精神も堅實なるものあり、一家の長たる主人は家計を立つる必要上、終日奮闘努力せざるべからず、勤勞は自ら體軀を壯にし、精神の之に伴ふて健やかなるあり、阪神地方の如き黄金萬能の土地柄にても、中級者の身を持する嚴肅にして謹みぶかきと、清廉質素の家風を維持するとは、洵に不思議なる位なり。

東洋第一の王子製紙と其經營者

前途最も有望なる製紙事業と王子製紙の經營
振りは如何なるか

興國的事業たる製紙業

歐洲戰亂が船舶、鑛業、化學工業、紡績業等に與へたる好影響は何人も之を知る所なるも、特に製紙業が著るしき好影響を蒙りて非常の收益と、非常の發展と、及び非常なる基礎の鞏固を來したる興國的事業の一たることは、たとへ之を概知するも其眞相を知悉する人は少なかるべし。

我輩をしていはしむれば、製紙事業ほど、戰時の收益を以て事業の根底を固くし及び此機會に於て、啻に內國自給の地歩を確立せんとするのみならず、東洋各地に對して新販路を獲得したることの利益が、眞に永久的ならんとするの點に於て、遙かに他の時局關係を凌駕するものはあらざるべし、今や製紙工業は最も早き試驗時代を通過し、次で久しき犧牲時代を經て、實收の時代より、漸く發展大飛躍の時代に進み入らんとしつゝあり、而して此事業の最も有望なる强點は、日本領土內にこれが原料を有すること也、北海道、樺太、臺灣、南洋より、更に多くを望めば露國

と握手して、西比利亞無限の森林をも其原料となし得る點にあり、輸出せる綿糸の一梱は、成る程國益に相違なきも、其眞に日本人の所得たるは、原料を差引きたる工賃のみ、今後の製紙業に至りては原料ぐるめの加工賃なり、其利益の大知るべからずや、生糸、羽二重は半成品なるも、紙は完成せられたる全成品なり、日本が原料ぐるめに輸出し得る商品の大なるものは銅とセメントと紙とのみにして、而して紙は就中純乎たる製品なるに見れば、其前途の希望洋々たるも亦宜ならずや

紙界兩大關の比較

更に之を分り易きやうに紙界の兩大關たる富士製紙と王子製紙に就て觀察せんか前者は公稱資本千萬圓(拂込七百八十二萬圓)、後者は千二百萬圓(拂込九百萬圓)の何れも堂々たる大會社也、試みに兩者最近の決算を擧げんか。

富士製紙大正五年五月末決算

當期總益	一、四七一、八九九円
內償却	五二五、〇〇〇
差引純益	九四六、八九九
前期繰越	八五、一六四
合計	一、〇三二、〇六四
內積立金	九四、六九〇
賞與金	六六、二八〇
恩給基金	一八、九三七
配當金(一割)	三九〇、五〇〇
特別配當(四分)	一五六、二〇〇
配當平均積立	二〇〇、〇〇〇
後期繰越	一〇五、四五七

如何に償却に、配當に、配當平均積立に、又後期繰越に、其收益の豐富なることよ、更に王子製紙を見れば一層驚くべきものあり

王子製紙大正五年五月末決算

當期總益	二、一六九、九三八
內償却	八九三、四八二
差引純益	一、二七六、四五六
前期繰越	一六八、一〇七
合計	一、四四四、五六五
內積立金	六四、〇〇〇
別途積立	四五〇、〇〇〇
配當金(一割二分)	五〇四、〇〇〇
特別配當(三分)	一二六、〇〇〇
賞與金	九〇、〇〇〇
恩給基金	二〇、〇〇〇

之を前の富士に比して利益の多き、配當の多きを見るべき也。

王子製紙とはどんな會社か

然らば即ち二大會社中の優勝者たる王子製紙株式會社とは如何なる會社なるか、明治六年二月の創立にして、本社を東京府北豐島郡王子町に置き、工場を東京府王子、靜岡縣氣田、同縣佐久間、北海道苫小牧、樺太大泊、大阪市善源寺町の六ヶ所に設け、會長三井得右衛門、專務取締藤原銀次郎、取締役大橋新太郎、小野友次郎有賀長文、高島菊次郎、高田直屹、小笠原菊次郎、監査役中井三郎兵衛、西村秀造廣瀨彌三郎の諸氏によりて經營さる、營業の目的は製紙及び電氣供給にして、資本金は前記の如く一千二百萬圓、拂込九百萬圓、諸積立金百十三萬圓を有す、而して其設立最初たる明治六年の歷史を顧れば、王子製紙が今日尙三井關係事業の一たる如く、最初の創立も亦實に小田組、島田組と共に三井家が創立したりし也。

初め明治五年の交、大藏省紙幣寮にて公債証書、紙幣、諸印紙類の發行と共に印刷局を創置せらるゝや、時の大藏省三等出仕澁澤榮一氏、洋紙の需要前途大に有望なるを察し、直に規畫して紙幣寮を通じて、三井組、小野組、島田組に向つて製紙業の起企を奬勵す、是に於て民間に製紙業を起すの議熟し、三井治郎右衛門、澁澤才三郎、小野善右衛門、島田八郎右衛門、齋藤純藏、三野村和助、古河市兵衛等の

諸氏發起となり、忽ちにして資本金十五萬圓の會社設立認可せられて抄紙會社と命名す、時正に明治六年二月にして、之を本邦製紙業の嚆矢となす、實にこれ現時本邦製紙界に於て、外國紙輸入の防遏を主義として、我活躍せる出版界に洋紙の大供給を爲しつゝある王子製紙株式會社の前身也。

發展徑路の曲折

而も此最初十五萬圓の會社が今日の大會社となり、無前の盛況を來せるに就ては其間幾多の變遷と曲折となからずんばあらずして、六工場を有する中、就中工場其ものが東洋第一の設備たる上、王子製紙の中樞とも生命ともいふべきは北海道譜振國勇拂郡苫小牧村の苫小牧工場にして、之が今日隆盛の原動力たる代りに、嘗て此會社を困しめたりしものも亦苫小牧工場なり、蓋し此工場は鈴木梅四郎氏が嘗て三井にありし時、殆と一ケ年間北海道の山野を跋渉して、此好箇の工業地を發見し、三井の重鎭益田孝氏其他の人々を說て設立せしものにて、最初は資本金四百萬圓と稱して工事に取りかゝらしめしも、其廣大なる計劃は工事費だけにて八百萬圓を超過せしを以て、遉が大臺所の三井の內部にても漸く反對の聲高まりて、鈴木氏を包圍攻擊しつゝある折、偶々鈴木氏も亦不幸病に罹りしを以て、此難局に立つ能はずして止むなく會社を辭することゝなり、之に次で高橋義雄氏專務となりしが、氏は人の知る如く溫厚風流の人にして文明的事業家としての素質に欠ぐる所あり、氏を

迎ねし王子製紙は益々紛糾錯雜して社内に於ける反對の聲强く、終に同盟運動によりて排斥さるゝに至り、紛糾すること茲に六年、會社は欠損に重ぬに欠損を以てし株券日々暴落して高橋氏辭職後其後任に擬すべき人物乏しく、遺の三井も之には少ならからず苦心して頻りに後任者を物色の結果、當時三井物産小樽支店長たりし藤原銀次郎氏が、北海道に精通せるの故を以て、氏を擢て王子製紙の專務取締役たらしめんとせしが、氏は快諾するに先立ちて、會社事業の全部を其雙肩に任せ、果斷事に膺るを許さば、蹶然起つて局に任ずべきも然らざれば引受くる能はずとの條件を持ち出し、三井の幹部にては此紛亂せる王子製紙を救ふべき人は氏より外なしと認めたるを以て快よく其條件を容れ、明治四十四年遂に專務となるに及んで、一身を賭して辛苦經營以て王子製紙の繁昌をして今日あるに至らしめたるなり、請ふ苦小牧工場を視察する以前、我等をして王子製紙の主腦たる藤原銀次郎氏を觀察せしめよ。

專務藤原氏の人と爲りは斯くの如し

藤原銀次郎氏は長野縣の人、明治三年の出生なり、夙に笈を負ふて上京し、慶應義塾に入りて刻苦勉學、明治二十四年業を卒ふるや柳莊太郎氏と共に直ちに松江に赴き、松江日報を經營創立せしも、新聞の常として經營難の爲に、難戰苦鬪備さに嘗めしも、性來克己心强き氏の、獨力之が經營の任に當りて克く働き克く戰ひし事

とて、將に殪れんとせし松江日報をして縣下第一の大勢力たらしめたり、惟ふに氏の事業的才能は此時已に發揮せられたりしなり、而して氏は幾もなくして三井銀行に入り、昨の言論界の人忽ちにして財界の人となり、其事業的才能は財界の巨人中上川彦次郎氏に認められて重用され、爾來とん〳〵拍子に立身して、深川支店長より富岡製糸場の支配人となり、更に王子製紙の紛擾中入つて其支配人となり、轉じて三井物産に入り、上海漢口の各支店を經て、臺北小樽等の支店長となり、越ねて明治四十四年高橋義雄氏と交代して、以て會社をして今日あるに至らしめたり。氏の全力を注ぎつゝある苫小牧工場は抑も奈何なる設備を有するか。

氏が全力を注げる苫小牧工場

苫小牧分工場は明治四十三年九月萬端の設備完成して機械の音の響くやうなりし最新式の工場にして、工場用地のみにても五十四萬六千九百餘坪を有し、其他鐵道用地三百四十二萬二千二百餘坪あり、工場は鐵骨煉瓦作りにて建坪一萬三百餘坪、之等の面積によりても東洋製紙界無比の大工場たることを察すべく、更に工場の設備を見れば、調木室には鋸二臺、皮剝機九臺、割木機六臺、鉋削機二臺あり、此室にて原料木材を悉く二尺の長さに切斷し、此穴より柾目無節のものを選別して壅木室に送り、其餘のものは鉋削機にかけて寸斷し、全く小木片となして蒸解室に送る蒸解室には蒸解釜四臺ありて、各一蒸解に原質約十噸を製造す、此他蒸解用亞硫酸

液製造設備一式完備し居り、調木室よりコンベヤーにて運ばれし小木片は、蒸解釜上口より同釜の内へ塡出せられ、同時に亞硫酸液を注入して釜一杯となりし時に、各送入口を密閉し然る後適度の時間内釜中へ適度の蒸氣を送入する時は、木片は綿の如き纖維に分解せらる、所謂オルフワイトパルプ、又は化學的原質これ也。

　壟木室には壟木機十八臺あり、動力は凡て電力を用ゐ、此に要する電動機は七百五十動力のもの七臺、八百五十馬力のもの三臺、合計十臺を備ふ、調木室にて選別せる二尺材がコンベヤーにて此室に送られ來るや、人手によりて一々壟木機に裝入さる、壟木機は恰も大根オロシと同樣の作業にて、オロシとなるべき直徑四尺五寸巾二尺三寸の大丸砥石は、電動機直結の車輛によりて一分間二百回轉以上の速力を以て回轉し、此砥石面上に前記の原料を裝入して、適度の水壓にて砥石面を壓し付くる時は、木材は正に大根オロシとなる、此オロサれたる纖維をグラウンドパルプ又は機械的原室ともいふ、然る後此原質を除渣室及び抄紙室に送らるゝものにて、此處にはサルフワイドパルプ用ゴーザム式除渣機二十五臺、グラウンドパルプ用ゴーザム式除渣機二十二臺、ウエワットマシン八臺、デッカーカーマシン十四臺等ありて、蒸解及び壟木によりて得し所の原質は各別々に眞鍮製の除渣機によりて精粗を選別せし上、ウエット又はデッカーマシンによりて適當の除水を行ふて叩解機室に送る、叩解機室乃ちビーター室には十七臺のビーターと四臺のジョルダンエンジンありて、抄取室にて精選されたるサルフアイトパルプ及びグランドパルプは、ビー

ターにて適度の分量づゝ配合混和せられ、混和中適度の松脂石鹼溶液及礬土液と染料とを混入す、松脂石鹼液は抄紙機によりて抄紙の塲合濡れ紙が乾燥せらるゝ塲合温度のため石鹼狀態より普通の松脂に還元されて紙質をして平滑强靭且耐水性を含ましむるなり、尙ビーターによりて混和されたる原質纖維は、更にジロルヘダンエンジンによつて適度の長さに切斷混和され、抄紙階下の貯槽に送入さる、斯くして調和せられたる精選原質は、何れも長綱式抄紙機によりて新聞紙及び同種の紙質抄造用に供せられ、粗原質は別に丸綱式によりて包裝用及び蠶種紙を抄出す、長綱式抄紙機は新聞用として米國製綱巾百四十二吋のもの三臺と、綱巾百吋のもの二臺あり、前者一分間の速度は七百五十呎一臺六百五十吋二臺にて、後者は一分間四百七十呎の速度なり、此外此室には包裝用丸綱式抄巾百吋一臺と、右運轉用蒸氣機關六臺の設備あり、これを最初の設備とす。

　此分工塲は大部分二階建にして、階下には動力及び糟溜を裝置し、階上を作業室となし動力は抄紙機を除く外は總て電力を用ゆ、抄紙機にのみ蒸氣力を使用するは機關の排氣を抄紙乾燥機に再用する所以にて、機罐は多管式のもの十五臺を有す、斯くして製造されたる品は階上の仕上げ室にて精選し、エレベーターによりて階下の荷造り室に卸し、包裝の上直ちに氣車積とす、原料は多く石狩、十勝、北見、日高の官有林より伐採され、之が運搬には延長四十哩の專用輕便鐵道あり、其機敏迅速は遺に東洋無比の大工塲たるを失はざる也。

新に裝置せし最新式機械

同工場は大正四年に至りて更に建物及び機械に百六十萬圓を支出して、米國製長調式綱巾百四十二吋、抄紙速度一分間七百尺のもの一臺、米國製蒸機關七百速力、米國製ビーター四臺、ジロルダンエンジン一臺、サルファイト原質除渣機一臺、獨逸製グラウンド原質ソーター一臺、英國製水管式三臺鋏筋コンクリート製高さ百八十五尺の煙突一臺、亞硫液製造槽ポンプ等一組を增設せしにより、一ケ月の製產高八百萬磅乃至九百萬磅といふ莫大なる製造力となりたり。

其原動力たる電氣

此等の原動力たる電氣は不凍不溫の支笏湖より發電す、發電力は二萬五千キロワットにて、落差四百二十尺、發電所は苫小牧一、札幌一、江別一にして、苫小牧の變電所には十二個の變壓機あり、電動機は八百五十馬力以下合計六十七臺を有す、大正四年の增設には發電所に深六尺四寸、面積約二千坪の水路尻貯水池を設けて、從來徒らにオバーフローしたる水は之によつて其後一滴も逸流することなく、悉皆電力發生の用に供せらるゝことゝなれり、之に附隨じて發電機發電五千スロワット鐵管水車と變壓機等一組、苫小牧變壓所に變壓機三個、三百五十馬力以下の電動機四臺の增設を斷行せり、此二萬馬力の電力の內一萬馬力は分工場原動力に消費し剩

餘は現に電氣化學工業會社工場、小樽電氣株式會社、及び札幌、江別等に送電し居り其豐富なる電力は實に北海道文明の中心を爲す、勤務社員は分社工場共に社員百名、職工六百名を有し、工場のみにて宛然一村を形造るの多人數にて、苫小牧町はこれ等の人によりて成立するかの如く、更に之等の人々の爲に設て、運動場其他の設備悉く完備し實に一大理想鄕を生出しつゝあり。

舶來品を凌ぐ其上等紙と樺太パルプ

此苫小牧工場に於て製造する紙質は如何なるものかといへば、從來日本にては出來ざりし舶來上等品以上の紙にて輸入防遏最後の目的を達しつゝありとは豈驚くべき事ならずや、而してこれ專務藤原氏が丹精の結果なりといへば、其功績の偉大實に驚歎すべきものあるを見るべからずや、初め氏が三井物產の木材部長として、樺大森林を視察するや、其世にも稀なる密林が、樹木の周圍、最大のものにして七八寸を出でず、宛然內地の竹藪の如くなるを見、到底板にも柱にもならざるより何か使ひ道のなきものかと考慮の結果、不圖パルプ製造を思ひ立ち、若し此足場の丸太にもならざる樺太樹木が、パルプ製造の原料とならば、年々四萬五千噸以上輸入し居れるパルプの輸入を防遏することを得ると同時に、殆ど無用の廢物視され居る樺太の富源を開發し、進んで日本の製紙事業の進運に資するを得る、極めて有利なる國家的事業なりと氣付き、明治四十二年頃より實際の攻究に取りかゝり、三井物產

及び三井合名の幹部諸氏とも協議を重ね、種々試驗や調査を行ひ、一方樺太政廳へも交渉し、愈々大正二年創立委員となりて樺太にパルプ工場を設立し、其茲に至るまでは幾多の歳月と苦心を重ねたるに拘はらず、一時の小成に安んぜずして、更に世界パルプ工場の最も發達進歩したる、スヱデン、ノルウヱー二國、即ちスカンヂナビア半島の優良品と其製造方法を仔細に研究せしめん爲に、林學士柴田榮吉氏を林業視察、殊に樺太木材と北歐諸國産との比較、樺太木材のパルプ原料としての適否調査、當時の王子製紙技師長にて今の取締役高田直屹氏をダイゼスターのエキスパート、即ち其製造法の研究、三井物産の砂川木挽工場主任小笠原兼次郎氏をパルプ販賣及び其他の材木取引實況調査の爲め、同時にスカンヂナビア半島、獨逸、墺地利に派遣せしが、三氏の報告期せずして藤原氏の意見と一致し、樺太の木材はスカンヂナビア産と同樣、パルプ製造材料として最適のものなることを實證せしにより、創立委員の議決し、下等のパルプ製造機械ならば日本にても間に合ふにも拘はらず、スカンヂナビア産以上の紙を製出する目的の爲に、最上等の機械を彼地へ注文し、大正三年七月にやつと出來上りしを以て、仝年十一月建物の設備、機械の据付を完了し　スヱデンより專門の技師を招聘して局に膺らしめ、大正四年四月より目的とする品物を製出し、日夜品質の改良工夫を施せる結果、今日にてはスヱデン産の一等品に比較して毫も遜色なき迄に進み、今後は多量の製出を必要とするに至りたり、樺太の蝦夷松、トヾ松、其無盡藏の無用の樹林は、藤原氏の力によりて開

發せられ、初めて國家有用の材となりしにあらずや、王子製紙の國家に貢献せし功勞、特に藤原氏發見且應用の功蹟を感謝せざるべからざる也。

其電力販賣は他を利しつゝ會社をも利せり

苦小牧工場には更に大なる副業あり、何ぞや、電力の販賣これ也、初め二萬馬力の電力は會社にて一萬馬力を使用するも、剩餘の分を如何にすべきやとは藤原氏の苦心せし所にして、札幌及び小樽電氣株式會社に一千馬力を送電するも猶九千馬力の餘分あり、此分を如何にすべきやと其遣り先に惱みつゝある折の事なりき、現時電氣化學工業株式會社常務取締役藤山常一氏が、九州に於ける窒素肥料會社と衝突して會社を辭し、窒素肥料より少なからず迫害を受けつゝ、事業の出資者を求め居りし時とて、藤山氏は一日團琢磨氏を訪ふて事業の有望なるを說き、團氏は日本が米産國なるにも拘はらず外國より肥料を輸入しつゝあるは遺憾なり、此時に當つて電氣化學によりて肥料を製するは國家的事業なりと稱讃し、其事業の相談者として藤原氏を紹介したり、藤原氏は一日藤山氏に會見して事業の計畫を聽取する所あり劈頭其胸に浮びしは、此事業は電力を安價に供給すれば必ず成功するといふ事にて而も苦小牧發電力の剩餘電力分配に苦心せる其血が直感的に躍り上り、直ちに苦小牧に於て事業に着手すべきを說き、遂に三井より三十萬圓の出資を仰いで、氏は專ら藤山氏を助けて事業に着手することゝなり、次第に成績を擧げて基礎鞏固となる

に及んで、大正五年春五百萬圓の株式會社を組織せしも、一人にて多くの會社に關係するは失敗の源なればとて、專務に太田黑重五郎氏を、常務に藤山常一氏を推して身は取締役の位置に止まり專ら王子製紙の發展に努力せらるゝも、八千馬力の電力を化學電氣會社苫小牧工場へ送ること、なり、藤原氏の計畫は理想的に完成したり、而も昨年王子製紙の工場擴張と共に、さしも嘗て電力の剩餘を憂へたりし會社は今は反つて電力の不足を感じ、第二の發電所を作り、更に第三發電所の道程に上るべく、三百萬圓の社債を起せし所、會社の信用と藤原氏の德望によりて、締切以前募集額に達し一ヶ月を經ずして社債にプレミヤムを生ぜしは、之を大正二年藤原氏が引受け當時資本金六百萬圓にてありしものが、僅に四年間にして資本金千二百萬圓となりしと共に、驚くべく事業的才能と、敏捷なる活動の力にあらずや。

藤原氏の改革的方法と其手腕

是に於て氏が既往四ヶ年間如何にして經營せしかの其遣り口を觀察せざるべからず、初め氏が王子製紙を經營すべく、先づ苫小牧工場を視察せし時に、先づ起りし考案は天然の湖水たる支笏湖を從來より一層有利に利用して莫大なる電力を起し、會社に要する以外の動力を他に供給し事業の成績を擧ぐる事にて、氏の胸底には深くして强き確信を抱き、此信念の下に積年鬱結せる社內の因襲を打破すべく、快刀一揮、大改革を斷行すると共に、自己も亦會社と運命を共にし、事若し成らずんば

自ら倒るゝの決心にて、自己を鞭韃すべく、全財產を投じて會社の株を買ふ、當時全社の株は永年の不振により五十圓拂込株は十八圓內外に、二十五圓拂込の新株は無代にても引受くるものなき程に下落し居り、之を融通するも何等の益なき一片の白紙に過ぎざりき、此財界に何等價値なかりし株を、而も全財產を投じて買ひし藤原氏の心事は、事若し成らずんば斃れて後己むとの決心を有したりし也、是に於て乎入社以來曉星未だ空に殘る時分より家を出でゝ、午前七時には既に會社にあり、販賣、庶務、技術に關する一切の書類を檢閱して之に對する返事の認め方を社員に命じ、直ちに社を出でゝ外部の活動に從事し、奮鬪一日、夕陽西の空を染むる頃、再び社に來りて社員に命じたる返書の檢閱を終り、同時に諸帳簿諸傳票等を調査し夜は深更に至るまで社交に勉め、不斷の刻苦と勤勉に二ヶ年の星霜を送り、爲に久しく衰運の雲に掩はれし會社は漸次前途の曙光を認めて、發展向上の途を辿るに至り、王子製紙は此間に於て漸く蘇生の緒に就きたり、今其改革の大要を摘記すれば

第一遠州に於ける串部及び氣回の兩工場は年々水害の襲ふ所となり、損失又損失を重ね同工場に於ける一大病根なりしが、氏は就任早々此兩工場の大改革を行ひ、爾來五年間殆ど水害を耳にせず、此間に於て兩工場は其利益金を以て自ら固定資產を償却し、大正五年上期より兩工場とも固定資產が零となるべく進展せり、日本に於て十萬圓乃至二十萬圓宛利益ある工場を零とする事は、恐らくば王子製紙を以て嚆矢とするならん、第二は苫小牧の製紙工場を擴張せし事にて、元來苫小牧工場は

八百萬圓もかゝりし東洋第一の大工場なるにも拘はらず、其生産高は一ヶ月約四百萬封度位なりし普通日本にては一ヶ月百萬封度の生産力ある製紙工場は資本金百萬圓にて出來る事になり居る故に、八百萬圓の資本に對し四百萬封度の製造を爲し居りては算盤の引合はざるは自明の理也、茲に着眼せし氏は仝工場の改良工事を斷行して各方面の改修を爲し、一ヶ月八百五十萬封度の生産力あるに至らしめたり、かくして後氏が第三の改革を施し仝工場の基礎をして萬代動がざるべく鞏固ならしめしは、上に詳細記載したる電氣事業の發展にして、剩餘電力の供給これ也。

藤原氏は事業家の典型也

記して爰に至れば讀者は王子製紙の隆盛と藤原氏の人と爲りを大略推知せらるゝなるべし、蓋し其事業の能力を充實して之を發揮するの困難なるは、猶其使用人の能力を發揮せしむるの難きと其揆を一にするものなり、其事業の能力を充實し、使用人の才能を發揮せしむるの程度が、文明事業家の優劣を分つ唯一の標準機なりとすれば、蓋し藤原氏の如きは文明事業家中、最も卓越せる事業家にあらずして何ぞや。

小金を節せざれば大金を使用し難し

無駄を省くといふ事は云ひ易くして行ひ難きことなり、手數を除くといふ事も云

ひ易くして行ひ難きことなり、無駄を省くといひ、手數を除くといふは、必要なものまでも省き除くといふ消極的の意味にあらず、無駄を省き手數を除くとは仕事の上より不必要なる無駄を除き、使用人より無益の手段を省きて其能力を充分發揮せしむる積極的の意味に外ならず、氏曾て曰く、『小金を節せざれば大金を使ひ難し』と、氏が事業界の救ひの神として、破綻整理の妙手として其名嘖々傳稱さるゝもの豈所由なからずや。

破綻整理の例

今其破綻整理の例を、氏の從事せしものゝ一二より摘記すれば、王子製紙の事は已に詳說せり、嘗て三井の木材部が頽廢衰微して、氣息奄々たり時、之に飛び込んで年々數萬圓の輸出を見るに至らしめしは氏の力なり、又其三井物産小樽支店たりし時、赴任前の仝支店が、頗る華美に流れて無益の經營にのみ逐はれ、從つて事業の成績も擧らざりしを見て斷然改革の一大鐵斧を下して、從來の慣習を打破し、自ら詰襟の洋服を着て事務を執掌せしにより自然社員を風化して、奢侈の風を改むるに至りたり、目下札幌停車場通りにある宏壯なる一大建築物鐵道倶樂部は、實に物産の支店なりしを氏が改革第一に賣却せしもの也

氏の情實に囚はれず、習慣に泥まず、果斷決行己の信ずる方面に進む人たることは斯の如し、これ蓋し能力の充實發揮を本領とするによるものにて、前に詳說せし

如く、高橋前專務の後を襲ふて紛糾錯雜、暗雲深く覆へる王子製紙に入りて、今日の盛況を見るまでに執り來りたる能力發揮の方法は、人をして驚歎せしむるものゝみに滿つ、吾人の氏に對して最も推服するの一事は、上に說く如く其往く所必ず何等かの成績を擧ぐること是也、少時松江日報を經營しては一大勢力を占め、三井に入りては臺灣樟腦の專賣權をサミユル、サミユルの手より奪つて三井物產の手に收め特に僅々三ケ月にして三十萬石の臺灣米を滿洲の野に輸送せるの一事は、氏が活歷史中最も光榮ある尊敬すべき一頁にして、若し夫れ米國に於けるサイエンチフキツク、マヂシントの具体的實例を我國に見んと欲せば、吾人は直ちに王子製紙會社に於ける氏の經營振りを推薦するに躊躇するものにあらず、氏今年四十六歲、其春秋に富めること斯の如き、前途の洋々たること以て知るべき也。

■貿易前途に暗雲搖曳

でいざう生

我が貿易は昨年よりも盛況を示し、前途益好望なるものあり、然れども近時頻々として突發せる諸材料は、我が貿易界の前途に一種の暗雲を蔽ふの惑なき能はず、曰く支那關稅改正、曰く印度關稅引上、曰く印度洋に獨艦出沒、曰く南洋方面の警戒、以上の如くに惡材料の頻出するは貿易界の一大障害なりと雖も、而も順調に進展せる貿易が、一朝にして槿花の夢と化するが如きことは斷じて無し、たゞ此際國民は徒らに大出超に樂觀狂喜せずして、同時に緊褌一番益々奮勵、海外販路の擴張に力を注がざるべからざる也。

藤山雷太氏と大日本製糖

＝八年前の大欠損大破綻を顧みれば、往事茫々
眞に夢の如き今日の大成功大發展＝

無前の好配當

人生の事豫め知るべからず、明治四十二年、日本の社會の上下を震撼したる大日本製糖會社の破綻事件は、社長酒匂氏の自殺と相待ち、痛切極る敎訓を社會に與へて余りありき。明治二十九年一月創立されて今此の大なる波瀾を經たる製糖會社の紛糾を擴き難を解き、其の前途に大なる光明を見せしむるとは實に至難の業なりき。而も此の至難の業は遂に今日に於て成就したり。

四十二年上半期の大欠損、大破綻を修理すべき新らしき經營者、現社長藤山雷太氏の巨腕に依り、一朝にして復活の氣運を勃興し、如何に積極的に、進取的に、製糖界に雄視するに至りしか、之れを左の表に見よ。

期間	利益金	配當
四十四年上半	七四九	五〇
同　下半	八一四	五〇
四十五年上半	八五三	六〇

大正元年下半	九六七	六〇
同　二年上半	一、二三九	七〇
同　　下半	一、一一四	八〇
同　三年上半	一、一四〇	八〇
同　　下半	一、二〇四	九〇
同　四年上半	一、四六四	一、〇〇
同　　下半	一、四二三	一、〇〇
同　　五年	一、七九四	一、二〇〇

嗚呼僅々八年の歳月を以てして、一千四百萬圓の負債を整理し、今日半期に百七十九萬四千圓の利益を擧げて、一割二分の配當を爲したるが如きは、之れ此の一年を以てして、人を驚嘆せしむるに足らざるか。

尙ほ今期の決算報告を示せば左の如し

當期純益金	百七十四萬九千八百三十六圓五十五錢
前期繰越金	七十二萬九千二百九十二圓二十四錢
合　計	二百四十七萬九千百二十八圓七十九錢

內譯

法定積立金	九萬圓
別途積立金	二十五萬圓
大里工場實收費第九回減價償却金	二十五萬圓
臺灣工場固定財產減價償却金	二十五萬圓
社員職工恩給扶助積立金	二萬五千圓
役員及社員賞與金	十三萬五千圓
株主配當金(年一割)	六十萬圓
株主特別配當金(年二分)	十二萬圓
後期繰越金	七十五萬九千百二十八圓七十九錢

一千八百万圓の大會社

而も尙ほ此の好成績、大成績に飽かずして、更に大飛躍大發展を試むべし、六月十五日の總會に六百萬圓の增資を決議して、今や一千八百萬圓の大會社と化したるも、之れに就て社長藤山氏は語つて曰く、

大日本製糖會社も已に第二期に進展しつゝあり、即ち第一期の粗糖時代を經過して、第二期の精糖時代に入りつゝあり、粗糖時代の我が糖業は內地需要を主とし之れが供給を力めしが、今後の糖界は海外輸出時代となりし也、我が精糖業今後發展すべき市場は支那也、我社は斯の目的の爲めに今回の增資を要せしもの、即ち大里工場の擴張資金として、第一回の拂込みを要求す、東京工場及び大阪工場は內地消費の目的を以て建設されたりしと雖も、斯の工場を以て直に支那向き輸出糖工場となすは不便也、支那向き輸出糖工場としては、九州の工場を以て尤も便利とせざるべからず、而して吾社は更に進んで支那工場を設くるの時機あるを信ぜんとす

と、其の積極進取の大方針見るべきに非ざるが。三百萬圓の欠損を擁し、一千四百萬圓の負債を呑負ひ其の株式七八圓に暴落して、尚ほ且つ買手を見出すこと能はざりし同社が、今此の復活の盛運を見るは眞に一夢の感ある也。

外糖驅逐の大功勳

日本製糖會社を語つて脱すべからざるは輸入驅逐の偉業也。明治の初年より我國は多額の精糖を外國に仰ぎしは人の知る處ならん。此の糖精輸入を根本より打破して、反對に多くの輸出を爲すに至らしめしは、之れ本邦最大の精糖會社として生れたる大日本精糖の賜には非ざるか。

明治二十七八年の日清戰爭、我國の企業界は快風順潮を以て色めき渡りし時、日本精糖界統一の目的を以て、鈴木藤三郎氏の日本精糖株式會社は生れたり。此の資本金三十萬圓の會社こそ、實に大日本製糖會社の前身にてありし也。當時砂糖精製を主として、側ら氷糖製造に從事したりしが、輸入糖たる外國品の市場に跳梁跋扈する時、之れに對抗角逐する、眞に容易の業に非ざる也。然るに大日本製糖の前身たる日本製糖が此の至難の業に當りしことは其の意氣何ぞ其れ壯なるや。

かねて洋行中の鈴木氏は歸朝して、三十二年其の資本を增して二百萬圓となし、大に發展の道に進まんとせしが、三十五年、砂糖消費稅酒精及精酒含有飲料稅法實施に方つて、外糖の見越輸入、其他の事情に依りて商況の不振を來し、三期を通じて無配當の狀態に甘んぜざるべからざるものありき。

されど三十六年の後半期より歐洲に於ける甜菜糖の不作は大に同社の發展に利して、工場の增設、販路の擴張は此の時に行はれ、其の臺灣に粗糖工場を置く頃は、已に支那、朝鮮に大なる市場を見出して、日本糖の勢力扶植され、大阪、大里の精糖工場は併合され、隆運昌々たるものありき。

悲むべし日糖事件により大に會社の信用を疑はれしも、之れ朽皮を剝ぎ、腐肉を除きて勃々たる新生命の喚起さるゝの時なりき。果然創痍滿身より、復活の歡聲を上げて、四十四年七月には已に五分の配當を爲し、臺灣第二工場を增設し、社債及年賦借入金も豫定通りに運ばれ、遂に六百萬圓の增資を見るに至りしとは、同社の內容豐富なるを知るべく、あらゆる困難に打ち充ちて外糖を敗り、日本國の勢力を示すに至れり、同社の如き其の前途大に刮目すべきものある也。

同社の幹部は如何なる人か

同社に於て千株以上所有の大株主は、左の如き諸氏を數ゆ

藤山雷太　星野錫　中島伊平　岩崎吉松
濱本義顯　神田鑛藏　野村德七　瀨戸口又
伊澤良立　土橋平治　加賀豐三郎　指田義雄
大海原尙義　滿武卓一　今井又治郎　殿村梅三郎
横田庄次郎　中村清藏　町澤政次郎　飯田延太郎
笹田一尙　齋藤喜八　古森龜衛

而して同社を經營せるは實に左記の諸氏を以てする也。

取締役社長　藤山雷太　　取締役　星野錫
常務取締役　高山長幸　　同　濱本義顯
同　伊澤良立　　監査役　指田義雄
取締役　中村清藏　　同　大海原尙義

皆これ財界に大なる信用と多くの尊敬を拂はれつゝある知名の士也。

慧眼、敏腕なる藤山社長

藤山氏は江藤新年を產み、大木喬任を產み、大隈重信を產みたる西九州佐賀縣の人也。氏の家はもと鄕士にして、藤山寬右衛門の三男也。長崎縣の師範學校を卒業し、後慶應義塾に入り、卒業するや三井に入りて其の才幹器量故中上川彥次郎氏の看取す處となり、同氏の知遇を受けて股肱として遇せらされ、遂に中上川氏の義妹を娶つて、其の姻戚の關係をば作るに至りし也。

眼中英雄なく容易に人に許さざりし中上川氏の激賞措かざりし藤山氏が三井銀行抵當掛長より、芝浦製作所長となり、王子製紙專務取締役となり、東京市街鐵道專務取締役となり、日本火災保險株式會社副社長と歷任して、遂に大日本製糖株式會社取締役社長となりし間、如何に周到なる智謀と剛敵なる膽力と、百折屈せざる努力を以て多大の成績を擧げたるか、苟くも氏の名を知るもの、氏が財界に於ける實力を看取せずして己む能はず。

日糖事件一度び天下を震撼すや、たゞ其の破綻の大なるに驚き、茫然として座視するのみの時氏は澁澤男の勸誘もだし難く、遂に進んで日糖社長となるや、毅然と

して動かず、泰然として撓まざる勇氣を以て着々改革の鐵斧を揮へり。

其の切れ味よき名刀にも比すべき、所謂快刀亂麻を斷つ大手腕は百千の弊根を絕ち、躍々たる新生命を扶植し來れり。其の氣息奄々として旦夕を待たれたる大日本製糖を復活して今日の隆運に向はしめしは、其の異論を斥け群議を排し、猛斷果決所信に勇進したるに在り。

藤山氏は慧眼の人也、敏腕の人也、而も亦誠信の人たる也、温情の人たる也。先年臺灣工場に勤務したる、金平豐太郎氏の極度の神經衰弱に罹り、歸京の途中船室にて自殺するや、藤山氏は金平氏を吊ふ頗る厚く、同志を糾合して數萬金を集めて遺族送れるが如き、人をして其の多感濃情に泣かしむるものあり。氏が芝浦製作所王子製紙時代より、引き立てたる人々の恒星を回ぐる遊星の如く、其の周圍を擁して藤山派を財界の一角に樹立せる洵に故あるを知るべき也。

氏は今大日本製糖以外、東京株式取引所の理事、東京印刷、日本火災保險、東京瓦斯、明治製煉、帝國商業銀行の取締役、東京商業會議所の會頭として中央財界に大なる實力を發揮しつゝあり。

温厚の君子たる常務取締役

慧眼敏腕なる藤山氏を扶けて、大日本製糖を整理し、旭日昇天の隆運を將來したる同社の常務取締役高山長幸氏あるを忘るべからず。

氏は伊豫の國大洲の人也、大洲は加藤清正、福島正則と勇名を競ひたる加藤光泰を

藩祖とせる四萬石の小藩なれども、曾つて中江藤樹の仕へたる處にして、流風遺韻今尙ほ存す。大分縣知事力石雄一郎は大洲の人也。富山新報主筆倉辻蛇は大洲の人也。高山氏亦此の南豫の地に生れし人也。

氏は慶應義塾を出でて、夙に中上川彦次郎氏の推輓に依り三井銀行に入り、長崎支店長を勤めしが、後止めて大日本製糖の常務取役として、其の快利なる手腕と寛洪なる人品財界に異彩を放つ。

氏は温厚玉の如き君子人也。其の温和なる容貌と敦厚なる氣品は、辭令に巧に、應接に妙を得たると相待ち、直に春駘蕩として萬物を薫ずるの思あらしむ。而も商戰場裏に馳聘するに至つては、深思熟慮措置宜しきを得、緩急度に叶ひ、清くして汚れず、潔くして正しく、何處迄も文明的實業家の風ある也。社長藤山氏は氏の同窓の先輩にして、此社の常務たる亦實に先輩を扶くるの意に外ならず。

氏は江原素六翁の女婿にして、江原翁の愛娘は實に氏の夫人たり、政界の清敎徒たる翁は實に此の誇るべき愛婿ある也。

同社には尙ほ常務として、高山氏と相並び伊澤良立氏あり、伊澤氏は三井にありて實業の見習をなし、後大阪の富豪住友家によりて羽翼を爲したる人なれは、其の沈着なる、靜肅なる、温藉なる、寛厚なる、實に住友の色彩躍如たるものあり、其の住友を出でゝ三井物產大阪支店に次席となるや、才鋒鋭利切れすぎる如き支店長福井菊三郎氏の劍の如き才氣に、之れは玉の如き德を以てし、温乎の容と、靄然たる貌は

大阪支店副長として重きをなしたるものなりき。

氏今三井を去り、大日本製糖の幹部として、謹厚にして公平なる、温藉にして雅量に富める、洵に萬人の尊敬を受けつゝあり。（以上大正五年九月記）

大日本製糖最近狀態批評

同社の臺灣工場は昨年十一月五日より製糖作業を開始したが、一昨年は未曾有の豐作で、當初分密糖產額豫想高六十三萬擔と稱せられたに拘らず、期末（去る四月末）の製造高既に前年度の產額五十九萬擔を超過して居るから、總產額六十五萬擔以上に達すべき事は確實となつた。現に同工場創設以來の盛況を呈して居る、處で此六十五萬擔以上は如何に處分せらる可きかといふに、內五萬二千擔は一種糖、甘三萬擔は輸出糖、殘り卅七萬擔は內地消費糖として振別けらる可きが、併し此內地消糖卅七萬擔は全部分密糖として內地に消費せられるで無くして、少く共內十五萬擔は他社から割安に買入られた分密糖と共に、精製糖の原料に使用せられるのであるから、分密糖の儘內地に振向けられるのは甘二萬擔內外であらう。勿論之は來る十月末決算迄に明かとなる譯であるが、大體此豫定に大差なしとしても來る十月末決算には今一段利益增加を見る可き筈である。

却說本年上半期即ち去四月末決算の成績は什麼であつたかといふに、損益計算に於て總收入二千二百六十三萬七百餘圓、總支出千九百九十九萬九千九百餘圓を計上

し、差引二百六十三萬七百餘圓の利益を擧げた。之れより社債金二百廿三萬三千七百圓(年利七分)の支拂利息十三萬七百餘圓を差引き、二百四十九萬九千九百餘圓の純益を計上したのである。之を前期(昨年十月末決算)昨年十月末決算と較べると左の如くである。

	六年上期	五年下期	比較增加	增加割合
當期利益金	二、六三〇、七二円	二、一六六、四五〇円	四六四、三二円	二割一八七
內社債利息	一三〇、七八一	一三〇、七八一	——	——
差引當純益	二、四九九、九八一	二、〇三五、六六九	四六四、三二	●一八五
前期繰越金	八五四、七九八	七五九、一二八	九五、六七〇	●一二三
合計	三、三五四、七七九	二、七九四、七九八	五五九、九三一	●一六七

即ち前期に比し二割近き純益の增加である。而して該純益を拂込資本金額に對比するに、前期即ち昨年下半期は資本金一千二百萬圓中拂込資本金全額に對し、三割四分の利益年率であつたが、今期は六百萬圓の新株を募集し拂込金千三百五十五萬圓(總資本金額千八百萬圓)となつたから今期利益年率は三割七分强と成つたのである。增資の爲め資金が餘計に運轉されたとはいふものゝ、拂込資本が激增したに拘らず、尙且つ一分强の利益年率增加であるから、若し前期通り千二百萬圓の全額拂込みで止まつて居たなら、其利益年率は優に四割一分六厘强で、前期より七分六厘から增加であらねばならぬ。以て如何に今期が純益を增加して居るかゞ分る

而して此激增した純益を如何に處分したかといふに、前期繰越益の八十五萬四千

七百餘圓を加へた、合計三百卅五萬四千七百餘圓から各種積立及び固定財產減價償却金並に後期繰越金の合計百八十一萬九千七百餘圓の社內保留金として積立て、殘部百五十三萬五千圓を社外へ株主配當及び役員社員の賞與金として分配した、即ち社內保留金は當期純益金に對する七割六分八厘で、社外分配割合は六割一分四厘である。之を前期の夫れに比べると社內保留に於て約九分一厘(前期は八割五分九厘)の減少で、社外分配に於て一割九厘の增加である。單に之のみの上から觀れば如上の當期處分は多少意見を挾むべき餘地はあるけれ共、株主配當の上から觀れば至極穩當であることが知れる。即ち同社は昨年下半期に於て普通一割特別五分、合計一割五分の利益株主配當を爲した、然るに今期は昨年中の豐作氣構へで一般に增配を期待して居る處であるから、場合に依つては(四割以上の利益年率を得たる場合)二割四五分の配當を爲すかも知れぬと、期待されて居たに拘らず、利益年率は四割を超過すること一分六厘であつたのに、株主配當は僅々五分增しの二割に止めた。這は勿論、即ち大正六年に入り兎角天候不順勝にして、作柄思はしからざるを見越し、十分足許を用心してのの方法で、一般砂糖株が市場の大立物として注目されつつあるを見込み、政略的に配當の增加を衒はんとする會社の遣り方とは、大に趣きを異にせるを認めばならぬ。之を前期と比較すれば左の如くである。

	六年上期	五年下期	比較增▲減
當期純益金	三、三五四、七七九円	二、七九四、七九八円	五五九、九三一円
回期繰越共			

法定積立金	一三五、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇	一一〇、〇〇〇	一五、〇〇〇
別途積立金	一〇〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇	二五〇、〇〇〇	五〇、〇〇〇
配當準備積立	三〇〇、〇〇〇	——	三〇〇、〇〇〇	——	三〇〇、〇〇〇	——	三〇〇、〇〇〇
固定資産償却	二五〇、〇〇〇	——	二五〇、〇〇〇	——	二五〇、〇〇〇	——	二五〇、〇〇〇
大里及臺灣工場減價償却金	——						
恩給扶助積立	三五、〇〇〇		▲五〇、〇〇〇		▲五〇、〇〇〇		
役員社員賞與	二一〇、〇〇〇						
配當(年一割)	六六二、五〇〇	(一割)六〇〇、〇〇〇	一四五、〇〇〇	六五、〇〇〇	一四五、〇〇〇	六五、〇〇〇	一四五、〇〇〇
特別(年一割)	六六二、五〇〇	(五分)六〇〇、〇〇〇		六二、五〇〇		六二、五〇〇	
後期繰越金	九〇九、七七九	八五四、七九八		五四、九八一		五四、九八一	
社内保留率	割●七六八	割●八五九		割●〇九一		割●〇九一	
社外分配率	●六一四	●五〇五		●一〇九		●一〇九	

斯くの如き優良の成績を擧げ得たるは如何なる營業狀態に基くかといふに、內地への取引は前期末來より漸次好況に向ひ、砂糖高の入電と一般經濟界の活況とに依り、歐洲開戰以來の新高値に商內されたるに依る、尤も昨年末金融界繁忙の折柄、獨逸の媾和提議の報に接し悲觀材料續出した爲め、商況著しく不振に陷ゐり、殊に外糖安の入電に氣配大に崩れ、一時分密糖十七圓二三十錢見當に迄落込んだ爲め、尠からず前途の成行を氣遣はれた。併し幸ひにして其後相場落付き、今期末に入つては分密糖十八圓七十錢といふ新高値を呼んだ爲め、頗る有利に取引する事が出來た。別して昨年末の最高値時代に大部分を約定して居たことが、今日の巨利を博した最大原因であるらしい。次に輸出取引に於ては支那への輸出が例の銀塊相場の亂高下で商談の標準を失つたのみならず、內外時局の不安等の爲め兎角商談捗らざりしも、年末需要季に入り各市場の在庫品缺乏と相俟つて約定出荷一時に輻輳して、一擔平均十六圓六十錢以上を以て瞬く間に大部分取引濟となつた。尤も印度方面は瓜哇糖安に押され、朝鮮方面は各社の競爭激かつたため、豫想通りの利益を見る事が出來なかつた模樣であるが、全期間を通じて採算すれば先づ以て、好良の成績を擧げたもので、內地取引の好況と共に前記の如く優勝の地位を占むる事が出來たのである。(經濟時論參照)

野咲きの一輪花

(岡山にて)

梅田から大和屋の見習連中十五六名、笑香をおん大に奉りて乘り込めるに車室を同ふせしを以て神戸よで立ちづくめの慘めさ亦格別、姫路まで食堂にマゴつく、岡山へ下りて錦園に向ふ、何んだがガサツな家なるかなと思ふ、玄關正面の額に拜山翁のものぜる詩かゝげらる、脈々幽情筆底通とある、諛に近しといふべし、酒到酣前詩到妙、此歡足以傲王公といふ轉結、いよ〳〵呆れざるを得ず、仲居は至つて親切、通り一ぺんの客に對して能く世話しくれる、それと沿室の心地よきとは此旅館での寢むべき點、庭園はなつて居らず、俗の俗なり、十六七の少婢英ネルを着メリヤスの帶を締めたるがあり、瞼毛の長き智力の發達した其眼眸人をうつとりせしむ、この一輪の野花却つて大和屋連中よりも優れたるに、詩情そゞろに湧く、嶺雲の戀した月見草のやうな女は這ういふタイプの女ではなかつたらうかと思ふ、今も其可愛い女の姿がまぼろしのやうに眼前に浮く、やさしき彼の女の清き姿、清き心も、いつしか人生の悲しみに泣くであらう、あゝ神の如き小女よ、其肉を汚すとも、其心を汚すなかれ。

中日實業會社と其經營人物

＝此夫君にして此好女房役＝

東洋の寶庫たる桃冲鑛山

自然の恩惠優渥にして天產の豐富なる楊子江流域は、列國の垂涎措かず、世界の資本家は此處に其の富を下して自家の運命を建設せんとしつゝあり。澁澤男の熱心なる首唱の下に設立され、倉知鐵吉森終氏等を幹部とするの中日實業會社の如き、實に列國の虎視耽々たる世界の寶庫に日本の分前を確定せんとするものならずや。

同社の大なる苦心と努力を拂つて得たる桃冲鑛山の如きは、東洋第一の稱を恣にするなり、其の內容の豐富にして、其の成分の良好なる他に多くの比を見る能はず鑛石は主として赤鐵鑛なるも我が八幡製鐵所に於て使用せる大冶鑛山のものよりも燐分少き優良なる品質を有ち、而も尙ほ硫鐵鑛をも含有し、其の同一時代に發生したる鑛石は製鐵の原料とするに足るべく、夾雜物としては柘榴石、硅石及び硫化鐵鑛のあるありて、其の豐饒なる天產地秘眞に東洋の寶庫たり。

人は支那の鑛山を語り、必ず大冶鑛山を艶稱する也。されど農商務省技師西和田氏は桃冲鑛山と大冶鑛山の鑛石を比較してたの言を有せり。曰く

兩鑛山の含有物、鐵に於て大冶は六二、九四に比して桃冲は六三、九〇、硅酸に於て大冶は四七五桃冲は三、七〇滿俺に於て、大冶は〇二九桃冲は〇、二三燐に

於て、大冶は〇〇、九三、桃冲は〇、〇三三、硫黃に於て大冶は〇、〇四一桃冲は〇、〇四七

と斯言に依れば、桃冲鑛山は大冶鑛山に比して決して遜色を見ざる也、殊に鐵に於て大冶を措ては以て東洋製鐵會社の基礎原鑛たるを羞めず。而して大冶鑛山以上採掘の容易にして、鑛石運搬に至便なるは以て大冶を壓するに足れり。見よ大冶より上海に出づるよりも其距離に於て、楊子江二里の上海より三百里の地點に於て、存在する桃冲鑛は、已に地の利に於て優秀の位置に在るもの也。

礦量豐の大鑛山

此の支那安徽省繁昌縣に在り、面積三十三萬坪を有する桃冲鑛山は、東山、西山の二より成り、地形は一體に山地なれども起伏甚しからず、概して調和好き山勢にして、東山延長三千三百尺、高さ二百五十尺、幅二百尺、鑛床の下底は既知線以下六百五十尺。西山は延長七百三十尺、幅百尺、深さ百尺、鑛床の下底は既知線以下四百尺、されば其の鑛量實に九千噸に上るべく、其の採掘量を七掛として優に六千三百萬噸を採掘し得べき也。

もと此の鑛山は、上海にある支那人會社裕繁鐵鑛公司の所有なりしが、民國三年十月天津日本領事主會の下に、裕繁公司代表者と契約を訂結して中日實業會社の利權に屬するに至りし也。當時此の大鑛山の豐富なる內容に垂涎したる輩の、新聞を籠絡して煽動的の筆鋒を用ゐしめ、遂に無智の民衆を煽動して袁總統に鐵鑛國有案

を發布せしめ、裕繁公司の既得權を取消さしめんとしたりしが、大正三年九月に採掘權を許可して十一月末發布の鐵鑛國有案に依りて、其の効力を失はしめんとする理不盡なることは到底萬人を首肯せしむるに足る能はず。邪は正に勝つを得んや、遂に裕繁公司と買鑛契約一年後にして、公然支那政府の承認する所となりたるは必ず到着すべき結論なりし也。

安徽省繁昌縣に在る同鑛山が、楊子江の南岸荻港の東方約十五支里、我が二里許りの處にあれば、荻港は以て此の交通の便に資すべく、其の水深三十呎内外五六千噸の滊船を自由に横付けせしめ得べき良港を、其の短距離に有することは中日實業會社の爲め喜ぶべきことならずんば非ざる也。

安徽江西の炭田

中日實業會社の事業は、單に之れのみに非ざる也。同社は大凸山炭鑛を有し樂平炭田を有す。

大凸山炭鑛は安徽省懷寧縣に在り、大正五年五月漸く試堀の許可を得たるものにして、鑛區面積百六十萬坪重に無煙炭を產出し、該炭分平均七十一パーセント、灰分十七灰あり、其の内容豐富ならずとせず。該炭鑛は安徽省の首府安慶城の北十五里の處に在り、走路沮々として砥の如く、以て鐵路を布敷すべく、其の交通運搬の至便なるは該炭鑛の誇るべき一事也。

樂平炭田は、江西省樂平縣下に在り、楊子江岸の開港塲九江より鄱陽湖を經て水

路約百五十哩の地點に位し、餘干炭田に連亘し、延長五十哩面積四百萬坪の大炭田にして鑛量實に一億萬噸と測定さる。其の大正二年試掘を出願して、大正五年九月に許可を得たるは、以て利權獲得の激甚なりしを知るべく、其れ程内容充實して多くの資本家をして垂涎せしめたるを知るべき也。

武昌漢口の電話事業

中日實業會社の事業は尙ほ數ふべきものあり、武昌漢口に於ける電話建設請負工事と、北京其他の電話材料供給の如き日本工業の勢力を支那に表示するに於て誇るべきことならずんば非ず。

元來支那に於ける電話事業は、英國、米國、獨逸の占斷する處となり、到底日本の此の中に割り込むこと能はず。此の有利なる事業をして電煙過眼する已むべからざるものありしが、中日實業會社は奮然として此の好望なる事業に參畫すべく、エリクセンウエスタン二三外國會社と猛烈なる競爭を試み、武昌漢口に於ける電話事業に於ける落札を遂に同社の手に歸せしめたる同社の新運命は恐くは、此の新事業に依りて益々開展せらるべきか。

尙ほ武昌漢口の電話事業に次いで、北京其他支那各地電話材料供給をなせるが、支那に於ける日本實業の權威は着々として確定されつゝある也。嗚呼中日實業會社の前途を望めば光明の燦然として輝けるが如きか。

遠大なる抱負を有せる副總裁

中日實業會社の實力にして、唯一の權威たる倉知鐵吉氏は、之れ曾つて外交界の花形役者にして、今は即ち財界の流行兒たり。氏は其の頴脫の才氣と縱橫の手腕之れを樽俎折衝の間に施し、霞ケ關の群才を壓したるが、今は乃ち財界の眞只中なる楊子江流域に漸次其の勢力を打ち樹てつゝあるは、豈獨り氏の爲めに賀するのみに止らんや。之れ日本國の幸也。

氏は百萬石の副將軍の御膝元加州金澤の人也。明治二十七年、年二十四にして大學を出でゝ官途に就く、其の少年時代より同鄕の清水澄氏と才學を齊うし、二秀才の稱ありき、當時より清水氏は學者風にて書齋に沒頭し、倉知氏は才子肌にて活動塲裏に其の手腕を現はすべき傾向を有し、一が法學博士となり、大學敎授となる間に、一は外務次官となり、中日實業會社の副總裁となりし也。

其の學校を出でゝ官人となるの時、內務省に於ては都築馨六氏に用ゐられ、外務省に轉じて小林侯に愛せられたり、其の思慮周密にして善く謀り、善く斷じ、囊裏に鋭尖なる錐を包むが如き、俊敏なる才鋒は、都築小村二先輩の裏書きによりて、伊藤井上桂寺內の諸元老に重用せられ、官海に於ける立身振り眞に快風順潮の思ひありき。

其の外務省政務局長より外務次官となり、霞ケ關に一生を了るべく思はれたる氏が、衣冠を拋つて財界に打つて出でしは、多年外交官として支那大陸に日本の勢力を扶殖することの緊要にして、而も目下の急務なることを深く感じたるに非ざるか

其の遠大なる抱負と非凡の才識と洗錬の手腕を以て、中日實業會社を經營することは、國民たるもの氏に對つて多大の感謝を捧げざるべからざる義務を有す。

勇猛果斷なる森重役

次に此中日實業會社の支那駐在取締役として、森氏を有せることは、同社の前途に對つて大に慶賀すべき事ならずんばあらず。

氏は昨年迄三井の人たりき、三井物產天津支店長として、其の才腕を唄はれしが三井家を辭して獨立の旗を上げ、中日實業會社の專任重役となり、飛龍雲に乘ずるの意氣を以て楊子江岸に活躍しつゝあり。

支那革命黨の紛擾と、日獨戰爭と、排日運動に累せられて、活動に狹められたる中日實業會社が、些の挫折するなく、却つて多くの好成績を上げたるは、實に氏の手腕也、頑迷なる排日派の窮策に成る鐵鑛國有案に依りて敗られんとしたる桃冲鑛山買收をば、百難を排して其の目的を達せしめたる、實に倉知副總裁の下に森氏の活動せし功に歸せざるべからず。

氏は年未だ不惑に達せずして、三井物產天津支店を幹せし丈け、其の英敏の天資と機慧の才情は人に絕す。殊に勇猛果斷にして實行力に富み、其の盤根錯節の萬難に處する、宛も利刄を執つて菜根を斷ずるが如きものある、亦之れ當世得易からざるの才人也。

嗚呼天物富厚、自然の寶庫たる楊子江流域に、日本の經濟的勢力を代表すべき中

日實會社に我が鄉土加賀の先輩倉知氏の如き、將た森氏の如き傑物才物を有することは、日本國民の至幸何の辭を以てか之れに比せんや。（同鄉後進近藤生記）

■金澤見聞記

鍔甚と山の尾

『北陸豈亦詩國』保胤は這う云つてる、少年愛誦せし朗詠集の句、詩趣油然として起る感じがある、鍔甚樓後庭崖かゝりの櫻樹、高く低く千朶萬朶の花春風に語いふが如き、その濃艶は今に忘るゝ能はざる美景であつた、犀水を隔てゝ小立野臺一帶の煙霞、あの霞の中に生れた（予は小立野モノ）かと思へは、夭々如たる予の想ひ、瀨尾兄と同じ小立野臺の生れながら、兄は此の風光に飽かれてるから何等感慨の料たらざるべきか。

山の尾に遊びしは夜に入りてなりき、淺野川筋の寂びれたる風光眼底に在り、近くざんざめく絃聲の何となく土音を帶ぶる懷かし、主計町あたり樓々の灯ゆるぎては亂れ、亂れては搖るぎ、何んだか南國にて味ひ得るやうな畫面なり、昔ながらの心地殆んど塵に堪にず。

鍔甚ば生氣に充ち、山の尾は靜寂を味ふに適す、盛りの花は鍔甚にて見るべく、殘んの花は山の尾にて愛すべし、色にて云はゞ鍔理は朱の色にて山ノ尾は茶か鼠なり、壁紋織は明るい晴れやかな鍔甚にふさわしく、綴れ錦の古色を帶びたるはしめやかで寂びある山の尾によろしからずや食物も鍔甚は現代式を加味せるも山ノ尾は落付のある料理なり、味に至りては予は鍔甚を好む、山ノ尾の鰻の關東煮に至りては、金澤らしき情調を唆ること夥し、百萬國の御城下は矢張り昔の俤を遺したる料理を保存すべし、保勝の必要は啻に兼六公園のみならじかし。

糖界の機威臺灣製糖株式會社

——其淵源や深く其販路や廣し——

臺灣糖業の興起と製糖會社

臺灣の製糖業は歴史あり、沿革あり盛衰ある産業にして、數世紀の昔和蘭人の移植以來、漸次全島に彌漫し、嘗ては日本支那を初として、東洋の市場を頤使する程の産額を出せしも、其後和蘭領の瓜哇糖、歐洲の甜菜糖が政府過當の保護と、時機に適せし奬勵と、器械工業應用の結果、安價多量に生産供給せらるゝに及んで政府の保護奬勵なく、機械の利用を知ざる臺灣糖業は、自然に陶汰されて衰滅の悲運に沈淪したり、然るに明治二十九年同島が我國の版圖に歸し、越ねて三十一年兒玉後藤兩氏の總督と長官とになるや、鐵道の敷設、港灣の修築、土匪討伐、行政警察權の確立、生命財産の安固、秩序の回復を圖ると同時に、産業の振作に努めたりしが臺灣の氣候風土の關係上、即ち砂糖栽培に必要なる高熱と、温氣の順當なる點より更に我國年額數千萬圓に達する砂糖の輸入を防遏して、國産品を以て之に代ねんが爲に有名なる糖業政策を樹立せんとして、新渡戸博士親しく調査の任に當り、分蜜糖及び精製糖を製出するの見込立ちしも、當時の臺灣は鐵道運輸の便甚だ完からず内部秩序の整理未だ成らず、加ふるに土匪の出沒するありて、生命財産の安固も保護されざりしより、資本家の茲に大資本を放下するものなく、特に事業創設の際な

れば成敗利鈍逆賭すべからざるものありて、かゝる冒險的事業の經營に志すものなく當局の努力も容易に功を奏せざりし、此時に當り故井上馨侯は例の如く、憤然蹶起三井物產や毛利家を首めとし、日頃恩顧の實業家を慫慂糾合し、以て創立せしものを臺灣製糖株式會社となす、實に明治三十三年也。

蓋し明治三十一年、以降同社創立の年なる三十三年に至る、平均數字を案ずるに內地に於ける一ヶ年の砂糖消費額五億千七百萬斤中、內地の產額は一億三百萬斤臺灣よりの移入額は僅に三千四百萬斤にして、殘餘の三億八千萬斤は輸入せられ、之に支拂はれたる正貨は實に二千四百萬圓の巨額に及びしを以て、製糖業は焦眉の急に迫り居たりしなり是に於て同社は本邦糖業界に一新紀元を開くべく、臺灣糖業界の先驅として生れ、井上侯の後援の下に毛利三井二家其他有力者の企圖によりて、益田孝、鈴木藤三郎、田島信夫、上田安三郎、ロベルト、ウオルカー、アルウキン武智直道、長尾三十郎の諸氏發起となり、宮內省よりも事業の趣旨を贊助して、株式一千株を引受けらるゝの特典を蒙り、明治三十三年十二月十日創立總會を東京に開き、滯りなく會社を設立し、當時の社長鈴木藤三郎氏は、當時の支配人山本悌二郎氏と共に親しく實地を踏查し、工場建設の位置を臺南廳下橋仔頭庄にトし、資本金百萬圓、拂込五十萬圓の會社として、此處に一晝夜原料壓搾能力二百五十噸の製糖工場を建設したり。

大發展と現狀

かくて同社は明治三十五年一月十五日より操業を開始し、不便と障礙と社員の病魔と、土匪の迫害とに堪へ、事務所の屋上に大砲を据へ、屋上並に廻廊に銃眼を穿ち、社員一同劍を帶し銃を執つて死生の間に出沒しつゝ事業に從事し、次第に發展して明治三十六年には、資本金總額百萬圓全部の拂込を終了し、三十九年八月には總資本を五百萬圓となし、明治四十一年三月株主に於て大部分の株式を引き受けたる、資本金五百萬圓の大東製糖株式會社を起し、同年四月十二日開會の兩社臨時總會に於て、合併の決議をなせしを以て、一躍して一千萬圓、株式總數二十萬株となり中八千株を再び宮內省御引受の光榮を擔ひ、次で四十二年八月十日、資本金二百萬圓の臺南製糖株式會社を合併して、一千二百萬圓となり、更に四十三年十二月增資決議をなして總資本二千四百萬圓、株式總數四十八萬株となし同年十一月怡記製糖株式會社を併合して、資本總額二千五百五十萬圓となり、四十四年十二月には神戸製糖株式會社の工場を九十五萬圓にて買收し、大正二年七月埔里製糖株式會社を五十萬圓にて合併し、終に資本金二千七百五十萬圓、拂込株金一千四百四十萬圓の大會社となりしが、更に臺北製糖株式會社を合併せし爲め、二百三十萬圓を增加し新株數も四萬六千株を增して、總計二千九百八十萬圓、殆ど三千萬圓の大會社となるに至れり。

營業狀態

今同社の營業狀態と成績を略記すれば、同社は本社を臺灣臺南廳大竹里打狗土名

哨船頭百二十三番地に、事務所を東京日本橋區本石町一丁目二十二番地に置き、本業に製糖を、副業に酒精を製造す、農場は

後壁林農場	收穫面積一千七百二十九甲	橋仔頭農場	同二百五十四甲
埔里社農場	同百九十六甲	同 開墾地	同六百二十四甲
阿緱區域	同二百九十四甲		

にして、本期間買收又は開墾成功の結果業主權を取得せる土地は、一千十五甲〇三九三、登記手續中の分三百九十五甲八一四、其他異動增減を加除せる臺灣に於ける期末現在所有地總面積は、業主權地一萬七千二百二十四甲三六一二、開墾權既墾地一千五百三甲六二八三、合計一萬八千七百二十七甲九八九五にして、右の外に鐵道敷地四百三十甲四二九五を有し、典權地四十一甲〇一四一蹼耕權地四百六十一甲三九六四あり。

更に今期農場の成績は後壁林農場に於ては、近年無比の優良なる狀勢を呈し、收穫濟自作蔗園に於ける一甲の平均收穫高は、殆んど十萬斤に達し、又來年度分植付濟の蔗園は既に旺盛なる發育狀態を示せり。又橋仔頭及阿緱農場の收穫數量は、孰れも大に增加し、埔里社農場よりは、多量の健全優良なる蔗苗を採收し、各農場共植付濟甘蔗の發育良好なり。

次に鐵道は左の如し

橋仔頭線	五十三哩三十七鎖	鳳山線	六哩十二鎖六節
後壁林線	二十六哩二十三鎖五十八節九分	阿緱線	百四十五哩五鎖八十五節四分

車路墘線	六十哩四十三鎖七十六節	三崁店線	三十九哩五十九鎖十節
灣裡線	十四哩五鎖二十節	臺北線	二十哩四十四鎖三十九節
埔里社線	八十哩二十二鎖六十五節八分		
計	四百四十六哩十三鎖六十一節一分		

更に工場を見れば左の如し

橋仔頭工場	所在地臺南廳橋仔頭	
橋仔頭第二工場	所在地同上	
後壁林工場	所在地臺南廳港仔墘	一日原料壓搾能力六百五十英噸
阿緱工場	所在地阿緱廳歸來庄	一日原料壓搾能力四百米噸
車路墘工場	所在地臺南廳田厝庄	一日原料壓搾能力一千米噸
灣裡工場	所在地臺南廳六份寮庄	一日原料壓搾能力三千米噸
三崁店工場	所在地臺南廳三崁店庄	一日原料壓搾能力千二百米噸
鳳山工場	所在地臺南廳鳳山街西門外	一日原料壓搾能力百八十英噸
埔里社工場	所在地南投廳埔里社堡	一日原料壓搾能力八百五十英噸
臺北工場	所在地臺北廳大加蚋保下嶺店	一日原料壓搾能力三百英噸
神戸精糖工場	所在地神戸市兵庫東池尻村	一日原料壓搾能力三百英噸
橋仔頭酒精工場	所在地臺南廳橋仔頭	一日原料壓搾能力五百米噸
阿緱酒精工場	所在地阿緱廳歸來庄	一日精糖製造能力百八十五英噸
		一ヶ年の酒精製造量五千石
		一ヶ年の酒精製造量二萬五千石

此等の工場に於て製造する原料糖、直接消費糖、精製糖は孰れも品質優良にして內地到る處に歡迎せらるゝのみならず。海外輸出も亦成績頗る良好にて、酒精亦本邦需要の大半を供給し、品質の優良なるを以て好評嘖々たるは何人も認むる所ならん、今大正六年度三月三十一日發表の利益分配左の如し。

利益分配

金四百五拾萬八百六圓八拾參錢　當年度純益金

前年度繰越金　金八拾貳萬八百九拾五圓五拾四錢

合計金五百參拾貳萬千七百貳圓參拾七錢

内

法定積立金　金貳拾參萬圓

別途積立金　金參拾五萬圓

配當平均準備積立金　金五拾萬圓

役員賞與金及交際費　金貳拾五萬圓

株主配當金（年壹割貳分）（本株壹株ニ付金四圓五拾錢　新株壹株ニ付金壹圓九拾五錢九厘）　金百八拾五萬參千六百參拾四圓

特別配當金（年參分）（本株壹株ニ付金壹圓拾貳錢五厘　新株壹株ニ付金四拾九錢）　金四拾六萬參千四百九拾圓

臨時配當金（年八分）（本株壹株ニ付金參圓　新株壹株ニ付金壹圓參拾錢六厘）　金百貳拾參萬五千七百五拾六圓

恩給及扶助基金　金四萬圓

職工農工夫其他慰藉基金　金壹萬圓

後期繰越金　金參拾八萬八千八百貳拾貳圓參拾七錢

重役と重なる社員

此大會社の首腦たる役員及び幹部員は如何なた人々なるか、重役は取締役會長藤田四郎、專務取締役山本悌二郎、常務取締役武智直道、同益田太郎、取締役圖師民嘉、同丸田治太郎、監査役村井吉兵衛、同賀田金三郎、同ロベルト、ウオルカー、アルウキン、ジユニオル、相談役益田孝の諸氏、幹部社員は主事平山寅次郎、技師長草鹿砥祐吉、參事神代貞三、商務部長城戸崎廣三、主計係長拜司銀三郎、後壁林製糖所長鈴木源吉、阿緱製糖所長喜多島二虎、埔里社製糖所長野瀨暢次郎、三崁店製糖所長金木善三郎、車路墘製糖所長筒井虎之助、灣裡製糖所長河中助次郎諸氏也

貴族院議員錦雞間祇藤田四郎氏は會長たりと雖も、親しく事務を見るにあらず、同社事實の會長とも見るべきは山本悌二郎氏なり、氏は新縣縣佐渡の人、山本桂氏の二男にして、明治三年正月十日を以て生る、明治十九年農學研究の爲め、獨逸に留學すること八年、ボツダムホーヘンハーム等の諸大學に學び、ドクトルの學位を受けて歸朝し、仙臺の第二高等中學教授として、獨逸語を教へ、寺內首相の愛婿兒玉秀雄伯、詩人土井晚翠、文部省普通學務局長田所美治等は當時の教へ兒わりしが二高ストライキ問題の時高山樗牛、佐々醒雪等と共に仙臺を去りて、日本勸業銀行に入りて鑑定課長となりて、實業家の基礎を作り、其學問を應用して、臺灣製糖に重要の位置を占め、鄕黨より推されて、衆議院議員たること四回、政友會の青年政治家として原敬氏に重んぜらる、謹嚴方直の君子人にして、其敦厚にして穩かなる性情は常に部下に愛敬せらる。次に、常務武智直道氏は、京都の人林正道氏の三男山本氏と同年にして、慶應義塾出身なり。明治二十四年東京駐劄布哇公使の囑により同島移民の事を司り、三十三年臺灣製糖株式會社を發起するの一人となり、爾來引續き常務となりて精勵恪勤事務を董督す、早川千吉郎氏は尊敬する友人なりと稱せり、以て其人格を知り得べきなり。若し今一人の常務益田太郎氏に至りては多藝多能の才人にして、藝術界に指導の地位に在る名譽ある人、今更呶々するに及ばざるべし、臺灣製糖は實に人材に富める哉。（山本先生に教を受けし近藤生記）

大日本麥酒と馬越恭平翁

――會社は麥酒界の覇王にして翁の傳記は立志篇中の翹楚也――

激甚なる發展

殆ど本邦麥酒界を獨占して其の總釀造高の約三分の二を占め他三社に比して嶄然頭角を現はし居れる、大日本麥酒會社の近況如何と聞くに、其の發展振りの激甚なる實に驚くべきものあるなり。先づ其の大勢を知らんが爲めに大藏省の査定に依る本邦各麥酒會社の釀造石數を見るに即ち左の如し

大藏省發表麥酒査定石數

	自大正五年三月至大正六年二月	自大正四年三月至大正五年二月	增加額
大日本麥酒會社	二二二、九一六石	一五七、二七三石	六五、六四二石
キリン麥酒會社	五〇、三〇五	四一、四四一	八、八六四
帝國麥酒會社	四〇、八七一	二九、四〇四	一一、四六七
カブト麥酒會社	三一、〇五〇	二〇、七〇〇	一〇、三五〇

此の如くにして昨年度の釀造石數が一昨年度に比して六萬五千六百餘石を增加せるの激甚なる增加額に對しては、何人と雖も驚かざるを得ざるべし。

斯の激甚なる增加に對しては之れが原因を求むれば素より內地の好景氣は之れが賣行の好良なるに依るべきは無論なりと雖も、亦た輸出方面に於て激甚なる大發展を爲せるに依る。何故に輸出に於て斯く急激に大發展を爲せしやと謂ふに、其は全く歐洲戰亂の結果獨逸麥酒の輸出全然杜絕したれば、支那印度は素より濠洲南洋諸島且つはペルシヤ、エジプト地方に至る迄大日本麥酒の輸出を見つゝある景況なりとす、故に內地に於ては同時期に比して僅かに二割五分强の增加に過ぎざるに輸出に於ては昨年一月より四月に至る四ケ月間の輸出總額九萬四千函に對して本年は同期間に於て既に十五萬三千函の大輸出を爲せり、即ち六割五分强の大增加なり。

施設計劃益進捗

同社は最近その資本金を貳千壹百萬圓に倍加して愈々戰時益を飽食せんとしつゝあるが、先づ增資の緊急事業は(一)現在の江別工場の火力動力を水力電氣に換ふること(二)同社用パルプの自給策等也。右水力電氣は北海道空知川上流野花南に於て空知川の水流を取入れ七千基の電力を得んとするものにて昨年來建設中なるが、目下堰堤土木工事中なれば近く發電所土木工事に着手すべく本年中には操業を見るならん、之に續いて同所の上流奔茂尻に於て四千基の發電所を計畫し、目下隧道工事中なるが、明年六月頃には竣工を見るべしと、右二發電所は地形頗る水力電氣に都合よく野花南發電所の如きは殆ど水路を要せず、取入口より直に水槽に導き得るが

如くなれば兩發電所とも建設費頗る安價にて兩發電所の發電所出力合計一萬一千基に對して貳百貳拾萬圓の建設費豫定即ち一基當り建設費は僅に貳百圓と云ふが如き安價なり。右二發電所にして完成せば江別工場動力用としては勿論また剩餘電力は工場附近の市街にも發賣すべしと。亞いで(二)パルプ自給策は同社は年額七八千噸のケミカルパルプを輸入品に仰ぎつゝあるが市價の騰貴甚しく遂に之が自給策を講ずるに至り、年額一萬噸のケミカルパルプ生産豫定にて之に要する蒸煮罐三基は既にパルプ工業の本場たる瑞典に注文せるが、船腹不足と北海の潜航艇危險とにて容易に到着せざる模樣なるも工場は機械の到着次第直に据付くるべき必要あり。其工場地は北海道にすべきか、樺太にすべきか、木材を多量に使用する關係上目下研究中なるが、來る七八月頃より工場建設に着手すべしと、此パルプ工場にして完成せば同社は原料自給を得而かも輸出は此の如く激增せりと雖も斯は船腹の關係上また充分の輸出を爲せるにあらず、若し船腹にして今少しく充分ならんか、其輸出額は之れに倍加すべく、現在に於ては各地の注文に對して盡くの其小部分を輸出せるに過ぎざる有樣なり。而して更に需要の實際報告に見れば、本邦麥酒は最早今日となりては其の品質に於て更らに獨逸麥酒と毫も遜色なく前掲輸出地に於ても一般の嗜好に適し居れば、假令戰後に於ても決して急激に其の需要の減退すべき虞れ斷じて無し。故に本社に於ては曩に陸軍省より拂下げを受けたる青島麥酒釀造所に於ても冬より愈釀造に着手し、數月來新製品を賣出しつゝあるが、目下の製造能力は一ケ

年二萬石の能力を有すれども、職工の關係上今日にては一萬五千石の釀造を爲し居れり、故に本社の釀造石數は前記の一ケ年二十二萬餘石に更らに一萬五千石を加ふるものにして、合計二十五萬石以上の釀造石數となるべき豫定なり。

而して本年は製瓶製函其他一切の費用は非常の騰貴を告げたる爲め、麥酒の販賣價格も貳圓方引上げたるが之れにても原料騰貴に比して決して之れを補充し能はざるの境遇にあれども、去りとて昨年度より利益減少するが如き虞れもなく、却て釀造石數の增加に伴ふ利益は增加を得べければ、今期の配當率も前期を下るが如き事は斷じて無く、其の後期繰越金は前期よりは增加すべき模樣なり。

更らに九州工場は昨今愈工事に着手し、明年秋頃迄には竣工に至るべき樣子にして之が完成の上は更らに五萬石計りの能力を增加するに至るべく、吹田其他の工場も、各擴張工事を行ひつゝあれば此處兩三年後には其の釀造石數に於ては非常の增加を見るに至るべし、斯くして其の發展の偉大なるものあるは、到底吾人の想像の外にあるが如し。

而して今年は前述の如く各社とも其の釀造石數は非常に增加し居り、加ふるに世上の好景氣の爲め需要激增し居れば、所謂麥酒戰は非常に激烈なるが如くに傳ふる向きあれども事實は其の噂に反し殆ど例年の如き競爭戰なく、寧ろ會社側は常に注文に追はれつゝある有樣なれば、二三の地方を除くの外は別に競爭らしき競爭をも見ざるものゝ如し。

之れを要するに會社の販路は益發展して今日にては殆ど其の販路は世界的となり居れば、今後兩三年間戰時情態の儘繼續すれば其の需要の激甚なる殆ど想像の外にあるものゝ如し、殊に麥酒の如き飲料にして一旦其の需要地の人士の口に適する事となれば、容易に他の印のものと變更せらるべくもあらず、故に今後の大日本麥酒は支那、印度、海峽殖民地、濠洲及び南洋諸島或はペルシヤ、エジプト等の需要も益擴張こそせられ、決して今後不結果に終るが如き事のあらう筈なき也。

成績益良好

同社にては七月二十八日定時株主總會に於て左の利益金處分案を附議し滿場一致可決したり

▲當期利益百十萬六千二百七十六圓▲前期繰越金五十萬九千九百圓▲合計百六十一萬六千百七十圓▲法定積立金六萬圓▲別途積立金十萬圓▲役員賞與金五萬五千三百十三圓▲株主配當(一割二分)四十五萬千三百圓▲同再配當(四分)十五萬四百圓▲同臨時配當(六分)二十二萬五千六百圓▲使用人退職手當基金二萬五千圓▲前期繰越五十四萬六千百六十二圓

更に同社の發展ぶりに付て一麥酒通は左の如く語れり、是れ頗る吾人の意を得たるものなり。曰く

同社現下の業態を見るに、同社は從來滿鮮地方に對し殆ど獨占的に札幌麥酒の輸出を行つた。而かも單にそれ而已ならず、先年來上海市場に販路の擴張を圖り、專ら朝日麥酒を以て獨逸品と競爭を續け漸次好成績を齎らしつゝある際戰亂の勃發と成たので、之を機會に白國及び南洋方面に販路を獲得した結果、昨年度の

如きは總輸出高廿五萬函といふ多額に達した。之は主として朝日麥酒を以てしたのである、斯る狀態であるから同社は爾來益々輸出の擴張に努め假令戰亂終局する共一度獲得した地盤は永遠保持の策を樹てたのみならず進んで獨逸品若くば英國、白耳義、和蘭等の製品と對抗して一層販路を擴張するの方針を採つて居る。現に昨年青島に於けるゲルマンアブロイと稱する獨人經營の麥酒會社(一旦英國官憲に沒收された)を五十萬兩で買收し、既に本年一月より操業を開始し過般來需要季節に入と共に賣出した(年產額二萬石なるも當年は一萬石を限る)如き、明かに商略の一端を說明したるものである。又た內地に於ては其頑敵櫻麥酒に對抗策として九州福岡市外に工場を新設すべく準備中である計りでなく、財界好況なるを利用して大に賣上高を增加すべく既設工場の擴張に着手し且つ新規に東京府下目黑にモルツ製造工場の增設に取掛つた、而して內地各地共需要季節に入りたること迚大車輪で活動して居るが、相場は久しく各社競爭の關係で原料麥芽の騰貴に拘らず一箱十一圓といふ戰前相場を維持し來つたが、去る四月九日から內地賣一箱二圓高の十三圓に協定値上すると共に輸出向も五月七日より協定建値を發表したから、同社の如き販賣數量大なる會社に在つては著しい利益增加を見るに相違ない。殊に原料麥芽は昨年既に本年一抔の使用分を割安に仕入れたから、此方面の支費は比較的輕い樣である。

唯だ茲に問題となるは容器醱酵材料運賃及び職工賃銀の暴騰した事で、麥酒用硝子瓶は從來新物で一個二三錢を出でざりしもの、昨年以來製瓶原料の拂底騰貴に伴ひ二割乃至三割方の暴騰を來し古瓶で大三錢五厘小二錢五厘を唱ふるに至つた。次に麥酒函は四打入一函四十錢位で商內はれたもの、之れ亦木材の騰貴で卅錢高の七十錢見當約四割高となり、一打入の小函でも四十錢臺では容易に手に入り難く、古函でも四打入りで卅五錢乃至四十錢を唱へて居る有樣である。次にモルツやホップの醱酵原料も輸入思はしからぬ爲め昨年五月頃百五十キロ入四十四五圓を唱へモルツは五十四五圓臺に上り、ホップも百キロ二百五十圓見當で取引せられたるもの二百七十圓臺に上る抔、總じて二割以上の暴騰(戰前に比し五六割高)を示して居る。次に運賃は陸運海運共昨年四五月頃に比すれば孰れも二三割の騰貴で、別して馬力賃の如きは五六割方の大暴騰を來し居る爲め、會社の負擔に屬する運賃諸拂は額は前年に比し非常に增加した。加之も職工賃銀が二割乃至

二割五分方の暴騰を示して居るので、會社の經　は著しき激增を來したのであるが、ソハ深く意とするに足らぬ云々。

馬越社長の爲人

此大會社を斯く迄に成功せしめたるは、云ふ迄もなく馬越恭平社長と植村澄三郎常務の力なり、馬越翁は岡山縣備中國後月郡木ノ子村の人、弘化元年十月十二日を以て生る、父は元泉氏、翁は其次男にて家世々醫を業となすも、翁は出でゝ一家を創立せしなり、嘉永四年備中の碩學坂谷朗廬先生の興讓館に入りて和漢の學を修め安政三年更に大阪に出で、賴山陽の高足後藤松蔭先生に從つて和漢の學を學ぶ、安政六年歳十八、實業界に於て身を立てんと欲し、手代見習として大阪の長者鴻池家に入る、當時鴻池家の老番頭に百助なるものあり、能く後進を誘導し常に敎ゆるに正直は商人の生命なり、信義は沒すべからず、約束は必ず實行せよ、との事を以てす、翁の今日あるは實に此百助が感化指導の力なり。聞く翁今日尙當時々追懷して百助の情を想起すといふ。

文久二年故ありて鴻池を辭し、老番頭百助によりて學び得たる商略を實地に應用せんとて勤勉努力、明治五年七月志を立てゝ東京に出で、令兄の知人にして當時横濱の貿易商として有名なりし故岡田平三氏の盡力によりて、現三井物產會社の前身にして當時故井上侯の主宰せられし先收會社に入り、奮勵努力殆ど寧日なく、明治九年先收會社の三井物產會社と改めらるゝや、拔擢されて横濱支店長となり、經營

最も力めて世の矚目する所となり、元締役、常務理事、三井吳服店理事、三井地所部專務理事と累進し、明治二十九年辭任に至るまで、專心精勵二十年、功によりて辭任の今日と雖も舊重役の待遇を受け、年金を支給せらるといふ。

明治二十五年五月、井上侯の推擧によりて衰頽する日本麥酒株式會社々長となり忽にして社運を挽回し、更に明治三十九年前記の如く三麥酒會社を合同して大日本麥酒株式會社を創立して之が社長となり、爾來引續いて要職にあり、社務を處理すること明確にして、鑠鑠壯者を凌ぐの概あり、社運益々隆興するは何人も知る如くなり、翁夙に經國濟民の志を抱き、社會公共の爲に私財を擲つて顧みず、鄕黨を誘導し窮民を賑恤し、軍用品を献納し、學校病院の建設を助くる等、常に社會國家に盡して毫も倦怠の色なし、明治三十一年四月には岡山縣より選ばれて代議士となり三十九年四月には勳四等旭日小綬章を授けられ、大正四年一月特旨を以て從五位に叙せらる、其公共の爲に盡されし事は一々枚擧に遑あらざると共に、老來益商工業の發展に熱心し、明治四十一年には歐米を、大正三年には支那を漫遊して席暖まるに暇なく、關係會社亦三十六社の多きに見るも、如何に其德望の大なるかを知るに足るべく、翁にして立志傳中の翹楚たらずんば、誰が立志傳中の人たるものやある

馬越社長の功勞

馬越社長の功勞は前期總會の決議に基く會社創立十週年紀念品贈呈の件に依り株

主總代より贈呈せる左の感謝狀にて、一見明瞭なり。

感謝狀

回顧すれば明治二十四年君が本社の前身たる日本麥酒株式會社社長の職に就くや當時麥酒業は本邦に於ける化學工業の創始にして工場諸般の設備悉く範を獨逸に採り事大小となく皆外人の指導の下に操業するの狀態なり故に其經營施設の困難なること寔に言語に絶せり是を以て事業は動もすれば輒ち豫期と背馳し幾度か蹉跌し將に倒産の悲境に沈淪せんとしたりき、然れども君百折撓まず一艱を經る毎に意愈鋭く一難に遇ふ毎に志益堅く盤根に處し錯節に應じ遂に克く艱難を排して其効果を收め得たり既にして原料は之を內國に於て需むるの途を開き外人技師を解雇し之に代ふるに悉く邦人を以てして斯業開發の基を定めたり其功績偉なりと謂ふべし

日清戰役後頓に麥酒業の進歩を促がし全く其輸入を防遏するに至り斯業の前途好望の曙光を認むるに至りしを以て同業者勃興し遂に製品供給の過剩を來たし爲めに同業者は販路の競爭に惟れ日も足らず相互に利益を犧牲にするの感あり君深く以て遺憾と爲し謂らく國內に於ける蝸牛角上の競爭を避け進んで輸出を奬勵するの愈れるに若かずと、於是明治三十七八年の交君決然率先して日本札幌大阪三社合同經營の議を提案せり、然るに論議百出將に成らんとして成らず荏苒彌久破れんとするもの其幾回なるを知らず君此の間に介在して斡旋盡力至らざる所なく明治三十九年三月二十六日遂に大日本麥酒株式會社の成立を見るに至れり君選ばれて社長と爲る爾來十年一日の如く奮勵努力所謂天時に耐へ人事に忍び以て同僚と和し部下を愛撫督勵し以て合同創業の難を經て又守成の苦を嘗め本社をして今日の隆運に至らしめ之に加ふるに堅實なる基礎を樹つるに至らしめし所以のもの是れ偏に君の企畫經營其機宜を得たるに由らずんばあらず今や本社の事業益擴大して前途亦將に愈昌盛ならんとす更に君の企劃に待つ所のもの多し矣

今茲に恰も本社創立十周年に際し記念として瑣末なる金品を贈呈す固より以て君の功勞の萬一に酬ゆるに足らず所謂物薄ふして意厚きもの幸に採納を賜はゞ株主一同の欣幸とする所なり株主總會の決議に基き株

主一同に代り謹で感謝の微意を表す

大正五年三月二十六日

大日本麥酒株式會社株主總代委員

村井貞之助　小池國三

尾高次郎

第一生命保險相互會社

矢野恒太　日比谷平左衛門

馬越恭平殿

女房役植村氏

常務植村澄三郎氏は大日本麥酒會社の大黑柱なり、氏は旗本八萬騎の家に生れ舊幕臣植村原十郎氏の長男にして、文久二年十月を以て生る、明治推新の際父に從つて橫須賀に移り學び、明治十二年上京して開拓使の吏員となり、爾來累進して明治二十年遞信管理局次長となりしも、二十二年官を辭して實業界の人となり、二十七年大倉喜八郎、澁澤榮一、淺野總一郎諸氏の設立せし札幌麥酒株式會社の常務取締役となり、合同の後は大日本麥酒の常務となりて、明敏機捷、能く社務を擴張して以て今日の隆盛を極む、馬越翁の女房役に植村氏を以てせしは蓋し鬼に金棒也。

かくて此社長と氏常務の愛國的行爲が頓て國產奬勵となり、今や吾國の麥酒釀造多しと雖も、眞に本邦人の手により本邦產の原料を以て釀造せる純乎たる國產麥酒

が此會社のエビス、サツポロ、アサヒの他に需め得べからざるは獨り會社の幸福なるのみならず、實に帝國の幸福にして且誇りならずや。

其他常務高杉晋氏、本年一月監査役より常務に轉じたる武内常太郎氏、幷に同時に新常務となれる上野金太郎氏は、孰れも大日本麥酒會社に於る功勳大なる人々にして、今や多忙多繁なる植村氏を補佐して常務の事務を見つゝあり、而して大橋新太郎、宅德平、仲田慶三郎三氏が監査役として至極の適任者なるのみならず、仲田氏が多分常任監査の職務を執れるにあらざるか、這は吾等が同氏多年の實驗より當然到るべき職務上の負擔なりと信ずればなり、其他小林營業部長を首め幹部社員の功蹟に記錄すべきものあるも此には省筆せり。

是また人生の慘事

（金澤見聞記の一節）

山ノ尾の戻り、色街は、まだ霄の口の賑ひなり、金に緣薄き金澤でも此街丈けは除外例なるかと、金澤人の悠長なるに歎服せざる能はず、何事ぞ花見る人の何んとやら、野暮はヌキにすべし、いろは屋、よし力、野村屋如何にも堂々たる大茶屋らしゝ、江戸屋の舊主人は名物男なりしが今は亡し、入て故人の部屋を見る、お相撲の住みさうなユトリある作り方羨まし、養女某の父は代議士候補に立ちて產を蕩ぜしなりと、父は政治家たらんとして敗餘の人となり、子は娼家に養はれて門柳路化人の手折るに任す、豈に人生の慘事ならずとせんや、醉顏冷を呼んでソコ〳〵に歸る。

日本石油會社と經營者

——日本石油は如何にして盛大となりし乎——

日本石油の事業は斯の如し

東京麴町區有樂町一丁目に本社を有する日本石油株式會社は、明治二十一年五月の設立にて、資本金二千萬圓、拂込高一千六百五十萬圓、諸積立金百八十二萬五千二十六萬圓、利益配當は二割に上り、社長内藤久寛、取締役山口達太郎、本間新作久須美秀三郎、松方乙彥、監査役中野貫一、飯塚彌一郎、山口政治、支配人中野鐵平諸氏によりて經營せられ、業務を經理部、鑛山部、營業部、鑛業場製造場販賣店及油槽所の各部に分ち、事業は鑿井採油を骨髓として、石油土瀝青及天然瓦斯の採掘を目的とするものなるが、目下鑿井に從事しつゝあるは、左記の諸鑛場にして、漸次各地に發展しつゝあり。

一、西山油田　宮川、長嶺、茶之木、瀧谷、鎌田、伊毛、西ケ崎、石地、尼瀬、七日市
一、東山油田　浦淵、比禮、加津保、椿澤、荷頃、乙吉。
一、新津油田　小口、高谷、熊澤、朝日、前谷、柄目木。
一、頸城油田　牧、五智、松代。
一、魚沼油田　五日町、寺尾。
一、遠州油田　相良。
一、秋田油田　泉、濁川、黑川、浦山。
一、青森油田　町居。

一、北海道油出　五ノ澤、八ノ澤、後別、輕舞。
一、臺灣油田　六重溪、千秋寮。

而して製油所は柏崎、直江津、新津、秋田、北海道の五ヶ所に有し、尙新潟に硫曹製造所を起して石油精製に要する硫酸の製造を創始し、隨つて其硫酸により人造肥料をも製出するを以て、同社の製品種類は

揮發油、燈油、輕油、重油、機械油、硫酸、肥料

の七種となるに至れり。

日本石油の發達

此會社は上にも述ぶる如く、明治二十一年五月十日の創立にして、其頃本社は越後國三島郡尼瀨町に設置せられたるが、同地は古來沿海に石油の點々浮ぶありて、其浮びたる水面は草生津（泉水の意）の澗と稱し、住民之を藁にて掬ひ取り、燈火の用に供したることありしも、當時迷信多く此事も亦氏神の祟あるべしとて、遂に止みぬとの傳說ありしが、明治に及び同地海濱に油井を開掘したるものあり、明治十九年に至りて一井一日の出油量二十石の多きに達したりしも、當時徒らに投機的材料に供せらるゝ觀ありしを、故山口權三郎幷に現社長內藤久寬氏等大に之を慨し、率先有志に諮り同社を創設し、先づ尼瀨海面に鑛區を得て採掘に從事し、茲に始めて斯業界に新生面を開き、爾來漸次各地方に油田を選定し、年々其規模を擴張し、以て斯業の隆盛を企圖するに努め、採掘方法の如きも、從來の人工手掘は六百尺以內

の發掘に止まり、其以上に掘進するを得ざりしが、明治二十三年故山口權三郎氏歐米漫遊の途次、米國油田鑿井機械の使用を實地に就きて視察し、紐育より同國鑿井機械及び鐵管を購入し來り、翌二十三年十二月尼瀨鑛場に使用して、着々効果を收めたり、蓋し日本に於て確實なる石油事業を起し、又二千尺以上の掘進力を有するに至りしは、同社を以て嚆矢とす、其後三十一年北越鐵道全通し、柏崎方面が海陸運輸の便益を有するに至りたると、近接せる長嶺鑛山に於て本邦未曾有の油田を發見し、縣下石油事業の中心點も從つて亦柏崎地方に移るの氣運となり、同社も三十二年を以て本社を柏崎に移せしが、更に事業の擴大するに從ひ、中央に本社を置かざれば不便なるにより、今や東京に本社を置くに至れり、同社が創立以來如何に銳く、且速かなる發展をなしたるかを、資本額增加の數字によりて示證すれば

明治二十一年	十五萬圓	同　二十七年	三十萬圓
同　二十九年	六十萬圓	同　三十三年	百二十萬圓
同　三十五年	二百四十萬圓	同　四十年	五百萬圓
同　四十年	一千萬圓	大正二年	二千萬圓

此資本增加の率を比するに、每增資は悉く倍額を以て進めり、而して最初の倍額に七ヶ年、第二次に於て二ヶ年、第三次に四ヶ年、第四次に二ヶ年、第五次に五ヶ年、第六次に一ヶ年、第七次に於て七ヶ年を要し最後の增資に七ヶ年を費したるは其前回の增資が一ヶ年に倍加せられたるが爲にして、是の如く累次遞加の比例が悉く加一倍の率を以て進むが如きは、他の事業に於て到底認むべからざる所なりとす

單に倍加といふ、其小額の場合に於ては、左のみ驚くべきにあらざるが如きも、次第に累加するに至つては、非常の發展を意味するものにして、乃ち二百四十萬圓の資本は過去十有九年間の事業の全体なりしものを、一朝之を倍加して五百萬圓となさば、其事業は忽ちにして三十八年の全体の勢力を示すものならざるべからず、更に之を增加し、尙一倍して巨額二千萬圓を算するに至りては、事業の實体は正に百五十幾年の事業力全体を示現するものにして、其膨脹力實に目覺しといふべし。

内藤社長の力

而して會社の今日あるに至りたる功は、一に之を創立せし現社長内藤久寛氏の力に歸せざるべからず、氏は新潟縣人内藤久之氏の長男にて、安政六年七月二十二日刈羽郡石地町に生る、公職としては明治十八年縣會議員に、同二十七年衆議院議員に擧げらる、三十年四月農商務省の囑託により、石油事業調査の爲めに歐米に渡航し、同十二月歸朝、三十七年四月再び同省の囑托により、米國に渡航し、八月歸朝す、四十一年六月日本大博覽會評議員仰せ付られ、四十二年六月綠綬褒章を授けらる、氏は實に日本石油株式會社を創立せし最初の第一人にして、明治十八九年の頃尼瀨海濱の手掘石油井の續々出油し居りし時代とて、尼瀨とは沿岸僅に一里を隔つる石地に住する氏は、屢々之を視察して斯業の有利なるを達觀し、親友鬼頭悌二郎氏が紐育領事を爲し居りしにより、鬼頭氏に照會して米國石油事業に關する詳細の報告を得、茲に大なる確信を抱きて、山口權三郎、牧口莊三郎兩氏の賛同を求め、

明治二十一年一月相謀りて會社を創立す、これ會社の創立史也、此夜一同長岡敦賀屋旅館にて晩餐を喫せる際、風雪中に蝙蝠一羽翩々として舞込み來りしより、一同吉兆なりと喜んで、之を商標とするに決し、新潟の篆刻師大江萬里に圖案を托し、出來上りしものが、乃ち全國津々浦々に至るまで、行き渡れる同社の『蝙蝠印』なりかくて二月二十日創立願書を新潟縣に出し、四月十八日認可五月十日寺泊に於て、第一回總會を開き、常務理事に内藤氏、理事に山口權三郎、牧口莊三郎、本間新作岸宇吉の四氏を擧げたり。

然る後内藤氏の拮据奮勵殆ど三十年に垂んとし、以て今日の大を致す、我國事業其類多しと雖も、事業發展の速かなる、斯の如く成功の著るしき事彼の如きもの果して何れにかある、これ半ば天惠の福址にもよるべしと雖も、抑も亦内藤氏努力の結果ならずんばあらざる也。

或夜はし居して　　候爵夫人　前田朗子

燈のゆらく風たにふかぬよの暑さはことにたへかたきかな

日光にありける頃

村雨はたちまち晴れてしけり合ふ松の林に日くらしのなく

折にふれて

人のさま見るたひことにかへりみるわがあやまちのわれにみいれば

共同火災と其經營者

―共同の倉知乎、倉知の共同乎―

五大保險會社の一

共同火災保險株式會社は日露戰役後、事業勃興の聲に生れたる新會社にして、株主に東西の有力者を網羅せるが爲め、一躍して第一流の保險會社の列に班し、所謂五大保險會社の一として、世人の耳目を聳動するに至れり。

只明治四十年、函館の大火あり、超ねて四十二年には大阪の大火あり、創立匆々二大火災に遭遇したるが爲め、四十二年の決算には缺損金の累計三十一萬五千圓に上れり。されど四十三年には此の缺損全部を補塡したる上、尙ほ五朱の配當を行ひ爾來良好なる利益配當を繼續せる也。

大正四年の損益計算書

今大正四年と翌年一月一日より六月卅日に至る損益計算書を檢せしめよ。先づ昨年には

收		入	
前年度より繰越		八一四、四九〇、三〇圓	
利益金	四二、五九〇、三〇圓	一、一五八、四八五、三六	
保有契約に對する責任準備金	五六二、三〇〇		
再保險契約に對する責任準備金	二〇〇、〇〇〇	五三二、二六四、六一	
支拂備金	九、六〇〇	九、〇八三、一二	
保險料			
再保險を附したるによる收入			
再保險金	四五五、四九八、五三		
再保險手數料	五九、九八五、一八		
戻入再保險料	一六、七八〇、九〇		
雜收入			
諸利息			
預金利息	五二、七八一、五八		
貸付金利息	七、八〇九、五〇		
有價證券利息	五〇、六七二、九二		
不動產收益	一六、五四五、七二		
有價證券償還益		一二七、八〇九、七二	
特約再保險勘定益		一五六、〇〇	
使用人恩給基金繰込		二七、四二五	
		五、二八〇、〇〇	

合計

支		出
再保險料	二、五六五、六八	二、六七四、九九四、二一
保險金	一、六四八、四〇	四八一、五八七、二八
解約返戻金	九、九七〇、六九	八三一、九九三、六一
稅金		三二、四六九、七三
所有財產に對するもの		
印紙稅		
其他		
事業費		
社費	二三三、〇四三、七六	一四、一八四、七七
代理店手數料	五七、五五六、一四	
紹介手數料	二七、〇六一、三八	三一七、六六一、二八
財產評價損		
不動產		
特約再保險會社責任準備拂戻		五七六、八七
使用人退職慰勞金		二〇〇、〇〇〇、〇〇
次年度へ繰込		五、二八〇、〇〇
責任準備金	五六四、〇〇〇、〇〇	
支拂備金	一二、八〇〇、〇〇	五七六、八〇〇、〇〇
合計		二、四六〇、五五三、五四

差引利益金

尙ほ大正五年一月一日より六月三十日に至る損益計算書を見せしめよ.

二十一萬四千四百四十圓六十七錢

收		入
前年度より繰越	八七、四四〇、六七圓	六六四、二四〇、六七圓
利益金	五六四、〇〇〇、〇〇	五八五、四一六、九八
責任準備金	一二、八〇〇、〇〇	一一二、一五八、九四
支拂備金		二九、六四三、五九
保險料		七、六九七、四一
再保險金		四五、七〇九、〇六
再保險手數料		一、三八四、四〇
戻入再保險料		一三、四七七、八六
資本收益		一、四五九、七二八、九一
雜收入		
特約再保險勘定益		
合計		

支		出
再保險料		二二七、四三三、一二二
保險金		二三二、二七八、八三
解約返戻金		一七、一六四、七九
諸稅		一一、七八一、九一
營業費		

經費	一一九、五二四、三九		
代理店手數料	二八、四四〇、五六		
紹介手數料	一〇、三六一、八八		
後半期へ繰越			一五八、三二六、八三
責任準備金		五六四、〇〇〇、〇〇	
支拂備金			五七三、三〇〇、〇〇〇
合計		五、二〇〇、〇〇	一、二二〇、二八五、六八
差引利益金		二十三萬九千四百四十三圓二十三錢	

此の正確なる數字は以て同社が現狀を知るべく、又其の前途の有望なるを窺知するに難からざる也。

株主は東西の有力者

同社は早川千吉郎、坂野兼通、堀越角次郎、竹尾治太郎、田邊貞吉、村井吉兵衛村井貞三郎、武藤山治、梅原龜七、山口玄洞、山口吉郎兵衛、町田忠治、松方正雄等の諸名士を以て大株主となし、森本清兵衛、倉知誠夫の兩氏常務取役たり、而して田邊貞吉、村井貞之助、渡邊千代三郎、松方正雄、廣海二三郎、鈴木梅四郎、山口玄洞氏等は取役締にして、浮田桂造、杉山喬、坂野兼通氏等は監査役たり。

此の內、會社の內外に折衝し、能く會社の運命が終始するは倉知誠夫氏ならずんば非ず、共同火災の運命一に倉知氏の掌裏にありといふ、何人か之れを拒まん。

倉知氏の少年時代

倉知氏は如何なる人ぞ、氏は百萬石のお膝元、副將軍の貫錄北陸に雄視する加州金澤の人也。氏は慶應三年三月、此の大藩の城下、而も槍一筋の家に生れし也。王政一新して士農一に歸するや、氏の父君は時勢を看取する眼光に乏しからず、自ら書林を金澤廣阪通りに興し、益智館と稱して書藉出版の業に從ひたりき。

此の時流に擢づる眼識を備へたる父君の敎育を受けたる氏は、金澤の小學を出づるや自ら牙籌を執るの人たるべく、曾つて家に在りし家僕の大阪に唐木問屋を開業せるに赴いて、此の關西の黃金鄕に商人としての修錬を受けたりき。

されど聰明なる氏は新時代の潮流が財海を浸しつゝあるを看破したり、即ち文明的商人として立脚するには外國取引に從はざるべからず、外國取引に從ふには先づ英語を學ばざるべからず、一念を發起するや直に大阪を辭して故鄕金澤に歸りたりき、時に年僅かに十七歲の少年なりき。

氏の金澤に歸るや最も熱心なる英學生となり、英語專門學校に入つて專心外國語の錬磨に力めしが、向上猛進の念燃ゑて止まらず、遂に父君に云ふて東京遊學の途に就けり、氏が山海幾百里、東京に行李を卸して、初めて贄を執りたるは福澤翁なりし也。

十九の歲、慶應義塾に入學したるの氏は二十四歲にして學校を卒業したりき。『四

海一家、五族兄弟、蒸氣濟人、電氣傳信』の文明の福言を聞き『人の禽獸と異る所以は、只獨立自尊、其の智德を研磨し、自ら禽獸と異る所以を推明し、益々之れを擴張する時は、人類の幸福を增進し、人の人たる所以の大道初めて明かなるべし』といふ人道の大義に激し、實利實用、殖產興業が明治の新人が進むべき道なるを悟りたる氏は、其の文明的實業家となるべく、先づ米國の經濟界を視察見聞し世界の寶庫たる此の國に新運命を作るべしとて、奮然渡米に決心せり。

桑港の大道商人となる

されど遠く北米に渡るには多くの旅費を要すべく、而して財力の欠乏を如何せんや。氏は千思萬考の末漸く案出したるものあり、其は米國に日本玩具を賣つて其の旅費を作らんとする新案也。彼の元祿の昔紀の國屋文左衛門が未だ富を爲さゞる時行製の玩具蜻蛉を飛ばして巨利を得たる故智に倣ひ、一個八厘の玩具紙製玩具蝶々を一萬個製造せしめて之れを鞄に容れ、前途の光明を夢みつゝ長風萬里の舟に上れり。

氏の桑港に上陸するや直ちに大道商人となり、此の紙製玩具蝶々を喚び歩き、原價八厘のものを米貨十五仙に鬻いて、一日數百個を賣り盡せしが、多くの群集を其の左右に喚びたるより、道路妨害の罪に問はれ、其の商品は沒收され、所在の警察署に拘留さるゝ身となれり。

薄暗らき拘留場に米人の不法を怒り、悲憤の涙に暮れたりしも、遂にせん術なければ辯護士に言ふて十弗の保釋金を拂つて此處を出でぬ。其の再び自由の身となつてよりは初志を變へず、益々其の行商に努力したるが、約一ヶ月にして一萬個の蝶々を賣り盡くし、二千五百圓の利益を得たり。

竹細工の製造所經營

此の資金を得たる氏は、某米人と共同して竹細工の製造所を經營し、樫と竹とを以て細工したる家具を販賣したりしが、之れ亦米人の意に投じ、莫大なる利益を擧げ、其れより尙進んで雜貨店をも開業して其の規模を擴張せしが、偶々父君の危篤の報に接して日本に歸り、遂に保險界の人となる。

明治二十八年二月、日清戰爭の最中、氏は明治火災に入社したり、氏は先づ保險界の初舞臺に京都支店長として其の快捷なる手腕と敏活なる伎倆を示せしが、三十年村井兄弟商會の米人と提携して煙草製造會社を組織するや、米國の事情に精しく而も又善く謀り善く斷じ、活眼と敏腕を有する人を物色して其の選は氏に落ちたり

村井商會に入る

氏は村井商會の爲めに双肌ぬぎ、其の積極的、活動的、進取的なる營業方針に百折撓まざる意氣を以て之れに當り、遂に村井家の大を爲さしめたるが、三十七年煙

草專賣事業政府に依りて開始さるゝや、村井商會解散すると共に、村井家を去り自ら朝鮮に赴いて、英米煙草會社朝鮮總代理店を引き受けしが、後其自己の利害と毋國專賣局の利害と相衝突するの甚しきものあるを見て、忽ち之れを止めて日本に歸り、再び保險界の人となるべく、共同火災の計畫に參與し、創立後取締役支配人として快腕を揮ひ、四十四年常務取締役となり、會社の内外に折衝してその基礎を堅固ならしめ、遂に今日の大を爲さしむ、。

而して其の間、太平生命保險、日本徴兵保險、日本蓄音機會社の創立に盡力し、現に其の取締役たり、其の他審美書院の監査役として、米支協會の常任幹事として帝國飛行協會財務理事として、日本の文明の爲め大なる努力を拂ひつゝある也。

倉知氏の人物

氏は人となり温厚篤實にして仁慈の情に富み、清廉勤恪にして正義に勇なり、其の信は以て人を服し、德は以て人を懷く處、會社の諸務を總括して、將に將たるの器を備ふ。而して其の機敏にして輕佻ならず、沈重にして澁滯せず、不撓の精神と活達の才能を以て理非を裁決し、百事を處置する氏の如きを有することは、之れ共同火災保險會社の誇ならずんばあらざる也。

小池國三氏と其事業

——小池氏ありて仲買人の地位向上す——

徒弟より身を起す

氏は山梨縣甲府の人、慶應二年四月を以て同市柳町に生る、本姓は淺川氏養はれて小池氏を冐す、年甫めて十三土地の豪商若尾逸平氏の徒弟となる、主翁その從順にして勤勉些事苟もせざるを愛し、漸く長じて益々重用す氏は、主として生絲部に從事し、翁に從ひて上信武野の間を往來し、機略縱横盡く其の圖に當り、貢献する處頗る多し、後鑛山部に轉じ、金鑛採掘の事を監す、此の間或は積雪の封鎖に遭ひて米鹽の窮乏を訴へ、或は橋梁流失して物資の杜絶を來し、困苦艱難備さに嘗め、回想して轉た慄然たるを覺ゆと云ふ。然りと雖ども亦其の反面に於て、氏が心身の錬磨多くは此の間に涵養せられ、他年飛躍の素地實に此に胚胎せるものと謂ふべし。後銀行業を創むるに及び、氏擢てられて之れが經營に衝り、日夜これが發展を劃策す、居ること十有七年、時恰も日清戰後經濟界益々多事ならんことを達觀し、有價證劵取引の愈々有望なるべきを察し、乃ち實を告げて暇を乞ふや、主翁その志を壯とし、破格の待遇を與へて之れを聽す、氏乃ち遠大の志を抱き、徐ろに鵬翼を張りて單身成功の首途に立つ、是れ實に明治二十八年八月、今を距ること僅に二十年、氏乃はち兜町に入りて、取引の實況を研究すること三年、明治三十年四月仲買人の

免許を得店舗を同町二番地に卜して、年來の宿望茲に遂げ、呱々の聲を斯界に擧ぐ

顧客本位の營業方針

氏は當時本邦仲買人が、自から輸贏を市場に爭ひ、顧客の利害を以て、己れが得失の犧牲に供し、妄りに權謀術策を弄して、其の社會上の地位甚だ卑きを嘆き、飽く迄着實なる實業家を以て立たんことを誓ひ、誠實敏速秘密を以て顧客に接するの憲法とし、一に顧客本位を以て營業の本旨としたりしかば、數年ならずして嶄然頭角を現はし、幾もなく一二流店舗の壘を摩するに至り、開業僅に三年擧げられて、仲買人組合委員となり、爾後毎期再選せらる、以て如何に氏が同業者間に重きを爲されたるかを知るに足る。明治四十年二月擧げられて東京商業會議所議員となり、大正二年衆望の歸するところ推されて仲買人組合委員長の職に就く。

顧みれば、氏が仲買人を開業してより、日清戰後日露戰役に遭ひ、踵で大正三年の世界的大動亂となり、此間狂瀾怒濤の襲來に會したること屢次なりしも、氏が才氣は却て此間に煥發し、悠揚として操縱を誤らざりしが、幸に蹉跌を致さゞるのみならず、氏の手腕は愈砥厲を加へ、益々業務の發展を來せるは豈に啻に自然の運勢とのみ謂ふ可けんや。氏元來謹嚴寡默一言隻語苟もせず、然れども談偶々財政經濟の問題に觸るゝや談論風發滾々竭きず、その見地その才氣人をして眞に將に將たるの器たるを覺ゆしむ。

小池合資會社創立

明治四十年四月資本金一百萬圓を以て小池合資會社を創立し、專ら有價證券賣買及び信託の業も營む。氏部下を遇すること厚く、且づ能く適材を適所に配し、各々その手腕に任じて、敢て干渉するを好まず、靄々たる和氣店内に漲ぎり、各課の事務巧に連絡せられて、些の澁滯を見ず社運日に隆盛に向へり。其出資社員左の如し

小池國三　増田金四郎　渡邊仁三　淺川清造
杉野喜精　水木常太郎　谷川日傳

米遊五ヶ月

明治四十二年、米國大平洋沿岸商業會議所の招待に應じ、渡米實業團組織せらるゝや氏亦選まれて員に加はり、同年八月澁澤男等と共に巡遊五ヶ月、親しく彼地の實況を視察して、商工業に於ける多大の抱負を齎らして、同年十二月歸朝せり。明治四十三年桂内閣が四分利公債を發行するに方り、シンヂゲートの組織せらるゝや氏は歐米各國の實例を擧げて、ブローカーの之れに加はらんことを論じ、結局再下引受を爲すことゝなる。氏乃ち店員を四方に馳せ、勸誘甚だ努め巨額の應募額を得て之れを提供し、茲に始めてブローカーの勢力を示すことを得たるは、誠に會心の事たらずんばあらず。爾後公債市債を發行せんとするや、必ず先づブローカーの内意を徵するを例とするに至れるは實に本邦仲買人の一新紀元と謂つべし。かくて同社信託部は豫期以上の發達をなし、曩には北海道拓殖銀行債券五百萬圓を一手に海外市場に賣出し、近くは露國大藏省證券の大部分を同社の手に依りて募集し、そ

の外國部に於ては、海外資本家と直接取引の途を開き、有價證券を輸出して英米佛の資本を流入したること實に數億に達し、最近本邦在外公債を輸入して、正貨の利用を圖りたるが如き、大に具眼者の注目を惹き『コイケ』の名を外國市場に馳することを得たるは、正に是れ奉公の一端たらずんばあらず。

株式會社商榮銀行買收

明治四十四年株式會置商榮銀行を買收して、之れが頭取となる。同行元來預金の取扱を爲さず、人之れを怪む、氏曰く、株式仲買人にして銀行を經營す、預金を取扱ふは却て銀行の存立を危くする所以ならずやと、問ふもの首肯す、以て氏が如何に用意の周到なるかを知るべし。同銀行の重役左の如し

頭取	小池國三	取締役	增田金四郎
取締役	渡邊仁三	取締役	杉野喜精
監査役	淺川清造	監査役	水木常太郎

日本化學紙料會社

日露戰役熄みて茲に十餘年、樺太島新附以來氣候の冱寒と、交通の不便と、地理の不知案内等とに沮められ、一二事業の外は久しく世の閑却する所となり、空しく天惠の寶庫を放置するを慨し、義弟塚越氏を顧問として、大正四年十一月資本金三百萬圓を以て、同島落合に日本化學紙料株式會社を設立し、内淵川沿岸及び其の他に各廣袤數十里に亘れる、森林の伐採權を得、今や人夫數千人を督して、盛に工事

を急ぎ器械の据付をなし、明春早々製品を市場に出さんとす、斯くて海外に仰ぎ來りたる製紙原料は他社の經營せるものと共に、漸々驅逐せらるべきのみならず、更に同社第二擴張成るに至らば、却て之れを彼れに供給するの現象を呈するに至り、落合附近の地は數年を出でずして、一市街觀を呈するに至るべし、之れ豈に氏一個の快事業たるのみならんや。其重役左の如し

社長	小池國三	專務取締役	塚越丘二郎
取締役工場長	塚越卯太郎		

氏亦子弟敎育、社會改良に多大の興味を有し、將來有爲の青年に或は貸費し、或は給費して、其の業を爲さしむるのみならず、學校、圖書館、寺院、感化事業等に寄附したるものその額勝げて數ふべからず、吾人は此に老實渾厚にして福德圓滿なる氏の爲人と其事業を記し了りて、一種會心の念とゞむべからざるを覺ゆ。

株界退隱

氏上記せし如く、小池氏は明治三十年四月、仲買人開業以來茲に二十年、業務日に月に隆盛に赴きしも、本年四月十五日は正に開業二十年に相當せるを以て、創業當初の宿志に基き、同日を以て仲買を廢業し、斯くて仲買人及び小池合資會社を廢業解散し、全然株式界を退隱し、今後專ら商榮銀行頭取として努力さるゝことゝなれり。同銀行は國債地方債社債の引受、公共團體及會社に對する金融について、一種特別なる便宜を與へ、以て正に大に發展すべき我が財界の爲に、貢献しつゝある所多大也。

整理されたる東洋毛織と藤田謙一氏

——非凡なる整理的天才と囑望すべき其將來——

斯くして進展

東京府荏原郡大井町に煤烟絶ねせざる東洋毛織株式會社は、明治四十年の設立にて、元は後藤毛織會社と唱へ、後藤氏の經營せしものなりしが、同氏の經營中は一日として得意の日なく漸次悲境に陷りて、倒壞の悲運當に焦眉の間に逼りし時、今より、四年以前此危急を救はんが爲に、入社せしは現專務取締役藤田謙一氏にして氏は徐ろに後藤氏の遺口を觀察し、以て營業不振の原因が奈邊に存ずるやを探究し間もなく工場營經法として不完全なる點を發見し、鋭意改革に從事したり。

蓋し後藤氏の遣り方はセル、ヂル其他の薄地羅紗を主としつゝ、其他厚絨氈、莫大小、ショール其他種々雜多の毛織物に從事せし爲に、統一を欠ぐ點多く、工業不振の主因茲に存ずるを以て、氏は直ちに此點を指摘して、後藤氏の覺醒を促がし、次で大正四年十月一大斧鉞を下して、從來の職工や小僧上りを罷め高等の敎育を受けたる人物を採用し、人物の統一を爲し、同時に營業法にも改善を加へ、セル地厚物の服地を主とし、絹織物の製造毛織物の加工販賣等狹く深く事業を大擴張し、同時に資本金三百萬圓の東洋毛織株式會社とし、氏は專務取締として、鋭意社運の挽回に努めたり。

元來毛織の業たるや、多くの事業中最も至難なるものにて、歐米先進國の同業者と連衡することの及ぶべからざると共に、原料たる羊毛は、總て濠洲支那等に仰がざるべからず。此關係は常に或る不安の念を與へて、寸刻の油斷をも許さゞる狀態にあるを以て、氏は先づ自家の製品に依つて、本邦內地に於ける輸入防遏に力を注ぎ斯くして、同社の悲境は漸やく救はれ、事業は日と共に順境に向ふに至れり。實にや向上の道を辿る程愉快なるものはなし、今や東洋毛織の運命は、此愉快味を味ひつゝ順風に乘じて帆を十分に張りし觀あり、現に同社が軍需品として、聯合諸國の需要に應じつゝあるは、適々航路上に橫はる島嶼の美累に接したるが如きものにて、前途更に一光明を加へたるものならずんばあらず。

整理的天才

蓋し氏の整理的手腕は殆ど天才的にして、其今日まで整理し來りし會社は敢て東洋毛織一つに止まらず。氏は明治六年正月五日、青森縣弘前に呱々の聲を揚げ、生れながらにして、東北人特有の百難不撓の豪懷と邁往進取の天性とを享有し、而も有つて可ならざる暗晦の氣分を毫も享けずして、磊落不羈の美性を具有す、嘗て明治大學に於て成績常に衆を壓し、敎授よりは未來ある男と囑望され、學友よりは頭腦の好い男と畏敬され、明治二十七年優等の成績を以て卒業せしは、實に我が藤田謙一氏なりき。

氏は直ちに大藏省に入り、官吏生活を營みしも、磊落不羈の性行は長く氏をして

官界に止まらしめず、在勤僅に三年、勃々たる勇心は氏を驅つて官を辭して岩谷商會に入り、其支配人とならしめたり、これ實に氏が實業界に於ける出發點にして、爾來驥足を伸ばして、邁進しつゝある間に、日露戰爭勃發せしを以て、機を見るに敏なる氏は直ちに岩谷氏と計り、朝鮮に渡りて日韓印刷株式會社を起し、自ら社長となりて、鋭意業務を擴張し、これで漸やく安心だといふ點にまで進め、營業主任を置きて歸國したり、然れども此事業は餘り世間に認めらるゝ程の大事業にもあらず、氏も亦全力を注ぎし事業にはあらざりき。

之より先き豪商小栗家の破綻するあり、一時天下の耳目を聳動し、殊に財界に大恐慌を惹起せしめたり、是に於て故桂公を首め、阪谷芳郎男は關宗喜氏を推擧して整理の任に當らしめ、專ら救濟の策を講ず、關氏は當時遞信省計理局長として、夙に令名あり、世人亦其敏腕によりて整理の實の擧げらるべきを期待したりしも、大厦の將に倒れんとする、一木の能く支ふる所にあらず、前後二年の歳月を空費して功績終に擧らず、病膏肓に入りし小栗家は、醫者に匙を投げられて、擔ふ所の運命は倒産より外に途なきに至りね、此時此瀕死の病人を關氏に代つて診察せしは、則ち藤田氏にて氏の臨床以來一日と効果顯著なるに至り、關氏が救濟の一策として、起せし東洋塩業會社の如きも、當時頗る危殆に陷り、前途甚だ暗澹たるものありしも氏は臺灣塩業株式會社と組織を改めて、快刀亂麻を截る的の手腕を下し、經營宜しきを得て事業日を趁ふて殷賑となり、以て小栗家をして舊態を存じ能はざるまで

も沒落の悲境を免るを得せしめたり。此事端なくも世に喧傳せられて隱れたる手腕家として氏を並の中に認めしむる試金石となり、氏の名聲は一時に實業界に喧傳せられ、東洋毛織の整理を斷行するに至つて、氏に意義ある時代を形つくらしむるに至りたり、其松方一家と相近づき、神戸の金子直吉氏と懇意になりしも、蓋し小栗家整理完成の最後よりなりき。

世人往々氏を以て神戸の鈴木商店と主從の關係あるかの如く誤解するものあり、惟ふにこれ氏が鈴木商店と、關係ある事業の大部分に關係を持てるを、皮相より見たる誤解にして、氏は鈴木商店の客分とし、金子氏の友人として其事業を助け居れるに過ぎず、些の主從關係をも有せざる也。若し强て系統より論ずれば、氏は夫れ松方系の人か。

蓋し陸海軍に薩長の閥ある如く、我が實業界にも多くの系統あり。曰く、三井系曰く、三菱系曰く、松方系、古河系、其他何々系と數十指を屈するも尙足らざらん、何れも時ありて無名の士に名を成さしめ、又は鰻上りに出世する巧言令色の徒を出すとも雖も、大体に於て事業界の錚々たる勇士を網羅し、何れも堅實なる步武を進めつゝあり、松方系は長兄嚴君を首め、正作、幸次郎、正雄、五郎、正熊、義輔の諸君其他一家一門の人々は政治、外交、金融界、事業界、工業界に深き根ざしを植ゑて松の綠の色も濃く、彌が上に榮ゑつゝあるは、何人も詳知の事實なるが、藤田氏は松方五郎氏と最も多く共鳴し、松方一家と非常に親密にして、且つ共に事業に盡力しつゝ

あるに見れば、君を呼んで松方系の人と做すも強ち無稽の言にあらざるべきか。

洋々たる其將來

氏今や東洋毛織の爲に全力を傾注し、雨が降るも、風が吹くも、一日も其姿を同社の重役室に現はさゝることなき多忙の身を以て、臺灣塩業株式會社にも專務取締役となり、業務に五分の隙だに與ゑず、尙千代田護謨、日韓印刷兩社の社長となり、東洋製糖大日本塩業廣島瓦斯三社の取締役たり、殊に廣島瓦斯の如きは田舍だから單に取締役として餘り深くは關係せぬが、今後或は主としてやるかも知れんと、これ或は氏の未來の或る企圖を暗示するものにあらざるか。氏今年四十四歲自ら青年を以て任じ、本當の仕事はこれからなりと信じ、造次顚沛にも發展の志を撓ましめず、近時其三度の食よりも好物なりし撞球臺をさへ、本邸に塵まぶれになりて横はらしめて顧みず、事業的勇猛心が如何に嗜好以外に超越せるかを察すべく、意義ある未來の洋々たる、此一事にてもトすべきにあらずやゝ（大正五、一一、三記）

圖書閲努力の後ち

一日の激しきつとめに疲れたる節々をつよくタオルにてもむ
湯を出でゝ赤き皮膚をばながめつゝ勞働のたまものと一人ほゝゑむ

久原鑛業會社と久原房之助氏

＝久原氏の青年訓を再讀三誦せよ＝

青年に對する理解

實業界の新人物を迎ふるに盛んなる、本年卒業の帝大各科、高商、商工、慶應等出身青年紳士は、其成績の劣等ならざる限り、いづれも就職口を見付け得たり、斯の如きは近年稀なる現象として、學界の爲にも實業界の爲にも慶賀すべき事也。

此際吾人は此等青年紳士並に將來青年紳士たるべき學生諸君の爲に、旭日昇天の凄じき勢、眞に日本一なる久原鑛業株式會社長久原房之助氏の青年訓を此に紹介すべし。

久原鑛業會社は現資本金三千萬圓を七千五百萬圓に增加し、新に海外に大發展を試みんとす、其新人材を要するに於て恐らく日本一の大會社にして、之を青年側より云ふも、斯る有望なる大會社に潑溂たる意氣を發揮して手腕を試むるは、男兒快心の事たり、而も當の社長たる久原氏は尤も眞面目に青年を尊重信用し、且つ青年に對する理解を有する人なるに於て、同氏の青年訓は克く傾聽せざるべからず。

青年を以て任ずる久原氏

第一に予の快心なるは、富一億に近かんとする財界の成功者久原氏が、自ら青年を以て任ずること是れなり、曰く『私は尙ほ青年の未成品であります』と、而して彼れは尙ほ一層謙遜して曰く『將來如何に成行くべきか今日之を豫知することは出來ません』と、彼れは十年後に男爵藤田、男爵住友を凌ぐのみか、或は三井、三菱を脚下に見るの成功に達すべしと財界一般に噂せるも、而も御本人の久原氏は一點倨傲の態度なく、身を謹み心を直くして只管に財界の爲に大計劃を立つ、彼の尤も望む所は財寶にあらず、小成金は自動車を飛ばし、醜巷に金ピカを誇り、僞物の書畫骨董を弄ぶも、久原氏は一意專念有爲なる青年を得んことを望むなり、彼れは其事業を進行する上に於て、どうしても青年の味方を賴まざるべからず、青年を養成して仕事を仕込み、彼の左右たり股肱たらしめんとす、彼曰く『一旦志したる事は遂げざれば止まぬ精神を持する青年は尤も賴しいでス』と、彼れ之を說明して曰く

己れの蒔きたる種は己れ之を收めざるべからず、世には種々の事情あり逆境に立ち、百事意の如くならず、不平起り失望に沈むこともあり、然れどもソコは大切な時なり、その時に隱忍自重して一身を其仕事に打込む覺悟を起すの勇猛心を奮はざるべからず、凡そ何事でも己れの目的に向つて驀然直進せば必ずソコに光明を認め、自己の存在を意義あらしむるに至るものなり云々

森村組の倉番人足

久原氏の慶應義塾を出づるや、森村市左衛門君の人格を慕ひ、森村組に採用を乞へり、森村翁君に面會し、其切なる希望を聞き『御希望は至極御尤もなるも安樂に生活して世路の辛酸を味はざる人は私方に必要はありません』と膠もなう斷られたり、此に於て氏は神戸に赴き支店の廣瀨氏に一身を托せんとせるも、翁のお斷りを喰ひし氏は此處でも謝絕せられ、更に上京して再三再四翁を訪ひ、採用方を只管乞ひしに、翁はさらば倉番人足なら雇入れてもよしと云はる、北濱銀行頭取久原庄三郎氏の長子房之助氏の此時の奮發はエライ、倉番人足でも結構ですと、其翌日より森村組の人足となり金槌を腰にし、一年三ケ月間荷造仕事に餘念なかりしが、此間に氏は荷造の學習をなし、品物を鑑識する力を養ひ、後ち鑑識會に於て高點を得る迄に目きゝとなりたるより、森村翁は大に滿足し、氏を倉番人足より拔擢して洋行せしむることゝなりたり。

不言實行

不言實行は久原氏の主義也、氏は高等敎育を受けたる青年の精神手腕人物の如何を試むべく、森村翁と同樣の擧に出づることあり、今は久原鑛業の理事として小池張造工學博士竹內維彥兩氏と鼎立せる齋藤浩介氏の如き、高商を出で久原に使用せらるゝや日立鑛山に逐ひ遣り、約五年間たゞの一度も昇給せず、他の同僚が漸次立身出世して各會社の主任、課長となるも齋藤氏は依然三十圓の月給取なりしなり、

而も氏は一向頓着せず、久原氏の所謂己れの一身を鑛山に打込み、己れの目的に向つて驀然直進するを見て取りたる久原氏は、五年間一度も昇給せざる齋藤氏を拔擢して日立鑛業事務所々長たらしめ、千幾百の所員を驚倒せしめたり、久原氏の『此の男は』と眼をつけたる人物を試錬すること以上の如し、青年諸君久原氏は何んと愉快な人物にあらずや。

艱難を歡迎せよ

久原氏更に青年を說いて曰く

人は心身を研かざれば、力は出ぬものぞ、而して困難は人間を研く第一の良藥である、諸君は世に出でて、成るべく多くの困難に遭遇するが宜しい、諸君は大に困難來を歡迎せよ

と、彼れは更に詳說して曰く

世人の第一の誤は、難きを避けて就くことなり、かくては迚も意思も智識も練磨研鑽は出來ません、困難に向つて突進し、之と奮戰し格鬪するは、要するに己れの體力意思を鍛錬するのである云々

而して久原氏は人は誰しも生知にあらざれば失敗を免れざるも、失敗は成就の基となるべきもの、敢て失望落膽すべきものにあらずとの信念頗る堅きものあり、蓋しこは久原氏自ら實驗する所なり、氏の日立鑛山を經營するや、百難ならび到り、技

師は逃げ出し、事務員も姿を隱し、こんな人に使はれて居ては迚もウダツがあがらぬと、氏の使用人は追々と氏を見棄てゝ下山したる位にて、氏も一時は茫然自失せんとせし位なりしも、ココが己れの腕だめしの時なりと、氏の奮鬪努力は層倍劇しく、終に住友の別子銅山、古河の足尾銅山を凌駕すべき日本一の大銅山たるに至らしめしなり。

强情と必遂の氣象

强情と必遂の氣象！　之が久原氏のエライところ也、如何なる困難にもビクともせぬのが久原氏の平生なり、彼は森村組より引き離されし時は男泣きに泣きたり、斯く迄に彼は外國貿易に執着したりしなり、而も親戚一家の事情は氏の自由を許さずして遂に小坂鑛山の經營に當らしむ、氏は乃ち二十三歲より三十七歲までの十三年間、己れの希望にもあらざりし山中に引込み、友人とは一切交際を絕ちて一身を打込みて奮鬪努力し、遂に黑鑛の處置に成功し、藤田組の小坂鑛山をして今日あるの基礎を鞏めたり、即ち氏は一旦志したる所は必ず遂げざるべからずとの一心を以て己れを律するのみならず、之をば青年諸君にも希望するなり。

久原氏は青年を愛すること人一倍なるも、決して溺愛せざるなり、英雄美人を愛すと云ふも久原氏には淺酌低唱の情趣を解せず、解するも馬鹿らしく感ずるならん而して彼は美人の代りに青年を愛好し、大に青年を養成して己れの第一の目的たり

し一家親族の事情親族の事情之を遂ぐる能はざりし貿易事業をも、將來青年の力によりて遂げんとするなり、久原氏曰く

明治維新の際は時機好かりし故に、風雲の志あるもの起ちて事を成すには最好の機會なりしと今日の人は之を口にするも、併し乍ら今日は更によいのである、日本が東洋の主動者たるべきは自然の大勢である、南洋の如きは日本人に取ては恰好の活動場なり、東洋の天地には維新に百倍せる大機運が常に來往しつゝあり、私も此舞臺の一優とならことを希ふものである云々

果然久原氏は南洋に着眼したり、氏は有爲なる青年數名を南洋に派遣して調査に從事せしむるのみならず、世界一の大市場たる支那を閑却せず、前廣島市長吉村平造氏以下若干名を南北兩支那に派遣して調査中なり、政務局長にして支那通なりし小池張造氏を幕下に羅致したるも、久原氏の志大に支那に伸びんとするにあるなり青年諸君、諸君の前途は洵に多望也、實業界に手を擴げて諸君の來り投ずるをば歡迎しつゝあるなり、偏へに自省發憤を祈る。（久原氏毋堂一周忌の其夜）

あゝ七月の十三日　　久原氏に代りて

母人のみまかりしのちわが心さみにさびしくなりにけるかな
ここしへにわれははたらき亡き母の遺志を守りて國につくさむ

化學工業界の偉績日本窒素肥料株式會社

——野口專務の奮鬪努力——艱難終に汝を玉にす——好社長と好女房役を先輩と親友間に求め得て業務次第に發展向上——

過去及び現在

日本窒素肥料株式會社の歴史は、一面に於て誠實に我國の化學工業界の小歴史なり、同社の沿革史は即ち我帝國化學工業の縮史なり、即ち現在資本金壹千萬圓を擁し、貳萬五千馬力の水力電氣を使用し、而も無盡藏なる窒氣窒素を原料となし、以て年額硫酸安母尼亞貳萬餘圓を製造し、其副產物としてセメント貳拾萬樽、酸素一時間六十立方米突を產出しつゝある同社は今や更に進んで工場の擴張を計り、硫酸安母尻亞毎年拾萬噸價格壹千五百萬圓以上の輸入防遏を爲し、安價なる窒素肥料の供給を爲す目的を以て國民經濟上大に貢獻せんことに努力しつゝあり、其盛運化學工業界の以て珍重する所、然れども創業當時明治三十九年頃を回顧せば、資本金は僅に貳拾萬圓にして、電力及び電燈を供給する微々振はざる一小電氣會社に過ぎざりしなり、而かも爾來茲に拾ケ年、經營の困難を告げ、前途の暗憺たる事洵に一再に止まらざりしと雖、當局者の信念牢として動かず、、拮据精勵飽く迄進取の方針を取り、着々として發展進歩の實を擧げ、終に今日の大を爲すに至りたり、吾輩が艱難汝を玉にすの古語を以て同社の創設功勞家たる、野口遵氏に敬意を表せんとするは以なきにあらざる也、いざ之れより同社の經路に付て少しく語ること許せ。

同社の創設

同社は元曾木電氣株式會社と稱し、明治三十九年一月資本金僅に貳拾萬圓を以て薩摩國伊佐郡に創設し、專ら牛尾、大口、兩金山に電力を供給し、併せて大口村に電燈を供給するを以て業となせり、然るに其使用する水源地たる曾木瀧は川内川の中流に位し、若し之が全水量を利用する時は、優に貳萬五千馬力の動力を發生し得るを以て、翌四拾年四月日本カーバーイド商會と協定し、アセチリン瓦斯の原料たる炭化石灰(カルシユームカーバイド)の製造を計劃し、資本金を四拾萬圓に增加し、既設發電所の下流に六千キロワットの水力電氣を起し、一面に於て同商會は貳拾萬圓の資本を以て熊本縣葦北郡水俣町にカーバイド工場を建設してカーバイドの製造販賣に從事し、曾木電氣會社は之れに無料にて電力を供給し、其利益を相互に折半分配することゝなせり。

基礎の確立

窒素肥料として從來使用しつゝある瓦斯及びコークス製造の副產物たる硫酸安母尼亞、智利國の特產たる智利硝石、魚肥及諸油粕等は、自ら其給源に限りあるを以て逐年其需要を增進しつゝある窒素肥料は、將來如何にして之れを供給すべきやは、洵に是れ肥料界に於ける喫緊の一大問題たりしなり、されば十數年來歐米化學者間に於て空氣中に存在する無盡の游離窒素を利用し、窒素肥料を製造する方法の研究に從事したりしに、明治參拾九年の末に至り、獨乙化學界の泰斗アドルフ、フランク、エ

ヌ、カロー兩氏に依て電氣を應用し、石灰窒素と稱する窒素肥料幷に之を原料として、硫酸安母尼亞を製造する方法世界に發表せられ、歐米各國は競ふて此驚異すべき同氏の專賣權を買得し、各數萬馬力の電力を使用して之が製造を開始するに至れり、是に於て曾木電氣會社も亦充分之れが調査研究の結果、本邦に於ては多數の水力を利用し得るの天惠を有するを以て、此に窒素肥料を製造すべき大決心と大計畫を爲し、明治四拾壹年四月前記專賣權日本一手使用權を獲得し、日本カーバイト商會を買收し、同年十一月十日資本金を壹百萬圓に增加し、社名を日本窒素肥料株式會社と改稱し、明治四拾貳年五日水俣工場に石灰窒素肥料製造の設備をなし、併せて大阪に硫酸安尼亞工場を設置し、之が製造を開始することゝなれり、而して同四拾參年拾月更に資本金を貳百萬圓に增し、新潟縣西頸城郡小瀧村に、壹萬五千馬力の姫川發電所並に同縣同郡青海村に青海工場の建設に着手し、同四十五年三月又復金貳百圓を增加して四百萬圓となし、熊本縣阿蘇郡錦野村に七千キロワッ資本トの白川發電所と、同縣八代郡鏡町に鏡工場の建設に着手し、同時に大阪工場は之を閉して所屬の硫酸安母尼亞製造機械の全部を鏡工場に移轉し、同四拾五年七月曾木發電所及び水俣工場は之を鐵道院に賣渡して賃借使用したり、然るに同年同月姫川發電所は未曾有の洪永に縣道破壞せる爲め物資運搬の途絶へたるを以て、遂に工事を中止し、從て青海工場も亦當初の設計を變更し、單に石灰原石の採掘販賣の設備をなすに止め、斯くて大正三年鏡工場一部竣工を告げたるを以て、白川發電所の完成

するに至る迄、熊本電氣株式會社より電力壹千七百キロワットの供給を受け、石灰窒素並に硫酸安母尼亞の製造を開始し、又同年貳月大分縣速見郡川崎村にカーバイド製造工場の建設に着手し、之を日出工場と命名し、其所要電力は之を大分水力電氣株式會社より供給を受くることゝなし、同年十一月白川發電所工事の竣成と共に鏡工場亦諸般の設備完成せるを以て、全部白川發電所の電力を使用し、（熊本電氣會社よりの送電は停止）漸く當初の計畫を實現するに至りしものにして、茲に初めて同社の基礎全く確立して動かざるに至れるなり。

同社の現狀

創立以來十星霜專ら石灰窒素の製造販賣に力を注ぎ、逐年其需要增進しつゝありと雖、我國の農家未だ充分其使用方法に習熟せず、同社製品の全部を消費し盡すこと能はざるを以て、前記鏡工場に於て石灰窒素の大部分を硫酸安母尼亞に改造し、之を市場に供給しつゝあり、硫酸安母尼亞は其肥効の卓越せると、使用方法の極めて簡易なること既に農家の知悉せる處にして、逐年其需要激增し從來之が供給は全部海外よりの輸入に俟てり、而して最近同品の輸入額は實に一ケ年拾萬噸に達し、其金額壹千五百萬圓を下らず、故に同社は之れが輸入を防遏し正貨流出防止の目的を以て、現在に數倍する發電所及び之れに對する工場を增設し、以て年額拾數萬噸の硫酸安母尼亞製造の計畫を爲し、其實施の第一着手として曩に鐵道院に賣却したりし曾木發電所及び水俣工場を大正四年四月買戻を受け、又大正四年七月六日附を

以て許可を得たる熊本縣下內大臣川の、水利を使用する電力約四千キロワットの發電所を熊本縣上益城郡白糸村に建設し、大正五年十二月より鏡工場に送電を開始し更に水俣工場の擴張を企て、之れに送電する目的を以て、大正四年七月七日附を以て許可せられたる、鹿兒島縣下川內川の水力を使用する壹萬四千キロワットの發電所を鹿兒島縣薩摩郡鶴田村に建設に着手し、尙大正五年五月四日附許可を受けたる熊本縣下綠川の水利を使用する四千七百キロワットの發電所を熊本縣下益城郡東砥用村に建設に着手し、之れをば鏡工場へ送電せんとするなり、而して是等擴張工事は全部本年中に完成の豫定なるを以て、來年度よりは同社は實に三萬八千二百キロワット以上の電力を使用し得、一躍して左の生產能力を有するに至るべしき豫定なりとは、其盛運眞に驚歎に堪ゆざる也。

△カーバイド六萬噸（一ケ年）　△石灰窒素七萬五千噸（一ケ年）　△硫酸アンモニア七萬噸（一ケ年）　△酸素一時間三百六十立方メートル　△セメント六拾萬樽（一ケ年）

營業の狀態

一、各工場の製造能力と發電所の出力

同社の現在及び擴張後に於ける各工場發電所の能力を示せば左の如し

工場名	原動發電所名	出力	製品名	現在擴張後生產力（年額）
鏡工場	白川	七、〇〇〇KW	カーバイド	壹萬壹千噸
	内川	四、〇〇〇KW	石灰窒素	貳萬七千噸
	大臣川	四、〇〇〇KW	硫酸アンモニア	參萬六千噸
	絲川（工事中）	七、〇〇〇KW	セメント	貳萬參千噸
水俣工場	曾川	六、〇〇〇KW	酸素	貳拾萬樽
	内川（工事中）	一四、〇〇〇KW	石灰窒素	壹萬噸
	本川		硫酸アンモニア	參萬參千噸
			セメント	參萬九千噸
			酸素	參萬六千四百噸
H出工場	大分水力電氣株式會社ヨリ送電	一、〇〇〇KW	カーバイド	參拾壹萬樽
青海工場	一ヶ年約壹千六百萬貫ノ原石ヲ採掘販賣ス			一時間二百四十立方メートル
			カーバイド	貳萬千噸
			酸素	貳拾萬樽
				一時間六千立方メートル
			酸素	貳拾九萬樽
				一時間百二十立方メートル

二、同社の有する特許

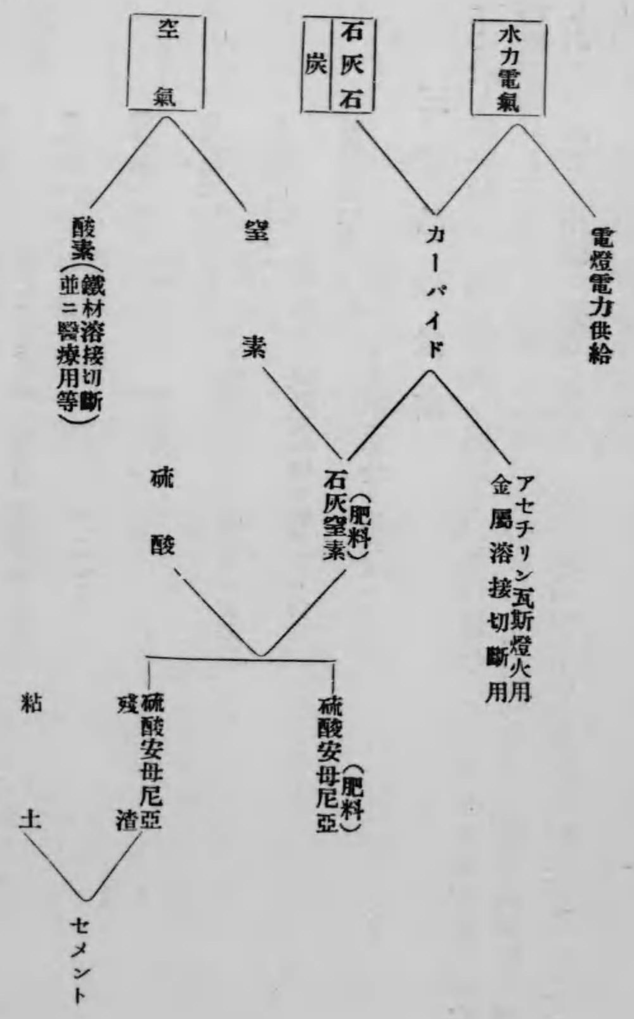
伊太利國ローマ市ソシエタ、ゼネラーレ、ペル、ラ、シアナミイデ會社はフランク、カロー兩氏の石灰窒素製造に關する特許權を買收し、同社は日英米獨佛墺瑞西等の諸國に該特許權を分權して特許實施會社を設け、石灰窒素及び其派生物の製造販賣をなさしめ、而して同社は日本及び支那に於ける唯一の前記實施會社にして、歐米に於ける各實施會社と氣脈を通じ、新規なる發明又は改良等、苟も斯業の進歩

に資すべきものは、双互に之を使用し得るの特許を有す、同社現在所有の特許種類は左の如し

特許第一五四八一號　窒素化合物ヲ製造スル方法
特許第一六六五〇號　銅ヲ以テ空氣ヨリ窒素ヲ製造スル方法
特許第一八六四二號　炭化物ヲ窒素中ニテ粉末ニスル方法
特許第一八〇一八號　空氣アンモニア肥料
特許第二〇七三〇號　炭化物ヨリ窒素化合物ヲ製造スル方法
特許第二四三一七號　炭化物ヨリ窒素化合物ヲ製造スル方法
特許第二二六七八號　炭化物ヨリ窒素化合物ヲ製造スル方法

三、製品の説明

吾社は最も經濟的なる水力電氣を應用し、無代價にして、而かも無盡藏なる空氣中の游離窒素幷に石灰石を原料となし、次表に示すが如き製品を順次系統的に製造しつゝあるを以て、市場の狀況に鑑み、各種製品の生產を伸縮自由ならしむるを得るなり。



カーバイドは石灰と炭とを混合し電氣爐内に投し、高熱の電氣を通じて溶解せしめ之れを冷却して固體となし、石油空罐に五拾磅入貳罐を函詰として販賣す、其用途は漁燈用、鑛山用金屬切斷熔接用、冶金用還元劑並に一般點燈用等其使用の範圍極めて廣く、アセチリン、ランプの改良と共に、一層其需要增加の傾向を示し、現時我國

に於ける年需用額貳萬噸價額貳百八拾萬圓以上に達すと云ふ。

石灰窒素は此カーバイドを粉末となし、再び電氣爐内に入れ、之れに窒素瓦斯を通じ、加熱する時は窒素を吸收し、窒素含有量二〇パーセント以上の灰窒素を製し得べく、窒素瓦斯は空氣を壓搾して液體となし、之れを酸素と窒素とに分離せしめ、酸素は醫療用及び鐵板の熔接切斷用として、逐年其需要を增進しつゝあり。

石灰窒素は石油空罐六貫入貳罐を函詰となして販賣し、理想的經濟肥料として歡迎せられ、漸次需要增大しつゝあるも、極めて嶄新なる肥料なるを以て、一般の農家未だ其使用法に熟練せざる爲め、製品の全部を消費するの域に達せざるにより、殘餘の石灰窒素は硫酸安母尼亞に變製しつゝあり、此方法は蒸氣を石灰窒素中に通し、アンモニア瓦斯を發生せしめ、之れを硫酸中に導き、徐々に硫酸アンモニアに化生せしむ、而して石灰窒素よりアンモニア瓦斯を發生せしめたる殘渣に、粘土を加へてセメントを製造するなり。

四、職員及職工

現時同社の使用せる職員職工人員總計三千百三十名なり、其内譯を示せば、即ち左の如し。

事務員　五十三人　△技術員　百〇三人　△職工　二千九百七十四人

同社の經濟

一、營業成績の一班

創業以來同社事業の成績は敢て順境に在りしとは言ふべからざりしも、大正元年に至り、諸般の施設漸く其緒に着き、大正二年に至り營業狀態益々佳良に赴き八萬圓の財產償却をなすに至り、大正二年に至り鏡工場一部の竣成と共に豫定の計畫に基き、硫酸安母尼亞の製造を開始することを得るに及び、爾來收益の增加著しく、同社の經濟又從て其面目を一新したり、大正四五兩年の收支左の如し

年次	營業期別	收入金	支出金	利益金	利益ノ拂込資本ニ對スル割合	配當率	償却金	積立金	繰越金
大正四年	上	一、三八一、八二〇	六七七、七四一	七〇四、〇七九	四、一四二	壹割貳分	四五〇、〇〇〇	二五、五〇〇	五一、九九三
	下	一、六三四、六六四	七三〇、二五〇	九〇四、四一四	四、七六〇	壹割五分	五五〇、〇〇〇	三五、五〇〇	六七、一〇七
	合計	三、〇一六、四八四	一、四〇七、九九一	一、六〇八、四九三			一、〇〇〇、〇〇〇	六一、〇〇〇	
大正五年	上	二、〇四一、四二五	九四三、九八三	一、〇九七、四四一	五、四八七	壹割五分	六五〇、〇〇〇	四八、八〇〇	七〇、八四九
	下	二、三九三、〇〇三	一、〇三九、二四七	一、三五三、七五六	四、九二三	二割	七〇〇、〇〇〇	六五、四〇〇	七七、五〇五
	合計	四、四三四、四八三	一、九八三、二三〇	二、四五一、一九七			一、三五〇、〇〇〇	一二四、二〇〇	

二、收入內譯

是の如く收入の增加は利益の增收となり、現在に於ける財產償却金及び積立金貳百八拾八萬九千四百圓は、拂込資本金五百五拾萬圓に對し、五割二步五厘强に該當するに至れり。

三、營業資本

同社の大正五年下半期拂込資本は、五百五拾萬圓にして、之れに社債壹百萬圓を

主義の專務加ふれば、營業資本は六百五拾萬圓にして、外に積立金參拾萬九千四百圓、繰越金七萬七千五百五圓を有するなり。

四、同社の財產（大正五年十二月末現在）

同社の財產は之を財產目錄に就て一見せば明瞭也、乃ち左の如し

	円
株主勘定	四、五〇〇、〇〇〇、〇〇
白川發電所建設費	七六九、六四五・五四
鏡工場建設費	壹、參〇參、〇〇貳、四八
日出工場建設費	七七、四八八、參〇
曹木發電所及水俣工場拂下代內拂金	四〇五、七四四、八〇
新設諸工事費	貳、六六參、四六五、四壹
新設諸工事費內拂金及諸材料	壹、貳九貳、參四參、參貳
製品原料	參七〇、七九〇、五九
製品（炭化石灰石灰窒素及硫安セメント）	四二〇、八九八、參貳
諸取引勘定	壹、〇貳五、八四六、壹七
貸附器具及什器	壹九、八〇六、四壹
金銀勘定	貳參六、七參八、七四
靜船代價	壹貳、七貳壹、七六
合計	壹參、〇九八、四九壹、八四

將來と生產能力

以上記述し來れる諸點を綜合研究せんに、同社は事實に於て製肥業界に於て最も

良好の成績を示し、今後の膨脹に伴ふて、其前途の愈々益々洋々たる、眞に是れ春風春水一時に臻るの感あり、而して炭化石灰の如き其需要一時に勃發し、之が供給十分ならざりし憾みありたる如き、會社の發展の尙ほ大に餘地の存せるを証せる手近なる一例とも見るべきか、更に硫酸安母尼亞の如きは、輸入品激減の爲に市價著るしく騰れるにより、會社の利する所莫大なりしも、穩健着實を殆ど其生命とせる性格の同社專常重役は一時的暴騰價格を眼中に措かず、永遠恒久の利益をば標準として、會社營業上の方針を立てつゝある如き、尤も識者の首肯する所なり、其他セメント電燈電力酸素石灰原石の如きも標準價格を低く見積り、以て會社永遠の計に不安なからしめつゝあるが如きも、尤も然るべきことゝ思はる、萬事が此調子にて經營しつゝあるものにて、之を社長中橋氏の密接關係を有する、大阪商船の緻密の裏に放膽を要する經營法と、大に其趣を異にせざるべからざるは、事業の性質然らざるを得ざる點も大に與つて力あるならん、而して其利益金の處分法の如きも頗る適切にして利益金に對する社內保留額と、社外分配との割合の社內に頗る重きを置きて會社の基礎を安全にしつゝある、之を一方財產鎖却金を多きに徵しても、重役の眞意窺ひ知らるゝなり、次に會社將來の計劃に就て一言せんに、大正六年中に擴張工事大したる曉其生產能力は頗る增大すべきも、硫酸アンモニヤ七萬噸の生產の如き之を內地需要額一ケ年十二萬噸にして、其需要年々增加の傾向あるは統計表の示す所明白一點の疑ひなきに、會社が生產能力を七萬噸と止めしは、所謂穩健着實

常務の方針なるべきも、斯る石橋を叩く遣り方は今一歩を進めて放膽ならざるべからず、若し同社以外の製品を併せて內地の需要に應ずる能はずとせば、自然海外より輸入を計らざるべからずして、外品驅逐の目的を達する能はざるにあらずや、然れども、一方より考ふれば、供給の充實は價格を低落せしむる虞れあり、不足勝にして置いて價格を維持することも、政策上必要のことなるべきやにも思はる、蓋し斯の如きは吾輩局外漢の輕々論評し得べからざる處、或人傍より冷評して曰く、製造能力增進の餘地ありことゝぞ、會社の前途に光明存するなり、事業の擴張はソウ一時に爲すべきものにあらず、盲評はやめよと亦一理なきにあらざる傍評なり。

適材適處の野口市川兩重役

同社の重役は左の如し

社長	中橋德五郎	專務	野口遵
常務	市川誠次	取締役	白石直治
取締役	渡邊義郎	取締役	豐川良平
監査役	各務幸一郎	監査役	堀啓次郎
相談役	近藤廉平		

而して主任技術家として、白石宗城、柳屋佐祐諸氏あり大体に於て此事業が三菱素に屬せることも明かなるが、特に吾輩の妙なる哉を叫ばざるべからざるは、各務堀兩氏の監査役是れなり、蓋し理想的無二の好監査役なるべし、吾輩熟ら大阪に於る諸會社を見るに、日本窒素程の好監査役を有するもの、たゞの一會社だも發見す

る能はざるなり、從ふて大阪の各會社には多少欠陥の免るべからざることも說明する迄もなきことゝす、社長中橋氏は野口、市川兩氏の同鄕先輩なり、野口專務が中橋氏を社長に仰ぎつゝ、已れを知れる先輩の下に、自已の生命としつゝある事業に殆んど生命をブチ込みつゝ奮鬪努力せるは、事業家として之れ程會心のことをはかるべく、野口氏は殆んど旅行勝にて東奔西走して事業の經營に沒頭し、此社長を上に、而して同鄕の友人として、帝大同期出身の市川氏を僚友として、留守一切のことを託しつゝあるは賢なりと謂ふべし。

野口氏は加賀の勤王家野口之布先生の嗣子なり、吾輩嘗て彼の一高時代前田屋敷に彼を訪ひしことあり、俊敏にして才華煥發せる彼は、當時既に群を拔けり、三十九年東大工科を卒業して以來、各種電氣事業に關係して實驗を積み、化學工業に着眼し、今日の盛を致せる日本窒素肥料は、實に野口氏の俊敏なる才能と智識によりて計劃の生み出されたるものなり、されば同社は野口氏の生命にして、野口氏の生命は窒素肥料に注がされつるといふべく、彼の實に愛するは女にあらず、彼の戀するは女にあらず、彼の愛も戀も生命も財產も悉く日本窒素肥料に傾注されつゝあるなり、事業家の其事業を愛すること、須らく野口氏の如くならざるべからず、而して氏は此愛せる戀人を滅多な人に托する能はず、氣前氣心を能く知りぬいたる市川誠次氏を乞ふて氏は常務となり、野口專務の留守師團長たり、蓋し適材適處なり、市川氏は其實兄陸軍少將市川堅太郎氏と俱に、眞正直一方の溫厚篤實家にして笑談

にも嘘一つ言ひ能はぬと云ふ、生眞面目の性格を有する君子人なり、而して氏は野口氏を能く知り、野口氏の事業を能く解し、一身を捧げて一は同鄕親友の爲に一は會社常務としての當然の責任義務の爲に、留守師團長としての任務を極めて周倒緻密欠くるなき誠意を以て果しつゝあり、吾輩故に日本窒素には此好後援者あり此好社長あり、而して此好專務と常務と、而して理想的日本一の好監査役各務氏あり、斯くして同社の發展せずと云はゞ、澱江の水も逆さに流れん（妄評多罪）

柳寺に籠りて

でいぎう生

◉東區東平野町に昔しから名高い法華寺、それは大き柳が門内にあり、春は芽ふく新らしいかほり、そばふる春の雨になやむ姿、夏は絲垂れし柳蔭に涼風そよ〳〵、此寺の名物の確かに一つである。

◉幾日かを柳寺の此方に籠る、僕は柳寺に籠れる老母によりて實際的に感化を受くること頗る多いのである、僕の奮鬪努力、此頃ならば汗を流して夏を銷すと云ふ積極的方法、若い間に母から受けた感化に外ならぬのである、母は貧しい家にむつかしい父に仕へ、二人の繼兒六七人のわが生み兒を育てあげられた、その頃の母の奮鬪努力が、今ま僕をしてドコ迄も奮鬪努力せしむるのである、弱い僕の日々の奮鬪は恐らく生命を短縮するであらう、併乍悠々閑生涯を樂しむと云ふことは僕には成し能はぬのである、修養のマダ〳〵足りない僕は、書を讀み學を講ずる暇もなく、家族や知己としての係累のすくなからざるが爲に、今それ等の犧牲となりて甘んじて奮鬪しつゝあるのである、而かもそれをば樂しみつゝ滿足しつゝあるのである。

巨額の預金を吸收せる浪速銀行

浪速銀行の進展―頭取松方氏の人格
常務愛甲氏―谷川以下多士濟々

三井、第一、住友に次ぐ預金吸收

本年上半期に於ける各銀行の成績は、關の東西を通じて一般に良好なる結果を見たり、是れ遊金の堆積を恐れ、彼等が放資上極力最善の方法を講せしその努力の酬ひられたるものとして依然怠慢らしく活氣に乏しき銀行者に、斯く迄の奮發力向上心ありしかと、寧ろ驚歎を禁むる能はず、今之を數字の上に見んに、三井は銀行界にありて預金の點に於て眞に日本一たりしなり、即ち昨大正四年下半期までは一億圓の預金を抱けるは、僅に三井銀行ありしのみ、然るに本年上半期には第一銀行と住友銀行之に加はり、我國に於て預金一億圓の銀行三つとなり、此三銀行を除けば浪速銀行が東京に於ける三菱と俱に大阪に於ける旗頭となるに至れり、即ち如左

行名	預金	利益	配當
三井銀行	一二三、七九四、〇〇〇	一、二七四、〇〇〇	
第一銀行	一〇八、七二〇、〇〇〇	一、〇九二、〇〇〇	一割
住友銀行	一〇二、二三九、〇〇〇	四五〇、〇〇〇	
三菱銀行	七八、六一四、〇〇〇	三九一、〇〇〇	九朱
浪速銀行	五三、四二三、〇〇〇	五〇四、〇〇〇	八朱
三十四銀行	四七、〇〇〇、〇〇〇	四七五、〇〇〇	七朱
山口銀行	四五、四二八、〇〇〇	一六七、〇〇〇	八朱
近江銀行	四三、四〇〇、〇〇〇	二一二、〇〇〇	六朱
加島銀行	四二、八四七、〇〇〇	一八六、〇〇〇	一割五分
鴻池銀行	三一、二七六、〇〇〇	三〇八、〇〇〇	

浪速は大阪に於ける權威ある大銀行中の大銀行なり、三井は京都支店に於て一千萬圓の預金を有せり、三菱が三井を追隨するは決して容易ならざるべきも、徒らに預金額の大を以てのみ誇らんとする態度を陋なりとしつゝある浪速や三十四は、他の方面に於て健實なる營業方針を取りつゝありて、住友が自家事業に多大なる資金を固定しつゝある故に、預金吸收に狂せるの嫌あるを學ばず、試みに利益金を見よ浪速は五十萬四千圓、三千四ば四十七萬五千圓にして住友三菱を凌駕し、山口、近江、加島、鴻池は遙に下れり、利益金の多きことが必ずしも銀行の誇りならずと雖も、健全なる銀行にして而して利益金多しとせば、それ程の結構づくめはなからずや。

手堅き營業振

浪速は第五、三十二兩國立銀行の合同、明治、商工、大阪共立各銀行の合併、和歌山銀行、天王寺銀行の買收といふ風に、漸次膨張發展して押しも押されもせぬ大

銀行となり、外山修造、野元驍、永田仁助の各頭取時代を經て、現頭取松方正雄氏の世となり、外觀頗る平凡なるかを裝ひながら、一歩は一歩より進むといふ、極めて手堅き營業振にて、年々着々として地歩を占めつゝ進展し、今や關西の純商業銀行として其名聲の大を成せる、外山、野元、永田各元頭取の功勞と共に、現頭取松方氏の勳も亦鮮なからざるべし、此に銀行重役の名を列して、獨り功を收むるを好まざる松方頭取の美德を賛へんか。

頭取	松方正雄	常務取締役	愛甲兼達
取締役	山中隣之助	取締役	宅德平
取締役	高崎親章	取締役	前田時三
取締役	山本辰六郎	監査役	平田正之
監査役	浮田桂造		

松方の子は凡物でない

是に於て吾等は頭取松方氏の人と爲りを評隲せんと欲す、故公伊藤、侯松方の子息を評して曰く『松方の悴共は凡物でない』と、侯の第四子たる正雄氏は、本年四十九の男盛り、學習院を出でゝ帝大に學び、長く海外にありて米國ペンシルバニヤ大學にて最後の修得をなし、夫より歐米を巡遊して銀行事務を實習し、十二分の鍛練と修養を積みたる後に歸朝したるは明治三十一年、浪速銀行神戸支店長たること八年にして、三十九年常務取締役となり、大正二年前頭取永田仁助氏が後進の進路

を開く爲に辭任したる後を享けて頭取となり、重厚の質に峻拔の才を加へ、幾何學的頭腦と算數的智識によりて銀行の經營五分の隙もなく、專心一意浪速銀行の發展に努力す、彼の共同火災福德生命の取締役たり、豐川鐵道の監査役たるは義理づくの重役たるに過ぎざるのみ、其趣味に於て富田屋平鹿の樓上に美くしき花を見るよりも、國技館に天下の大相撲の手捌きを見るを樂みとし、至極の平民的生活を喜び、中山の邸平民の大旦那を以てニコ〳〵田園趣味に憧憬るゝ所、一寸贅六仲間には珍らしき大きな人物ならずや。

秀才世話好きの愛甲氏夫妻

此頭取を補佐して常務といふ女房役を勤め居れるは愛甲兼達氏なり、代議士金澤仁作翁の長子にして日本棉花にある金澤信一氏といひ、瓦斯會社副社長片岡直方氏といひ、共に七高にありし折、氏夫妻の世話になりし關係上、今日と雖も叔父さん叔母さんの尊稱を彼夫妻に奉りつゝあり、其情けに敦く世話好きの叔父さんなる愛甲氏は純粹の薩摩隼人にて、初は日銀に入りしことあるも、幾もなく退めて朝鮮支那に遊び、後ち鹿兒島に歸りて島津公の第五銀行に入り、同行が三十二と合併し更に浪速銀行となりし後も、引續いて鹿兒島支店長となり、一面島津家の御用を勤めつゝ傍ら同地の公共事業に盡し、鹿兒島瓦斯、同電氣軌道を發起して一は監査役一は取締役となり、鹿兒島郵船取締役、同勤儉貯蓄銀行取締役、太洋商船社長、鹿兒

島商業會議所特別議員、市會議員、劇場鹿兒島座監査役等となり、其他鹿兒島にて興起する公共事業には常に中心人物として活動すると同時に、銀行員の精神修養に努め、日曜毎に鹿兒島高等學校の哲學倫理に造詣深き某教授を聘して同行員に聽講せしめたり、苦學生に學資を貢ぎなどせしが、今や浪速の常務となりて其綿密なる調査力と明晰なる頭腦を働かせて松方氏を輔く、松方氏に相撲道樂ある如く、氏にも隱れたる一つの道樂あり、开は銀行集會所に於て時折パチ〳〵させる圍碁にもあらず、常に傾倒せる南州先生の書にもあらずして唯一の道樂は支那研究なり、支那に關する研究調査は氏に取りては一種の病的趣味と稱せらるゝ迄に病膏肓に入り、明治十九年頃より今日に至るまでも繼續し、從來屢々支那に遊びしは全く此趣味に對する憧憬を滿足せしめんが爲めなるべく、折花攀柳の卑野なる趣味をのみ逐ふもの多き大阪實業界に、偖も有益にして高尚なる道樂ならずや。

銀行内の重なる人物

松方氏を頭取とし、愛甲氏を常務とせる同行は、青年有爲の俊物に乏しからず、東京支店長谷川清澄氏は元の大阪府知事高崎親章氏の愛婿、三十二年帝大を卒業して司法官試補となり、東京地方裁判所に奉職中、三十四年仲小路廉、長森藤吉郎等と共に司法官增俸問題を絶叫し、官を擲つて浪速銀行に入りし後は殆ど別人の如く守成的堅實の人となり、今や同行に無くてはならぬ人となれり、松方頭取が氏を檢

査部長より抜擢して東京支店長（蠣殼町支店長は淺水金次郎氏）に重用し、帝國の中心地に駐屯せしめたるは蓋し適當の處置といふべく、更に本店には老實忠誠古くより總務部長たりし宇川雄太郎氏三八銀行取締役となりたるも、次長染川春彦、堀翁之助兩氏及び俳壇の鬼才遠矢潟丘子ありて孰れも重厚にして敏腕の聞あり、而して手腕人物俱に稱すべき中尾直太郎氏の營業部長たる、其他西支店長永田正義、南支店長杉生昌吉、北支店長溝江高信、難波支店長河村德藏、九條支店長行松幹太郎、天王寺支店長伊東重和、玉造支店長田崎蘇一、堺支店長河野盛太郎、西宮支店長牧川吉平、和歌山支店長浦野盛太郎、神戸支店長咲花一二三、福岡支店長禰寢三次、鹿兒島支店長沖雄熊、川内支店長吉田壽、大島支店長福崎八二（近日廢店下關熊本二店新設）諸氏の如き、何れも適材を適所に配置して一絲亂れざるの感あり、浪速銀行の今日ある蓋し濟々たる多士を網羅せし効によらずんばあらざる也。＝大正五年十一月記＝

折にふれて

さくらじま女

なんとなく淋しき心もの足らぬ秋の入日を眺しみて見る
こぬ人を來ぬときめはず今日もまた窓に淋しく涙してあり
寂しみと又かなしみとおそひきて我を泣かすよ初秋の空
ひとすじに君なつかしくなりまさる此秋の夜をこほろぎのなく

公稱二千萬圓の山口銀行と經營者

時世の進運と財界の趨勢に鑑みたる發展

金融機關の舊態株守不可

歐洲戰局の展開と二年半の歲月を世界的戰時狀態に過ぎつゝある間に、時勢の進運と財界の趨勢とは此に驚くべき異常なる變遷を示し、日淸日露兩戰役に由りて世界の債務國たりし我國が對英債權者と化し、世運の進歩に伴へる商工業の振作向上は殆ど計數上の術を違へる迄に膨脹するに至りたるに、斯る經濟上の異數的變化に對する金融機關の依然として舊態を固持するの不可なるは言ふ迄もなく、實際は理論に先だち、商工界の實際的活躍は更により大なる貸出力を有する金融機關の現出を待受けつゝあるの實狀を呈するに至れり、此に於て乎浪速銀行の增資行はれ、近江銀行も二月を以て未濟拂込金全部を徵收し、併せて現在四百萬圓の資本に六百萬圓を增加して一百五百萬圓の增資を決し、個人經營の加島銀行も亦頗る適當の增資處置を採りたり、以上我が山口銀行の組織變更とて是れ決して唐突なる輕擧にあらず、世の進歩より數歩進むべかりし銀行が、寧ろ世の進歩より立ち遲れつゝあるの際なれば、山口銀行の一躍二千萬圓の增資決行をば聊か突拍子なるやに感ずる因循

姑息家も、廣い世間に或は是れあるべし、亦守舊的なる大阪にさる偏見固陋の人あるをば寧ろ當然とせざるべからずして、大阪商人の手堅き點も亦實に此守舊的固陋に伴ふ一面の美點長處ならずんばあらず。

株式組織は富豪の世に處する妙策

株式組織は富豪が世に處する方策として最も賢なるもの、曩に住友家は住友銀行の組織を變更して株式組織として萬全の策を確立したり、山口吉郎兵衛氏が其個人經營の山口銀行を提げて緣故淺からざる關係者と倶に株式銀行たらしめんとするは智なりと謂ふべき也。

たゞ世の問題とせらるゝは、日本一の三井銀行すら二千萬圓なり、住友の如き理想的銀行すら一千萬圓なるに、山口が一百萬圓の資本より一躍二千萬圓たらんは其增資の額高少しく過ぎたりと云ふにあるのみ、然れども三井銀行には五千萬圓增資說行はれつゝあるを閑却する勿れ、住友も早晩增資の必要に迫らるべく、超然主義を標榜せる三十四銀行すらも現在の資本にては活動の鈍なるを免る能はず、大勢既に然りとせば公稱二千萬圓の理想の半額一千萬圓の拂込とすべき銀行は、云はゞ世間の普通ならずや、之を以て突拍子なりと謂ふは未だ金融界の趨勢を知らざる者の言草に過ぎざる也。

時勢の進運と財界の趨勢

山口が資本增加に關し、各得意先へ配布せる依頼狀に曰く『弊行義山口兩替店以來五十餘年間大過なくして今日の發達を見るに至り(中畧)時世の進運と財界の趨勢に鑑み、組織變更資本增加の計劃を立て云々彼は洵に能く時勢を知り而して之に順應するの途を解し得たりと謂ふべし。

彼れ今や其預金六千萬圓、如何に浪速長者中の特に手堅き山口家なりと雖も、一百萬圓の資本に對し之に六十倍すべき絶大なる信用を繫げり、其信用の絶大なるに中霄一たび思ひを致せば金融業者としての責任の容易ならざるに感慨多からん、株式組織變更洵に其當を得たる哉。

行主山口吉郎兵衛門氏の祖先は奈良より出づ、幕府の禁を破りて外國貿易に志せし放膽なる祖先を有する彼れも、兩替商となり、銀行屋となりては一日も放膽は許されじ、今日の山口が十年前の第二流長者より第一流に進み、日本生命大阪貯蓄等に潛勢力の大なるに付けても、彼が財界に於て特に存在を認められつゝある銀行の經營に勞せざる能はず、恰も山口一家一族によりて組織せられたる百四十八國立銀行が國立銀行の營業滿期に際し、吉兵衛氏一家の事業と變更されたるかの如くに此度の勇斷はそれにも遙に優れり、當年の傑物西田永助翁なくとも、第二の西田第三の西田はあり、況んや越野嘉助翁の目未た黑かりしおや。

新頭取新常務

現行主山口氏は、現銀行の全部を擧て資本金二千萬圓の株式會社に提供し、而かも同氏は總株四十萬株中二十萬株を引受け(山口謙四郎氏四萬株、岩井勝次郎、越野嘉助、町田忠治、阪野兼通、佐々木駒之助、朝長勘十郎氏各一萬株引受の豫定)株主總會に於て重役選擧後の互選に於て、山口氏頭取、坂野兼通、佐々木駒之助兩氏常務取締役たり、病養の現常務朝長勘十郎氏も同じく重役の一員となり、病癒ゆるの曉佐々木朝長相携へて長短剛柔相補ふこと、恰も三井銀行に於る常務池田正彬、米山梅吉兩氏の如く、住友總本店に於る山下芳太郎、小倉正恒兩支配人の如きものあるべく、或は藤田組に於る藤田德次郎、同彦三郎兩曹子の相輔けて長兄男爵の君の副統たるが如くに見ることも得ん、斯くて山口新銀行の經營は順風に帆を揚ぐるが如く、千萬浬の航行鏡面を行くが如きものあらん。

以上記述の如く、山口銀行の大發展を思ふにつけても、既往の回顧茫々夢の如き間に、同行の今日ある決して其以へなきにあらざるをば知らざれば、讀者の益する所なかるべし、乞ふ最後の頁を飾るべく、吾輩をして之を說くあらしめよ。

山口氏の爲人

明治三十一年七月山口銀行が創立されたる頃の山口吉郎兵衛氏は、未だ弱冠にして中學修業の門に入りしばかり、當時壹百萬圓の資本の銀行が資本二千萬圓を公稱する迄に進步發展すべきを豫想せんようなかりしと雖も、而も山口家の信用と補佐

者の其人を得ると、將來の山口銀行主宰者なるべき吉郎兵衛氏の寛宏悠揚たる大器たるべき素質を有するとに於て、山口家の將來著るしく大を爲すべきは具眼者の齊しく認むる所なりしとは吾輩が某故老より聞ける所、その將來の大器たるべかりし吉郎兵衛氏は慶應義塾在學當時より次第に其人物陶冶鍛錬し、所謂將に將たるの氣品を自ら具ふるに至れり、彼れ今や齢既に三十有五、識見高邁にして大度克く衆を容る、俗塵紛々の間に交るを甚だ好まずと雖も、敢て自ら標置するの高きが故にあらず、英佛書を好み獨逸語を學びて英佛書以外の智識を得んとて渇者の水に於るが如き智識慾の強き彼として、世の俗交に煩はさるゝ時間を惜むは無理からぬことなるべし、夫人は吹田鴻池と稱せらるゝ西野家の出、郎君と倶に好學にして讀者の趣味深く、此點に於て名門の夫妻共鳴する此の如きは珍らしとも稱せらる、是れ山口家の門地がいよ〳〵高かるべき所以なり。

人格の表現　阪野氏

次に專務取締役として坂野兼通氏の在るは吾輩の最も心強く感ずる所なり、氏は三菱タイプの紳士、其仕事振は華美浮誇を尤も厭ふて堅實自重言行苟くもせず、其一たび斷ずるや、必ず決行せずんば已まざるそれ迄には幾多の研究調査考慮内省を費やす是れ所謂三菱式の事務進行方式なり、芦屋の清居月明の夜に坂野氏の内省考慮に精神上の鍛錬に積むこと多し、彼の活動は一に修養の結晶にして、西人の稱す

る所謂人格の表現なり、此人に一千萬圓の資力を任す、其發揮せらるゝ内省考慮人格の表現は若し偉なるものあるべきは當然也。

佐々木、朝長の兩氏

常務佐々木氏と朝長勘十郎氏とは、山口に於ける双翼にして其一を缺くべからずと看らる、朝長は帝大三十四年の出、佐々木は慶應三十二年出身、彼は秋田の中學を卒へ仙臺の三高に在りしも、中途退學して慶應の學風を慕ひ、之に學びしなり、朝長は年齢より云へば佐々木より一年の兄なるも、入行より云へば朝長一年の弟たり、其夤緣淺からざるやに惟はるも亦一種の因緣なるべきか、佐々木は三十三年郷里の先輩町田忠治氏(元山口總理事)及び菅沼達吉氏の推擧により山口に入る、當時の山口は行員僅に二十名、預金二百萬圓、積立金も七八萬圓に過ぎざる極めて微々たるものなりき、從ふて支店の如きも僅に灘にのみありしなり、然るに町田氏其他の奮鬪努力は時勢の進運に伴ふて漸次其効果を現はし、弟風帆に孕むが如きの同行は洵に申分なき秩序ある進歩發展を示したり。

所謂人物本位

支店の如きも西、南、北、京町堀、高津、上町、九條、堂島(以上大阪市内)、東京、京都、岡山、御影、元灘支店)の十二支店を有し、我國に於る有數大銀行として

其羽翼を張り、金融界に於て第一流組に入るの地歩を確保し、信用絶大にして搖るぎなき其堅實なる基礎の上に、更に百尺竿頭一歩を進ゑ稱二千萬圓の大々銀行としての實力を發揮することゝなれるなり、斯くして今後益々人物を養成して所謂人物本位の理想的大銀行たるべく、營業部長内藤金一氏は、山口家關係い分働隊關西信託に赴けるも、山崎元次郎、高橋甚次郎其他の諸氏等は新發展の大銀行に於る重要人物として十年一劍を磨く底の意氣を以てせし、修養鍛錬の効果を現はすべき樂しき時期既に到れり、嗚呼山口の大をなせる其因る所豈た一朝一夕の事ならんや、觀る者特に此點に考ふる所なかるべからず。

闘折にふれて　　あしや子

やるせなき心いだきてうすぐらきよるの樹立をさまよひてあり
かの君のまぼろしのみをねがきつゝ秋に入る日の心さびしさ
窓により雲ゆく空を見るひとみフトさびしみにとらはれけり
君ありと思ふ頃より何事もしとやかにする性となりけり
やさしさの永久にかはらせたまふなと神にいのれば心安まる

整理殆ど成れる北濱銀行

——安田善次郎翁以上の手腕を現はせる高倉藤平氏——

北銀誕生の由來

明治二十七八年戰後興業熱勃興の時に當り、常に經濟界の消長に伴ひ其盛衰をトすべき各地取引所の繁忙頓に著しくなり殊に大阪株式取引所の如きは一層繁劇を加へ其取引高日一日增大し、仲買人等は朝に夕に東奔西走日も是れ足らざるの狀況を呈するに至れり、然るに此等多數仲買人が其取引する處の銀行は、其數十餘行に別れ居るが爲め取引上の不便尠なからず、取引所も亦其取引銀行と定むべき適當の銀行なきを以て、故らに數多の銀行と取引を爲すの止むを得ざるものあり、是に於てか取引所及仲買人の同志糾合して、取引所附近に一大銀行を設立し、以て取引所及仲買人等の取引銀行と爲さんとの計劃あり、同銀行の生れたる即ち之に胚胎せるものなり。

波瀾曲折の北銀沿革

創立以來北銀の波瀾重疊たる沿革左の如し

▲明治二十九年七月北濱銀行設立に關する第一回協議會を開く

▲同年九月發起人會を開き發起人中より創立委員として草間貞太郎氏外九名を選び前後六回の會合にて創業に關する準備方法は總て創立委員長及創立事務員の一任する事に決す

▲同時に岸下清周氏藤田傳三郎氏の紹介に依り創立委員の一人に推薦せられ十月上旬發起人申請書類を携へ上京して大藏大臣に進達し營業所として今橋二丁目の地所を買得す

▲同月下旬發起認可書下附せられ翌月北區老松町二丁目に創立事務所を設置す此時小塚正一郎氏岩下創立事務員の推擧に依り入行す

▲十二月上旬株式申込證據金十五萬圓を收め創業總會を開き定款を議定し役員の選擧を行ひ取締役頭取に久原庄郎氏、常務取締役に岩下清周氏、取締役に金澤仁兵衛、松方幸次郎、鷲尾久太郎、監査役に磯野小右衛門、阿部彦太郎、阪上新治郎の諸氏就任

▲十二月中旬役員認可願を大藏大臣に進達し翌三十年一月認可免許を得三月第一回拂込金七十五萬圓を收め營業所を今橋二丁目に移し、同日十五日を以て營業を開始し、小塚正一郎氏副支配人として岩下常務を補佐す

▲營業第一期(自明治三十年三月十五日至同年六月三十日)間の金銀出納高は二千七百餘萬圓期末諸預金三十一萬圓借入金六十六萬圓諸貸出金百五十萬圓純益金一萬七千餘圓

▲營業第二期には純益金六萬二千四百四十圓年八步四厘の配當

▲三十一年五月大阪株式取引所に於ける金錢取扱を一切同行に一任することゝなり、同年七月頭取久原庄三郎氏辭任に付渡邊洪基氏堂選就任す

▲三十二年一月小塚正一郎氏支配人に昇格す、八月京都支店を開設し又外國爲替取引を開始す

▲三十三年一月取締務並に監査役滿期改選と補缺選擧を行ひ金澤仁兵衛、鷲尾久太郎兩氏の跡に磯野小右衛門藤田平太郎兩氏新任し監査役に殿村平右衛門氏新任して他は悉く重任す

▲同年十月第七回最終拂込金四十五萬圓を收め資本金三百萬圓全部拂込濟となる

▲三十四年一月神戸銀行と合併し同銀行跡に神戸支店を設く

▲三十五年一月監査役阪上新治郎氏辭任に付田島信夫氏就任す、三月堂島支店長吉田鐵太郎氏副支配人に昇格す

▲此月北濱中橋筋角の新築中なりし營業所竣成し同行四週年の祝を兼ね其新築披露をなす▲三十六年一月東京支店を三月南支店を七月名古屋支店を開業す

▲三十七年一月京都平安銀行を合併し其跡を支店とす

▲三十八年一月監査役阿部市藏、田島信夫兩氏滿期改選の處田島信夫、浮田桂造兩氏當選

▲三十九年一月取締役原敬氏任期滿了後を承け小塚正一郎氏取締役に新任す

▲明治四十年一月監督總會に於て資本金三百萬圓を一千萬圓に增加する事に確定す取締役に藤本清兵衛氏監査役に木村隅二氏新任す

▲四十一年七月鑛て引受整理中なりし東京商工銀行の跡に芝支店を設け開業、小塚氏常務に選ばる

▲其後大波瀾起幾多屈折を經て大正三年六月臨時株主總會を開き取締役頭取に杉村正太郎取締役に植村俊平金澤種次郎、南郷三郎、岩本榮之助監査役に、谷口房藏、五代龍作、高木與太郎の諸氏就任す

▲同三年十二月臨時株主總會を開き一千萬圓の資本金を六百萬圓減資し四百萬圓の資本金とする事を決議す

斯く大正四年二月重役總辭任の已むなきに至りて、臨時株主總會は開かれ、取締役頭取に高倉藤平、取締役に今西林三郎、納富陳平、監査役に谷口房藏、高木與太郎、三谷軌秀の諸氏就任を承諾し、以て今日に及べり。

怪傑岩下清周氏

北濱銀行は由來問題の銀行なり、岩下清周氏が空飛ぶ鳥を落す猛勢を以て關西の

財界に羽振を利かせし當時より、高倉藤平氏が整理引受の今日に至るまで、依然として伏魔殿視せられつゝありたる、洵に不思議なる銀行なりき、著者が大阪朝日に在りし時代、岩下氏は年少くとも三四回は同行樓上に於て各社經濟部の主腦當面記者を請待して午餐會を開きしを以て、著者もまた招かれて此伏魔殿上の客賓たりしこと數次なりき、當時吾等は囁いて曰く、岩下氏は何の必要ありて吾々を招き、吾々の意見を傾聽するにやと、伏魔殿の主人公は、斯くして吾々の財界に對する觀察の傾向を看取すること頗る巧みにして、而して之を以て好箇の參考資料としたるなり。

往事茫々、恰も如夢

其頃の高倉藤平氏は、未だ北濱の眇たる一株屋にして、旦に夕べを測知るべからざる泛々たる一虚業屋に過ぎざりしを以 、實は吾々の眼中には高倉なる紳士なかりしなり、爾來年處を經る此に十有七八年智力手腕當代罕に見る俊物岩下氏は倏ちに失脚し、吾々の無視せし高倉氏岩下氏に代りて北銀伏魔殿の主人たり、回顧茫々眞に夢の如きものあり、而も伏魔殿は依然伏魔殿視せられつゝあり、堂島取引所理事長にして會社屋なる高倉に銀行を經營せしむるは、恰も第二の岩下氏を製るものも也との非難は、記者また之を否む雅量と信念なかりし位に、高倉は未だ信用薄き人物なりし也。

彼の門に出入する者一變

而も、今の高倉は、既に昨の高倉氏ならず、今の高倉氏は品位ある紳士としての體面を非常に重んずるやうになれり、彼は信用を最も大切とする銀行頭取としての信用面目威嚴を失墜せざらんが爲に從來彼の家に出入自由なりし鷄鳴狗盜の徒をば次第に遠ざけたり、社會の指彈を受べきありがたくなき資格を有する高等課朱印付の人物は一切高倉氏の門を潛らざる迄に、彼の社交的方面は一新されたり、吾人乃ち窃に感嘆して曰く、地位は人物をつくると、彼れは果して伏魔殿の主人公よりして堂々として他にヒケをとらざる銀行頭取として、將た品位に富める紳士として、社會より齊しく認識するゝ迄に其人格の向上を現はし了へたりと。

北銀整理の救世主

北銀今期の利益五十五萬圓、一割配當優に差支なく銀行としては優等無類なり、而して整理も既に大凡の眼鼻が附きしなり、往年松本重太郎翁が、百三十銀行に破れし其の救濟は、安田善次郎引受けたるが狡智なる彼の翁は當時の藏相曾彌に日銀より百萬圓の無利息借入を條件として快諾を與へたり、而も高倉氏は安田翁のケチ臭く男らしくなき態度をせゝら笑ひしつゝ一文半錢政府の御厄介に預らず、無慈悲殺人情なる高利的日銀利子に四苦八苦の惱をなしつゝ、其借人金の全額も殆ど皆濟

し得たりとあり、彼は確かに安田翁以上の手腕なりと謂ふも過褒にあらざる也。

斯くして彼れは財界に著るしく信用を高めたり、彼は銀行家として今では眞に堂々たる成功者なり、彼は一時小うるさき銀行頭取は之を面倒がり、整理の手腕を示したる後勇退せんとの志なきにあらざりしも、此の如くんば是れ龍を畫いて睛を點ぜざるに均し、株主斷じて之を承知すまじきなり、されば高倉氏も昨今に至り心氣一轉し、寧ろ積極的に將來增資を決行すべしとも噂せらるゝに至れり。

目覺ましき活躍

高倉氏の昨今の活躍は殊に目覺しきものあり、さしもの財界の長老連さへ匙を投げたる北濱銀行が上記の如く物の見事に整理し、加之近く一千萬圓の增資を斷行し、北銀をシンジゲート銀行の一員たらしめん心算あり、固より此事を實現するなかゝ困難なるも、機運は早晩到來すべく思はる、而して君は君の勢力下にある浪速火災の資本金百萬圓をも今總會に五百萬圓に增資ずる筈、增資の目的は言はずと知れた海上保險の兼營、豐國と雁行して、斯界に雄飛せん目論見、以て高倉氏は淀川北岸の浪速土地を根據に、攝津、帝國、關西の三土地會社を併せ土地會社の統一合同を企劃しつゝあり、南進論の喧しい今日南洋精糖會社を發起して大株主として同社の樞軸となれるも高倉氏、日本貯藏銀行を主宰して預金既に八百有萬圓、大阪貯に追及するの慨があるのも高倉氏ならでは出來ぬ發展、其他正米倉庫を建設して全

國米穀取引所に範を垂るのも高倉君、大阪商工の擴張に貢献して移轉斷行の機會を速成せしめたるも高倉氏、何は兎まれ、高倉君近時の活動振は吾等をして不覺快哉を絶叫せしめるに足るものあるにあらずや。

好女房役納富常務

多忙多繁なる高倉頭取は到底終日北銀の整理事務に殁頭する能はず、されば大綱を總攬するに止め、細故は擧て之を好女房役に一任せざるべからず、高倉氏は其適材を北銀内に求めて納富鎭平氏を拉し得たり、納富氏は京大法科第一期の法學士、北銀に入りて十幾年、未だ多く志を得ざりしも、其堂島支店長時代高倉氏に知られ終に斯く扳擢信任せられ、而して其知遇に背かず、信任に違はず、着々として整理の實を擧げたり、尤もそれには後方勤務に當り名世に顯はれずして多大の努力をなしつゝある現庶務課長藤尾直勝氏外二三氏の功勞も沒却すべからざるものあり、吾等は北銀整理が納富、藤尾等の舊北銀系の隱れたる努力奮鬪に俟つ所多大なりしを見て、是れ失脚せる怪傑岩下翁に對するせめての追善供養なりと思惟するもの也、岩下翁にして之を耳にせば鬼の目にも涙ならんか。（妄評多謝）

■あるじ久しくあらざるに　　夙川女

悲しくもたゞさりげなきほゝゑみに我がこの心いつわりてあり

名譽ある大阪電燈會社

華城財界第一人者たる土居通夫翁を戴き、才腕亦華城有數と稱せらるゝ阪野氏を專務としての經營ぶり如何

人材如雲如花

大阪電燈株式會社は大阪にありては一番に品のいゝ會社なり、成金時代の未だ到らざるに方りて、此會社程儲かりしは鮮なきを以ても、同社株式は北濱に於て花形たり、其株主たるは一種の榮譽なりし程にして、隨ふて其社長には華城財界の大元老たる土居通夫翁ありて動かざること大磐石の如く、而して其下に才腕一代に聞ゑたる阪野鐵次郎氏、專務として縱横の手腕を揮ひ、而して其部下には實に左の如く人才花の如く、雲の如しといふべし、惟ふに此等の人々は十年後の財界に孰れも其腕の切れ味を十二分に試むべき未來の大器なり、大阪電燈會社を世に紹介するに方り、吾人は會社其ものよりも其經營者其人の太だ當を得たるをば、第一に推稱せずんばあらざる也。

總務部長理事　日高驥三郎　　調査役　山口幸太郎
祕書兼庶務課長　千頭茂壽　　營業課長　立花訓光
經理課長　野口三郎　　舞鶴支店長　高橋誠暉

電務課長　若林信明　　發電課長　岡義明
臨時建築課長　岸昇　　庶務係主任　萩原古壽
營業係主任　木津谷營三郎　　支店長代理　三宅延文
工務係主任　市川敏行

圓滿福德の土居翁

土居翁は德の人なり、德を以て衆を率ゆるの人なり、彼の福德圓滿には何人も懷つく、大阪電燈は隨分と込み入りたる會社なり、其株主が幾派にも別れつゝあること即ち其妖孽なり、然れども土居翁一たび口を開き手を擧げて『皆さんマア〳〵』といへばそれにて事は圓く穩やに治まるなり、世間は翁を大阪の澁澤男爵といふも澁澤男には翁のやうな重寶な押ゑの利く藝當は演ずる能はざるなり、澁澤男には澁澤男の特色別に存す、大阪の土居翁には澁澤男の摸擬する能はざる長所美點のあるを逸すべからず、而かも翁が大阪電燈に執着强く多數の關係會社中恐らく大阪電燈程翁の愛するはなかるべく、他の總てを棄てゝも獨り大阪電燈を守らんとの翁の志を知り、株主は深く感謝する所なかるべからざる也。

大阪電燈と云へば直ちに土居通夫翁を聯想すべく、土居通夫翁と云へば大阪電燈を思ふ位に密接なる關係ある以上、土居翁を仰いで兎も角大阪財界の大御所とし、大元老となす吾等は土居翁に尊敬を拂ふと俱に大阪電燈會社は手を觸るゝべからざるものゝ如く思惟せらる、或人眞面目に曰く、大阪電燈は宮內省のやうなもので…

……と其心持を克く現はしたる言なり。

才人阪野鐵次郎氏

其西部遞信局長の地位に在るや、關西探題として克く遞信省の重きを代表せるの氏は、突如として野に下り大阪電燈の專務となる、蓋し將來は社長たるべき專務の地歩を占め、徐ろに夫を爲さんとするものゝ如し、氏はドコ迄も才の人なり、腕の人なり、一見したる處田舍の朴訥漢の如きも、一たび相接して相語るや才氣煥發尋常一樣の凡庸物ならざるを知り得べし、元來大阪電燈會社はむつかしい社なり、難治の社なり、故管沼達吉氏は屢々危ぶまれしも而も彼の人なればこそ能く其地位を守りたるなり、才腕阪野氏の如きは、大阪電燈の餘りに青海波靜かなるにあつけなかるべし、何等かの仕事をも遣つて見たかるべし、併しソコがむつかしい處なり、仕事にあせらぬ處がヱラキなり、近時阪野氏は何等かを試みんとすと傳へらる、小山健三翁曰く、何もせぬ方か却つていゝでせうがヲ……、若い人は兎角腕が鳴りますからヲ……と、然り小山翁は能く大阪電燈を知れり、遣らねばならぬ仕事の多くは部下の才人悉く之を遣るなり、阪野氏は自重自玉して時節到來を俟たざるべからず『せいては仕損ずる』とは阪野氏の服膺すべき金言也。

沿革概要

經營人物は既に叙したり、依て之れより會社の實態に說き及はすべし、仝社は明治十一年十一月資本金二十萬圓を以て創立せられ、同二十二年五月營業を開始せる以來極めて順調なる進步發展を遂げつゝあり、明治二十八年に一反對會社起らんとせしも遂に之を併合せしが如き、當時重役の功勞は長く記臆に印すべき重要事項の一つなるべし、而して電燈の供給のみなりし營業は明治三十年に至り更に電力の供給となり電氣工場を設置し、以て事業の發展を計れり、其れより社業はトン〳〵拍子に向上し、三十五年門司支店、三十七年堺出張所、三十九年佐世保支店、四十一年舞鶴支店を開始せり、彼の世間の視聽を聳てたる報償奬約は三十九年に大阪市に對して締結せられたり、斯くて四十一年には安治川の大發電所設けられ、更に宇治川水力電氣會社の創立により、電氣の供給を受けつゝあり、而して同社は一時各所に支店を設けたるも、其後大阪市集中策を採り、四十二年十月門司支店を九州電氣軌道會社に、四十四年佐世保支店を京都電氣株式會社に賣渡し、市內外各所に營業所を設置し、全力を市中に傾倒して營業上の便利を計り、大正二年十二月に至り資本金を二千百六十萬圓に增し、以て大發展に順應せしめ、今や同社は爲すべき總てを爲し遂げたるかに思はるゝ理想的電燈會社なり、才腕ある重役の自重自玉を吾等の說くは即ち之れが故なり。

事業の狀況

營業成績は創立以來順調に進み、、明治四十三年上半季より利益配當を確定し、財産の安固を企圖せるが如き、當時にありては尤も注意を要すべき事項なりし、而して之によりて事業の成績堅實に發達する基礎の築かれたることは、全社發達史上の大切なる一節たらずんばあらず。

電燈の增加は四十三年以來著るしく、大正六年五月末に白熱燈百五萬三千二百八十三個、弛光燈三百九十三個となり、其電力は電動機五千四百四十八馬力、電力裝置二、九〇一キロワットを計上するに至れり。

大正二年三年と二回に電燈料金を低減し、昨年十月に至り更に電燈料金を低減し總てタングステン球を供給したるが如き、電燈會社としては營業を顧客本位とした る大進步にして、大阪市民の會社に對する好感は著るしくなれるなり。

同社第五十七期たる、昨年十二月一日より本年五月末迄の營業狀況左の如し。

期末白熱取付燈敷百五萬三千二百八十三個に及び、之を前期末に比すれば實に五萬七千七百五十一個の增加を見るに至れり。

電力の供給も亦其需要を增進し電動機は前期末に比し二百九十六馬力電力裝置は八百六十三キロワットを增加せり。

宇治川電氣會社に對する供給電力量著るしく增加し、四千三百六十六萬九千六百七キロワット時を算せり。

斯の如くにして營業成績佳良なりしも、發電量の增加と石炭價格の騰貴等に因る

發電費の增加と東京倉庫會社芦分倉庫の爆發に因る罹災の爲め前期に比し金七萬九千八百五十一圓の減收を來し、本期利益金百四十萬九千百四十六圓を得たり。

損益勘定

同社事業の堅實鞏固なることは左の損益計算を一覽せば別に說明を要せずして具眼者の滿足を買ふの價値十二分ならん、乃ち左の如し。

資産勘定

一金參拾七萬六千六百拾圓六拾壹錢貳厘	財産損金
內譯	
諸機械減價償却	一〇二、二四四円・七九〇
電線路減價償却	六二、七八一・三一九
室內取付器具減價償却	七五、八八六・五〇六
家屋減價償却	五、三三六・七〇〇
什器減價償却	二四一・四九三
倉庫品減價償却	一、二一四・二六四
船舶減價償却	二、二九四・九二八
火災燒失損金	一二六、六一〇・六一二

營業勘定

一金四百拾四萬七千八百七拾六圓五拾九錢壹厘	營業益金

內譯

電燈收入	二、九一五、三二五・四九四円
電力收入	八六〇、六三八・一八八
電氣扇收入	一、六二四・七〇六
雜收入及利息	二〇〇、〇六七・八八五
製作所收益	一六三、〇一三・八四五
製作所堺分工場收益	七、二〇六・四七三

一金貳百參拾六萬貳千百拾九圓七拾九錢六厘

內譯

發電費	一、〇五一、三八八・九七六円
變電所費	一七、四六三・四七八
電線路費	四一四、六九三・六九九
營業費	三七二、〇九三・八四三
諸稅	二八六、九〇〇・〇一〇
故岩本取締役慰勞金	一〇、〇〇〇・〇〇〇
罰災費	三六、五七七・五九〇
製作所諸經費	一七〇、九六八・二九五
製作所堺分工場諸經費	二、〇三三・九〇五

差引金百七拾八萬五千七百五拾六圓七拾九錢五厘

總勘定

營業益金	營業損金

一金四百貳拾七萬八千百參拾七圓五錢四厘

內譯

金四百拾四萬七千八百七拾六圓五拾九錢壹厘	總益金
金拾參萬貳百六拾圓四拾六錢參厘	營業益金
一金貳百七拾參萬八千七百參拾圓四拾錢八厘	前期利益繰越金
	總損金

內譯

金參拾七萬六千六百拾圓六拾壹錢貳厘	財產損金
金貳百參拾六萬貳千百拾九圓七拾九錢六厘	營業損金
差引金百五拾參萬九千四百六圓六拾四錢六厘	利益金

利益金分配案

一金百五拾參萬九千四百六圓六拾四錢六厘	利益金

內

金七萬五千圓	法定積立金
金拾五萬圓	別途積立金
金參萬圓	特別積立金
金四萬五千圓	役員賞與金(交際費ヲ含ム)
金百拾五萬貳千圓	配當金

但舊株壹株ニ付金參圓
新株壹株ニ付金貳圓即年壹割貳分

金八萬七千四百六圓六拾四錢六厘	後期繰越金

一世の才人小林一三氏と箕電

——彼をして箕電に跼蹐せしむるは愚也——

電軌界の花形箕面有馬

大阪郊外の電鐵四通八達せる中に於て、最も乘り心地よく、速力疾く、車体の美麗なる電車を箕面有馬電氣軌道となす、資本金五百五十萬圓、拂込三百八十五萬圓社債二百萬圓、灘循環電氣鐵道と、西宮十三間の電氣軌道敷設の爲め、過般岸本兼太郎氏より借入れたる三百萬圓を資本となし、明治四十年十月の創設にして、目下運轉せる線路は、大阪梅田の基點より、寶塚温泉に至る十五哩三十七鎖及び途中停留場石橋より右折する箕面支線二哩四十四鎖、合計十八哩一鎖にして、箕面公園寶塚新温泉を經營して、大阪人の遊園地たらしめ、池田、櫻井、豐井の三ヶ所に各數萬坪の住宅經營地を相し、極めて衞生的にして且つ經濟的なる摸範家屋數百戸を建に設し、煙に惱める大阪人の移住を歡迎し、中流以上の士人が郊外生活の最上地として我も〳〵と移住せし爲、沿線に於て住宅を經營する資本家多く、梅田に近き十三より三國服部曾根岡町麻田等新家屋櫛比し、彼の煤烟の都に活動せる新舊人物擧つて一日の勞を此郊外新市街に休むるに至り、箕電の前途洋々として海の如し、社長は誰ぞ大阪の長老平賀敏氏なり、專務取締役は誰ぞ、一世の才人小林一三氏也。

箕電創立の困難

小林氏は山梨縣の人、其小さき身体、引締りたる面貌に、元龜天正第一の才人山

本勘助の血を引いたるにやあらん、滿身智と膽とに滿つる所、甲州人たるを耻かしめず、若くして慶應義塾を卒業し、直ちに三井銀行員となり、明治二十六年二十一歳にして、大阪支店詰となり、當時の支店長岩下清周氏の下に働きつゝ、小說を草して雜誌『この花』に投書し、其經營者たる大阪毎日の高木利太、菊池幽芳兩氏に激賞されて新聞記者たらんとして岩下氏に說諭されて思ひ止まり、三十年三井銀行名古屋支店詰となり、三十二年復た大阪支店に轉じ、營業部長となりし時の支店長は今の社長平賀敏氏なりき、氏の岩下、平賀二長老に緣ある、蓋し一朝一夕の事にあらずといふべし。

幾なくして三井を辭し、阪鶴鐵道に入りしが同鐵道が國有となりしにより、社員の始末をつけて、其士を愛するの深きを知られ、三十九年箕電創立を企てしも、當時何人も顧みざりしのみか、舊阪鶴の大株主は勿論舊重役連にも悉く反對の議論出でたりしが、監査役たりし氏は總支配人たりし速水太郎氏と共に、必やり遂ぐる見込ありとの强き自信の下に周到緻密なる案を立てゝ、岩下清周氏に說きて彼を動かし、其保護の下に十二月創立總會を開きて、四十年終に會社を成立し、其手腕を大阪人に認めらるゝに至れり。

人物經濟上の愚策

箕電創立後同社が着々進展しつゝあるは、世人の等しく見る所の如し、才人小林氏の手腕にあらずんば、遊覽電車にして斯く迄も成功せしむることを得んや、而も

氏は決して眇たる箕電に跼蹐せしむべき人物にあらず、彼の湧くが如き才、冴ゑ切つたる腕は更により大なる仕事によりて試驗されざるべからず、彼をして僅かに電鐵界の才人たるに甘んぜしむる如きは、彼の爲にも不幸なるは論なく、大阪の爲にも不幸なり、惟ふに彼の知己寧ろ岩下以上に彼の知己ともいふべきは島德藏氏ならん、島は大量の男なり、遊んで居りて仕事する男なり、彼は決してコセ〳〵せず、年に一二度位は一寸働くも其働や大なり、彼れ其財力を以てして何か大事業を起し小林氏をして其當面の衝に當らしむれば、必ずやり遂ぐるなるべく、島をして大株取引所理事長として收まり返らしむる如きは、島の爲にも大阪事業界の爲にも取らざる所にて、取引所の如きは偶像を拉し來りて理事長たらしむれば、夫れにて足れり、仕事は宮崎敬介といふ男が萬事をやるにあらずや、此化學工業勃興時代に夙に此方面の事業を研究もし抱負をも有する島が、一向發奮する所もなくして、大株理事長の椅子に就き、所謂大阪式に紳士階級の一等地位を贏ち得たるに甘んずるは何事ぞ、然れども島は今日の儘に終る男ならず將來必ず何をかやり出すならん、其時には參劃者として小林氏あるが當然なりと推測して然るべき歟。

經營振と灘循環鐵道

島未だ起たず、岩下失脚したる後氏が平賀敏翁を捉ゑ來りて箕電の社長に推戴せしは彼にあらずんば出來ぬ仕事也、平賀は輕々しく動かざる人物也、然れども嘗て藤本に動かされ、櫻セメントに坂本巳之松を常務たらしめ、トン〳〵拍子に好成績を

擧げつゝ、藤本には横田義夫、谷村一太郎などの才人を据ゑ、己は唯其大綱を握るのみ、餘力何事をか爲したしと思ひ居る際、彼れ小林氏は巧みに捉ゑ來りて箕電を据膳にし、其地位と信用と人格の光を利用し阪神電鐵なる大敵と戰ふ、阪神の今西林三郎氏は人氣惡き男なり、此人氣惡くして動もすれば惡辣にして、陰險なる事をせぬとても限らずといふ疑問の人物今西君と鬪はしむるに温厚篤實にして、社交界に人氣ある平賀翁を以てす、こゝが小林氏の智者たる所にて、彼は彼自身の名を以て今西と爭ふてとは戰の利なるものにあらざるを知るなり、請ふ最近に於ける箕電の經營振と阪神に對する戰鬪振りを見せしめよ。

最近の箕電は實に旭日昇天の勢ある箕電なり、坪三圓にて買收せし十五萬有餘坪の所有地は十圓以上の實價を有して、土地の差益に百萬圓の利あり灘循環線路に就ては十三より西宮までは殆ど總てが安價にて買收し終り、西宮より住吉までは別莊地なるを以て多少高價なるも、住吉以西は西宮以東同樣安價にて買收される見込あり、且灘線は十三より分岐するを以て、百八十萬圓を要せし梅田十三驛間は其儘灘線に用ゐられ、電動力は市電より購入すれば、發電所費百五十萬圓を節約し得らるべく、かくして延長十九哩に亘る灘線は、一哩二十萬圓、總計四百萬圓弱にて建設すべく、之に對する資本は小林氏の力を以て船成金岸本兼太郎氏を動かして、三百萬圓を借り入れたり、陣容は已に整ひぬ、兵糧は餘りあり、此電鐵にして一たび開通されんか、阪神乘客三分の一を吸集するは、蓋し朝飯前の茶漬ならん。

今西阪神の電氣

是に於て乎阪神の今西林三郎君躍氣運動を開始し、あらゆる手段方法を以て箕電の灘線防害運動を試み、大隈内閣の時此目的を果さん爲に、三派合同の肝煎役を勤め無二の忠勤振りを見せしも、大隈内閣の瓦解するに至りては、天定まつて人に勝つ、今西君の失望落膽想像するに餘あり、之に反して箕電が今西君に機先を制せられたる大隈内閣倒れて、寺内々閣生れ、内務大臣後藤男爵が鐵道院總裁を兼ぬるを見たる平賀君の得意幾許ぞ、果然才人小林君は此戰にも勝ちたるなり、若し夫れ今西君が如何に今西式の名策?を弄して温厚の君子人平賀敏君を怒らしめたるかは、請ふ之を阪神電鐵記事の條下に見よ。

對大阪市の惡分子解除

更に箕電の基礎鞏固となりし原因は、北銀の持株が世の資本家に分配されしにあり、從來箕電と北濱銀行は惡因緣ありと世上より目されしものなるが、這次株式市價い奔騰によりて、北銀は其持株全部を處分し、今日にては北銀も重荷を卸せし上多大の收入を得箕電も有利なる實質を世人に認めらるゝに至れり、而して其茲に至りし根本原因は箕電が先に梅田野江間に於る電鐵設敷權を得しも、見込少なしとて敷設せざりし爲め、年々五千圓宛を市に納入するのみか一定の期間内に敷設せざる違約金として三十萬圓を負担しつゝありしが、曩に市電第四期線に屬する天神橋六丁目以東線路内決定と共に、當然箕電對市の條件は解除され、三十萬圓賠償金が消滅

せしと共に、其利子たる年々の五千圓も取り消され、同社の惡分子は此に全く一掃されたるによるなり、灘線問題といひ三百萬圓借り出しといひ、對大阪市の惡分子除去といひ、其鮮やかなる手腕は、世人をして益々小林は智者なりといはしむるに至りしも宜ならずや。

會社内の人物

名將の下に弱率なし、箕電ほど多士濟々たる會社は少なかるべし、技師長上田寧君は阪鶴時代小林氏の下にありて、一人前の人物に仕立上げられたるもの、阪鶴國有後一旦阪神の人となりしも、箕電に呼び返されしは、小林氏が彼の架橋事の腕前を見込みしによる、梅田の陸橋、十三の鐵橋其堅牢無比にして、經濟的なるを見るだけにても彼の人物手腕を證するの値打充分にあらん、彼が重役格の元勳として敬重せらるゝは當然也、庶務の三森義秀君は大阪高商の出身にして、社の内外を暗んせる小林氏秘藏の才物、頭の禿工合より見れば年寄のやうなるも、まだ四十には前途遼遠なりと聞けば何人も其智惠禿せるに驚かざるものあらんや、君今ま病む幸に加餐自玉せよ、經營の吉岡重三郎君は小林氏の最も信じて相談相手とせる男、閨秀畫家吉岡千種女史の叔父にして、文學趣味を有し、草古なる俳名の下に隱れて落付きある詩味を發揮す、彼は中々の智者にして仕事ぶりも周到緻密而貌の茫洋として、コセ〳〵せぬ所に、將來一會社の經營者としての重味ほの見ゆ、十年後の大阪財界に活躍すべき人ならん、其他工務課に戸田一君あり、電氣課に工學士井上福胤君あ

り、寶塚主任に安威勝也君あり、車庫の本田登君は高工出身にして、會計に橋常次郎君あり、運輸に佐藤博夫君あり、地所の阿部悌藏君は慶應出身にして、發電所の深尾芳太郎君は工學士也、是等の秀悉才く來りて氏の部下に集る、氏の部下を愛するは阪鶴以來世已に定評あり、其家族的に和氣靄々たるは淵源する所深きによらざるべからず、而も才人小林氏は斯の如き天地にのみ拘束すべき筈のものにあらざる也。

■手八丁口八丁の小林一三君

或人が箕面電車の吊革の比較的短いのを見て、之は恐らく小林君の考案ではあるまいと皮肉つたこと程左樣に君は小軀の方であるが、併し大男總身に智惠が廻りかねると正反對に君は其身に有り餘る程の才氣を有つて居る、換言すれば滿身總て是才である、往年君が月俸十五圓で三井銀行に奉職するや、君が金時計を持てるのを見て某先輩其贅を戒めると、君は『僕が此處に勤務するのは商業見習の爲めで、一ケ月十五圓で生計を立る爲めでない、持物の贅の如き何かあらんと』空嘯た、物の響に應ずる底の君の才氣概れ此類である、

箕有電鐵の本質は遊覽的である、而も其經營宜しき得つゝあるは、一に君の多趣味の反響と認め得ざるに非ず、豊中グラウンドの設備、寶塚の少女歌劇、箕面公會堂の繪畫展覽會等應酬に暇あらず、就中時々寶塚に催ふされる俳畫展覽會に君自身の作畫が出品されるなどは、其の造詣寧ろ驚くべしである、君が繪畫の鑑識は坐ろ驚嘆に値ひすると言ふた人があるが、恐らく過褒ではあるまいと思ふ。

曾ては採觚業を以て立んとした君は又文筆の才能がある、往年一度大阪新報社の顧問といふ格で其編輯及營業に參畫したのも亦君の趣味の一と謂はねばならぬ、要之君が才は行雲流水時々處に應じ千變萬化の概がある、或人曰く小林の皮肉は毫も他に惡感を與へずと、君が才の猪口才ならざる又想ふべしである、山梨縣の人年、四十五――『現代事業之研究』

策の爲に誤まられたる阪神電鐵

――專務今西林三郎氏の誠實を疑ふ――

不思議なる營業振

神戸雲井通より大阪天神橋六丁目迄直通せる阪神電氣鐵道株式會社が、郊外電車中最も有望なるに拘はらず、專務今西林三郎氏の經營振りに面白からざる所あるにや、近來世上の物議に上ることの多きは、同社の爲に氣の毒に堪へず。

阪神電鐵は明治三十二年六月の設立にて、其開業は三十八年四月なり、資本金七百萬圓、內拂込金五百四十萬圓、諸積立金九十三萬七千圓、合計六百三十三萬七千圓の大會社なるも、此中九十三萬七千圓は株主の醵出せしものにあらざるを以て、正味資本五百四十萬圓に對し同社現在の財產價格は五百萬二千圓とす、而も同社は社債二百七十萬圓と、借入金五萬圓あるにより、此二つを差引けば株主の手に殘る財產は正味二百二十五萬二千圓の小資本也。

嘗て阪神が現在よりも小資本を以て經營しつゝ、幾多の困難を凌ぎて會社の基礎を固めしは、最初の社長外山脩造、次期の社長杉村正太郎兩氏及び故前川槇造氏の力なり、然るにお調子に乘りて增資說の沸騰せし時、絕對に反對を表明し、爲に社

長の椅子を退きしは杉村氏にして、杉村氏を蹴落せる増資派は此時現在の資本額に増資を爲し、黒幕となりて活動の結果、首尾よく乘り込みし辣腕家は卽ち現專務の今西氏なり、此一事已に昔し取つたる杵柄の恐るべき手腕なるに、爾來毎期一割三分の配當をなして株主を喜ばしむ、豈料らんや一割三分を頂いてホク〳〵ものなる株主こそ知らぬが佛の結搆人ならんとは、蓋し彼は一日宛縮め行く鐵道の生命たる軌道を償却せずして、收入の八掛け以上を配當し、會社永遠の計を閑却して徒らに一時株主を喜ばしめて己の功に誇る、請ふ左の最近五期の表に見よ

決算期	收益	配當	比例
大正二年下	三八二千圓	三五一千圓	九分一厘
大正三年上	四〇四千圓	同	八分六厘
同　年下	三三一千圓	三二四千圓	九分七厘
大正四年上	四二五千圓	三五一千圓	八分二厘
同　年下	四三六千四	同	八分五毛

見よ同社が如何に資本銷却を閑却して其全力を配當にのみ注ぎつゝあるかを、利益金の十分の九分七厘より、最低にても八分七厘を分捕りす、大正三年下半期の如きは一割三分配當に要する三十五萬一千圓の利益なかりし爲に、此期だけは一割二分となしつゝ、而もギリ〳〵決着儲け高の九分七厘まで配當し終る、斯の如き危險なるやり方をして會社の基礎鞏固ならば、天下何れの會社が鞏固ならざるものあらんや、果然會社の經營も次第に行き詰り、增資によりて配當の融通を見付けんとする時、圖らずも箕電との確執起り、今西氏が昔の手を出さゞるべからざる阪神の爲

には不幸なるも、氏としては大得意の時來れり、而も鮪は何時も柳の下に居らず、今や時利あらず雖行かず、得意却て失意となりしは會社の爲に氣の毒といはざるべからず、請ふ二社の葛藤を叙述せしめよ。

灘循環に對する例の癖の顚末

灘循環特許線事件に就て今西氏の當の相手は箕電社長平賀敏氏なり、今西氏に定評ある如く、平賀氏には溫厚なる君子人、虛言をいはぬ人との定評あり、此の人格の人が火の如く熱くなりて怒り出し、今西氏との交渉顚末を文書に公にして世に發表するを見ては、今西氏には氣の毒ながら、萬人が萬人平賀氏の說を信ぜざらんとするも能はざる也、今其概要を約記すれば、大正四年の暮北銀頭取高倉藤平氏は平賀氏に對し、かねて同行にて貸付金擔保として保有せる灘循環電氣軌道の株式は、同行の整理に伴ひ處分する必要あり、同株式に關しては、前年來阪神にて買收の希艇ありたるのみならず、已に一度は買收覺書まで出來上りたる因緣もあれば、今西氏と會見して圓滿なる解決を爲しては如何と勸告し、正直なる平賀氏は直ちに贊成し、高倉を立會人として平賀今西二氏の會見となり、高倉氏は將來の利益の爲め阪神電鐵が買收する方得策なりと勸告し、今西氏も之を諒としたるにより種々談合の末平賀氏は今西氏に對して左の三案を提出したり。

(一)、灘循環株式に對する債權者たる北濱銀行が、之を阪神電鐵に買收すべきを勸告し、今西氏も亦之を諒としたる以上は、箕電は此線に對する從來の希望を捨て、歷史を無視し徒らに競爭せざるべし、さる

代り灘線が阪神の手に入る時は十三、西宮間の支線は全く無價値となるべきゆへ、之に要したる實費を辨償せられたき事

(二)、然らざれば將來の競爭を避くる爲に灘線は阪神箕面兩會社共同にて經營する事

(三)、萬一前二案の相談纏まらざれば、箕有は斷然單獨にて灘循環線を買收し、多年の希望たる阪神間急行電鐵の計畫を進捗すべし、此場合に於て阪神電鐵㈱社は現在斯の如き好意的交渉を諒とせられん事

以上の三項に對し今西氏は至極公平なりと滿足し、追て重役に謀りて何分の相談を爲すべしとて別れ、本年四月に至り、高倉氏の手を經て

阪神は重役の儀纏まらざれば、箕有にて灘線を買收經營するも遺憾なしと回答せしを以て、正直なる平賀氏はこれを紳士の回答なりと信じ、四月臨時株主總會を開きて、灘循環特許線讓受けを決し、大阪神戸間急行電車に着手せんとて岸本兼太郎氏より三百萬圓を借り入るゝことゝなれり、然るに一方今西氏は是に俄然として得意の手を出し、高倉氏の好意をも平賀氏の穩當なる妥協事情をも忘れ實業家としての德義を無視し、突然當時の鐵道院總裁に對し、灘循環特許線讓渡しの認可すべからざる抗議書を提出し、無根の事實を揑造し、虛僞の風說を流布し以て箕電の業務を妨害したるのみならず、更に自己の取調べたる材料を提供し氏に最も關係深き箕電の株主を煽動し、總會無効確認の訴訟を提起せしむる如き、灘循環特許權讓受問題に對し、目的の爲に手段を選ばざる方法を以て、あらゆる妨害を加へたり、而も其起訴株主は十一萬株千二百人中僅に四名百八十株にして、其中百株の株主たる結城林清は元と今西氏の店員にて舊主從の關係あり、十株の株主那須善治

氏は北濱の株式仲買人にして今西氏と密接の關係あり、何れも今西氏の代理人と認定されても致方なき位地にありより、此無理なる訴訟は僅に二回の公判にて原告の申立は棄却せられ箕電の勝利となりしは當然の結果なり。

斯る今西氏の態度は多數の人をして是將に氏が當然の運命なりと思惟せるもの、如し、銀行集會所の評判によれば圓滿主義の平賀翁をしてあれだけ怒らしめしに見れば、其權謀に於て平賀は到底今西の敵にあらずといふに一致せりと、片岡直輝翁は同じ阪神の重役なるにも拘はらず、『今西は凡てあの權謀の爲めに自分を誤るのみならず、會社を誤らしむる』と歎息せられしやに傳ふ。

正直は最後の勝利者也

吾人は今西氏の同情者也、是に於て今西氏を救はざるべからず、如何にして救ふべき乎、蓋し今西氏には至難なる注文なりと雖も常人に對しては易々たる業のみ、何ぞや、曰く、『正直なれ、眞面目なれ、正直は最後の勝利者也』といふ事これ也智惠に於て、權謀に於て、平賀氏と今西氏を比較して誰か平賀氏を勝れりといふものあらんや、況んや惡辣に於ては今西氏には朝飯前の茶漬ならんも、平賀氏は絕對的に爲し能はざる人なるをや、勝敗の數は戰はずして定まれるものゝ如し、而も無策にして溫厚に且つ正直なる平賀氏が勝ちて、陰謀に巧みなる今西氏の敗れしは、豈これ人多くして天に勝ち天定まつて人に勝つの類にあらずや、今西氏にして之に

よりて深く反省する所あらんには其得る所や大なるべき也。

窃に聞く近時同氏大に悟る所あり、修養鍛錬を積みつゝありと、蓋し其動機は愛嬢を喪ひたまひしによれりとも傳へらる、果して然らんには今西氏の今後は誠意に富める好紳士として尊敬を拂ふべきか、同氏の爲に慶賀に堪ねざる也。

（大正五年十月記）

十年前の田岡嶺雲

『六尺を己が天下や今朝の春』臥病五年、叛骨徒らに老ひぬるを嘆ちし嶺雲氏から贈られた短册は、今も尚ほ僕の筐底に秘められてある、中央公論に嶺雲の數奇傳が掲げられた當時、僕は泣いてそれを讀んだ、嶺雲の『鎖魂錄』はそれを讀んだ當時も涙であつた、今もそれを想ふては涙である、美しい戀を語つた其人は既に白骨である、懐しい思出でを記したその人は返らぬ人となつて此に五年『夢のやうに果敢ない光を手頼りに生きる月見草のやうな女であつた』嶺雲が昔の戀人を形容して這う云ふやうに説明した時、僕は何んだか夢みるやうな美しい心地となつた、嶺雲から昔の戀を語られたのは岡山であつた、僕が湖南内藤先生の紹介狀を携へて嶺雲を岡山へ訪れた時、後樂園をそゞろあるきして、彼の口より當然聽くべかりし正義と人道と眞理と自由と而して哲學的研究とにあらずして、叛相のアリ〳〵とした彼れより夢のやうな戀物語を聽かうとは眞に意外であつたのだ、當時の嶺雲は家庭至極圓滿であつた、環堵蕭條孤身茕々たる嶺雲から思出多き戀物語を承はつたなら、僕の詩的情緒は一層亂れたであらうが、美しい家庭の主人公たりし彼れと、波々として盡きせぬ愛の柔かみを語り合はんとは、僕の驚いた所であつた、追憶はそれよりそれと十年前にかへる、岡山行の汽車に身を乘せて、嶺雲の遺著數奇傳を讀めば、詩の國、戀の地に一歩々々と踏み込む心地がする、戯曲的な岡山の地、何だか唆らるゝやうに情緒頻りに動く。（岡山にて泥）

松風嘉定氏と其事業

松風陶器合資會社＝日本硬質陶器株式會社＝
松風機械部＝大阪電機株式會社

製陶界の巨頭

天性とは云へ、身を一陶家より起し今や我が製陶界の巨頭、電氣界の傑物として屈指さるゝ松風嘉定氏は、其時別高壓用碍子によつて、其名海の内外に喧傳せられ而も電氣事業勃興の現代に於て優秀完全の製品を産出して輸出する上、輸入防遏の功を奏せしは、大に人意を強くするものあり、殊に氏が大正五年三月輸出貿易に貢献せるの故を以て、勅定綠綬褒章を下賜せられしは、獨り氏の名譽のみならず、確に本那製陶界並に電氣界の誇りたらずんばあらず、氏は古より陶器に名ある尾張瀬戸の人、祖先は慶長年間より製陶に從事し、家世々相襲いで之を業とす、氏は此陶器の歴史に包まれたる地に於て、製陶粘土の上に生れ、陶製粘土の上に生長して幼より斯業に沒頭し、其智識は久しく攝取されたる食物の如く、血となり肉となり全身に漲流し、且つ充實し、先此機威ある天的陶業家が京都の陶業家松風嘉響氏の養子となり、事業の發展製品の改良に努力せし結果、今や外國品を壓倒し陶器の海外輸出を増進せしむるに至りしは、何人も目覩する所なり、氏のやり口が仰々しから

ず、總て國家的見地に立ちて熟慮研究、思ひ立ちし事は疾風迅雷如く決行せらるゝは、先年電氣視察の爲に氏としては突然ならざるも、他より見れば眞に突然渡米して視察すること二ヶ月、突然歸朝して直ちに新智識を斯業に實行せしに見ても知るべく、一言以て之を評せば、氏は實に不言實行家の代表的巨人也。

松風陶器合資會社

氏の事業としては松風陶器合資會社、日本硬質陶器株式會社、松風機械部、大阪電機株式會社の四あり、松風陶器合資會社は本社及び工場を京都市本町通二の橋（京阪電鐵東福寺停留所東隣）に置き、支店を名古屋市東區白壁町一丁目、出張所を東京市京橋區東傳馬町三丁目に設け、京都だけにて職工を使用すること五百人餘、十萬圓の資本金に對して七萬圓の積立金を有す、其一代の心血を注ぎたる松風の碍子は、今や東洋唯一の獨占的事業となり、殊に近時本邦電氣界の發達に伴ふて電氣絶緣用磁器の需用著るしく增加し、多くの電氣業者が此碍子の恩惠に浴し居ることは今更いふまでもなく從來低壓用（三千五百ヴォルト以下）のものは內地に於て製出するものありしも、獨り特別高壓用碍子（一萬ヴォルト以上）に至ては悉く之を米獨兩國より輸入を仰ぎ居りしを、松風氏が慨然として輸入防遏に志を立て、原料及び窯爐等を改善し、終に二十萬ヴォルト迄の特別高壓用碍子を產出するに至りしより輸入を絶對に防止せしのみならず、製品の總ては外國品を凌駕せるを以て今や盛に

輸出せらるゝに至り、松風氏の國家に盡せる功勞の偉大を否定する能はざるに至れり、而して其販路の擴大は、京都の工場のみにては注文に應じ切れざるにより、名古屋停車場の西、則武村に宏大なる分工場を設置し、碍子及び硬質陶器を製造するに至り、將に京都の本工場を凌駕しつゝあり、次に硬質陶器を語らんには、勢ひ氏の經營せる日本硬質陶器株式會社の歷史を說かざるべからず、同社は金澤市長町河岸にあり、堅牢なる西洋食器を製作して舶來陶器に對抗すべく、八十萬圓の資本を以て設立せられたりしも經營の方針を誤り、財政紊亂に陷り社礎漸く傾きて手の着けやうなきに至るや、一片の俠心已むことなく、當時何等大株主にもあらず、債權債務の關係なかりし身を以て、寄託を重んじて整理の局に當り、殆ど脉膊止まれりといはたる同社を整理して、大正元年九月入つて社長となり、資本金を六十萬圓となして業務を督勵せられし結果、大正三年には早くも一ヶ年の製產額百八十萬圓に達し、歐洲戰亂後は露國及び南洋、濠洲、米國の輸出莫大にして、到底金澤工場のみにては注文に應じ切れざるより、名古屋市外、則武の工場に於て肥後、天草の硬質陶土及び磁土を取り寄せて盛に製造しつゝあり、大正五年の春、金澤工場を烏有に歸せしめしと雖も、製造輸出從前未だ曾て有らざる盛況に達しつゝある今日、斯く如き小事は痛痒相關せざるものゝ如し、因みに硬質陶器に逸すべからざるは、西洋の皿鉢と少しも違はざる實物其儘の花鳥などの色彩にて、こは美濃國多治見町の小栗國次郎といふ人の發明に係る『石版陶器轉寫紙』を白地の陶器に燒き付くるによ

りて完全なる極彩色の模樣を生ずるものにて、松風氏は此日本に於ける唯一人なる小栗氏を雇ふて使用人となし、盛に轉寫紙を作らしめて之を金澤、名古屋の二工場にて燒き付くるにより、今や舶來品を驅逐するのみならず、歐亂に乘じて南洋、濠洲、露國、米國にまで輸出せらるゝに至れり。

松風機械部

更に大阪市東區今橋二丁目堺筋の同社支店に、松風機械機部なる事業あり、弘く不用機械金物を精査し、其所有者と購入希望者の中間に於て斡旋の勞を執り、能率優秀なる中古械機を購入し、完全なる修理を加へて需要家に供提しや、電氣機械器具一切機械金物類幷に古物金物の販買を爲す、擔任者は機械に精通せる工學士平田重兵衛氏なる品格識見倶に備はれる好紳士にして、更に機械鑑定者としては松風陶器合資會社の顧問として初より同社の事業に參畫し、松風家の事業を語るには逸すべからざる同社電氣顧問工學博士小木虎次郎氏及び三善工學士等の加はれる所、大に普通有り來りのものと趣を異にするものあり。

大阪電氣の救濟

最後に特記せざるべからざるは、昨大正五年氏が大阪電機製造株式會社を頓死の境より救ひしこと是也、同社は電氣王と謳はれたる故才賀藤吉氏が、我邦電氣事業

の勃興に伴ひ、理想的電氣機械器具の製造販賣を目的とし、明河四十四年十二月百萬圓の資本を以大阪府下西成郡神津村今里（箕電十三停留場西方數丁）に設立せしも、製品の優良なるに拘はらず、經營兎角意の如くならず、あはれ解散の悲運に際會せんとせし時、氏によりて救濟せられ、總株二萬株中三分の二以上を氏の一系に買收し、取締役社長松風嘉定氏、專務取締役井上龜之助、取締役工學博士小木虎次郎、大瀧新之助、林武八監査役鶴谷忠五郎諸氏によりて、社務を一新すると同時に將に勃興せる電氣界に向つて大に貢献する所あらんとす、專務井上氏は一般電氣事業界に最も重要視せらるゝ高壓用電氣器具を製作し、名聲我國電氣界を風靡せる京都市油小路八條北入る合名會社井上電機製作所の主人にして、資性温厚着實年僅に三十前後なるも、其精透せる頭腦は已に電氣保安器具其他十數種の專賣特許並に實用新案權を獲取するに至れり、此非凡なる人物が松風氏の知已に感じて奮然起つて專務となり、新たなる大舞臺に於て其鐵腕を鍛錬せられんとするに至り、大阪電機も亦松風氏の意の如く發展すべきは、何人も信じて疑はざる所なり。

舊友と別れて

（その一）

◉蘇子瞻歎じて云く、君不見左納言右納史、朝承恩暮賜死と、あゝ舊游諸君、行路難は水に在らず、山に在らず、百年の苦樂他人に由る、豈たゞ婦人のみならんや。

◉管鮑貧時の交り、市道の交を爲す今人には解すべくもあらざるか、管仲曰く、我を生む者は父母、我を知る者は鮑叔なりと吾等は管仲にあらず、而して人に鮑叔を望むは抑も吾等の過てるか。

湯淺氏の爲人と其事業

＝厚給優遇、學者及び技術家を招きたる湯淺家事業の將來は果して如何＝

加賀百萬石の人物輩出

佛御前、前田犬千代の加賀の國は、流石に將軍の副たる百萬石の國なり。文敎整々たり、武備振々たり、其の今日人才林立し、英俊雲集する、故なきに非ざる也。

見よ學界には文學博士三宅雪嶺あり、松本文三郎あり、故人には藤岡作太郎の如きを出したりき。理學博士には櫻井錠二、櫻井房記、大幸勇吉、斯波忠三郎、河合十太郎、木村榮を擧ぐべく、工學博士には近藤仙太郎、櫻井省三、平井晴次郎、石黑五十三、井口在屋、故高山甚太郎を出し、醫學博士には三輪信太郎、北島多一、鈴木文太郎、高橋順太郎あり。法學博士には戸水寛人、清水澄、井上正一、上杉愼吉あり。更に法曹界の人としては河村善益、前田孝階、島田鋏吉、菊池侃二、故櫻井一久を出し、而して文人には國府犀東、桐生悠々、稻垣木葬、田村松魚、島田春嶺、泉鏡花、德田秋聲あり。陸海軍には木越安綱、南部辰丙、瓜生外吉、石橋甫、小幡文三郎、松本有信、寺垣猪三、杉村勇次郎等あり。官界にも杉村虎一、斯波淳六郎等を數へたりき。

更に財界に至つては一世を光彩する巨星乏しからず、紐育に一億の富を有せる高峰讓吉あり、更に早川千吉郎、中橋德五郎を初めとし、堀啓次郎、山岡順太郎、山田市郎兵衛、安宅彌吉、市川誠次、野口遵、林安繁の諸氏を數へ、而して此には早川氏の令弟湯淺七左衛門氏を脫すべからず。

祖先は加州の鄕士

湯淺家の曾祖は、寛文六年即ち今より二百七十年前、京都市外西の岡に發祥したり、其の祖先は加州の鄕士にして、今日湯淺家の本宅を置く五條通りに刀劍類の販賣を初めたり、後江戸に出でゝ將軍家御出入を許され、將軍家より大判を拜領せることは以て此の家の誇となす、かく西京と江戸に店舗を出して、刀劍業を以て名を得たる湯淺家は、日本橋、京橋、神田に土地を求め、千葉に開墾事業を興し、淺湯家の富は日に大を加へ、月に多きを致したりき。

湯淺家は文久年間、大阪に支店を設け及物類を商ひしが、明治初年、鐵物問屋を開始し、今日に於ては鐵材及び加工鐵物を以て海外取引を開始し、海外の市場日本の銅鐵商湯淺として人々に膾炙せらる。

因循姑息なる京都に於る新生命と新色彩

湯淺家の現代主人七左衛門氏は、早川家より入りて此の家を嗣げるもの、三井の

重鎭たる早川千吉郎氏は實に氏の令兄たり、氏は法科大學の出身にして、三十七年湯淺家の嗣子となり、此の三百年來の舊家を嗣いで衝天の意氣と不撓の精神を以て新生命と新色彩を此の舊家に施し來る。

氏は先代湯淺タメの養子となり、其の愛女タケ子に配し、舊名外吉を改めて湯淺七左衛門となり、曩日の一法學士、三百萬圓の富豪となりしの時や、氏に於て些も之れに誇るの色なし、湯淺家の財產の如き、之を華族の世襲財產同樣の制度の下に保管すれば可なりと、養家の富の如き念頭に置かず、着々新事業を計畫し來れり。

即ち刀劍物類の如きは其の販賣を止め、單に鐵物のみとして、明治四十一年泉州堺に鐵工場を置き、四十三年合信洋行を支那漢口に設け、四十五年上海にも支店を出し、飽く迄績極的に、進取的に、活潑なる營業振りを示したりき。

果斷勇決、京人の意表に出づ

之れより先き、京都の本店を廢止したるは、世の群盲衆愚をして多少の批難を招かしめざるにはあらざりき。二百年來の祖先創業の店舗を鎖すは、祖先に孝なる所以に非ずと誠しやかにいふものもありしかど、何等利を擧げざる不適の地に其の店を繼續するは商戰場裏に活躍せんとするものゝ遂に忍び能はざる處也、氏が群議を排し衆論を斥け、斷々乎として其の所信に猛進したりしは、果斷勇決、尋常人の企及し得る處に非ず、此の店を鎖せし時氏が株相場に失敗したりとの訛傳道路に傳はりしは、三井銀行が和歌山、京都等の支店を廢したる時、三井家危機に迫れりと唄はれしと同じく、何等の根據を有せざる一種の杞憂に過ぎざりしは、氏の令兄たる早川氏が所感の一端、何人か之れを聞いて首肯せざるものあらんや。

氏、今銅鐵商として直接國稅二千五百圓を納め、其の商運日に昌んなり。彼の島津製作所のジーエス蓄電池に對抗して、エッチ、ワイ蓄電池を設けしもの、其の因由なくんばあらず。

慨然としてエチワイ蓄電池製造に腐心す

氏は曾て東京電機學校より出版せる『蓄電池』なる一書を見たることあり、同書中世界に於ける主要蓄電池として、獨逸のチユードル蓄電池、英國のクロライド蓄電池等を擧げ、而して日本のジーエス蓄電池に及ぶ、氏之を見て莞爾として微笑し、他年一日世界主要の蓄電池として、エチワイ蓄電池を追加せしむべく、本書訂正の日あるべしと、即ち堺の製作所に渾身の力を捧げ、優良品の製作に從事せしむ、其の一點の批を打つ能はざる、飽く迄優良の佳品を作らんが爲に研究に研究を重ね、努力に努力を用ゐ、其の完全無缺といふに至つて初めて工場外に出さしめんとする用意は、檢査部を嚴重にするに於て知るを得べし。

あらゆる研究を盡くし、あらゆる努力を拂ひたる、エチワイ蓄電池の製作物は、殆んど完全の內容を以て市場に出づべく、其の東京電機學校より出版せる蓄電池の

一書をして世界重要の蓄電池中に此のエチワイ蓄電池を列擧するの日あるを信じて疑はず。湯淺氏の事業、今後の發展、刮目して待つべものあらん。

湯淺氏は未だ早川外吉といはれたる頃大學に在りて、舊藩主前田利爲侯の指導者となり、故らに社交を絶ちて、侯と同棲し、敎育に專念する處ありき。其の人公平にして正直、謹嚴にして謙讓、其の豁然たる胸襟は人をして親愛の情を發せしめ、高廉なる行爲は人をして仰敬の念を生ぜしむ。

嗚呼此兄ありて此弟

嗚呼長兄、早川千吉郎氏は三井家の重鎭として威望あり、其の寬洪にして仁慈の情に富むは、恰も豪雨の草木を潤ふが如く、温乎たる容、靄然たる音、遠近風を望んで仰慕するは、以て財界の有德の君子たる名に反かず。

その次兄の純三郎氏は史學に沒頭して淸廉に甘んじ、富貴も移す能はず、貧賤も易ゆべからざる意氣を有し、而して其の令弟たる湯淺氏が、温容和氣の外裝を以て轉乾旋坤の事業的大手腕大抱負を有せることは、天何んぞ早川家を幸するの甚しきや。天の寵幸、天の淸福、實に此の一家に蒐まれるの感ある也。

◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆◆

加州横山家と其事業

——加州の横山か横山の加州か——

加賀に横山越中に立山

加賀に横山あり、越中に立山あり越中立山の名山たるは何人も知る所、これに對して謳はれたる横山は、陸地の崛起したる高山にあらずして、石川縣を代表する富豪たる横山家を指すに至つては、其名聲の高きこと立山に匹敵するの豈驚歎すべからずや。

提封百二十萬二千七百石、德川家を除けば日本第一の大藩として、北陸の中樞加越能三州の太守從二位大納言前田利家卿が、菅亞相の正統として、身を尾州荒子城主より起されしことは言はずもあれ、重臣に加賀八名家あるを知るものは采邑三萬石加藩の桂石として重んぜられたる横山家あるを知らん、蓋してこれ今の鑛山王たる横山家にして彼は決して成金にあらざる也。

前田氏の將横山長隆

戰國の史を繙くものは、天正十年江州柳ケ瀨の戰に前田氏の將横山長隆が、亂軍の中に忠勇の戰死を遂ぐるに到りて、轉た感慨の禁ずるべからざるものあらん、是れ即ち横山家の祖にして、嗣子長知父の志を繼ぎ、利家卿の股肱として帷幕の參畫、鋒鏑の勳功嶄然として群を拔き、利家、利長兩卿に仕へて忠穀比なかりしも、利長卿が其誠忠を憐み、己が死せば必ず殉死すべきを察し、事を設けて放逐するに及

んで長知叡山に登り髪を削つて夕菴と號す、德川家康豐臣秀頼之を聞き、爭ふて聘するも共に斥けて應ぜず、毛利輝元之を聞き曰く、高岡の納言死期應に近きにあるべし、長知幼より納言の寵眷を受く、納言若し死せば則ち其必ず將に殉死せんとするを慮り、故らに之を罪し、良臣を後嗣に遺すの遠略ありと、後大阪の役起るや夕菴、三世利常卿の出軍を聞き大に悅び、親ら利常卿の館に赴て復任を請ふ、卿大に其忠貞を嘉し、夕菴をして金澤に歸りて奥村永福と共に城を守らしめ、二子康玄長治を麾下に隷して軍に從はしむ、子孫相襲ふて十一世横山遠江守隆章に三子あり、隆長子隆貴家を繼ぎ、二男隆和、三男隆興出でゝ別に一家を樹つ、男爵横山隆俊氏は隆平の子にして隆貴の孫章氏は實に隆興翁の子也。

立志傳中の立志傳

加賀尾小屋銅山を始め、飛彈の平金、羽前の大藏等約一千萬坪の鑛區を有せる横山合名會社の事を知らんとするものは、先づ横山隆興翁が苦心經營の事蹟を研究せざるべからず、翁は嘉永元年五月十五日、金澤市馬場先の横山本邸に生れ、明治二年宗家より家祿の割讓を受けて、一家を樹てしが、明治十二年能美郡尾小屋村民山岸三郎兵衛なる者、始めて試堀を爲し、同十三年其協同人吉田八百松外六名にて採掘に着手し横山隆平舊隆興其協同に加入し、明治十四年其全部を買占めて之を宗家單獨の事業となし翁は鑛長の名によりて專ら力を宗家の爲に盡す、而も當時宗家には二十萬に垂んとする負債あり、事業中止の已むなきに至りしも、舊臣に某銀行支

配人ありしを以て之に說き、一定の期間資本を借り受け、事業を繼續するに至れり

一大難落下

爾來支拂不足、村民の惡罵、舊臣の反抗して、翁を以て宗家を倒產せしむるものとする等、諸種の困難に遭遇せしも、一難來る毎に勇氣百倍し堅忍不拔の意志を以て益々業務に精勵せられしが、最後に至りて一大難落下し、明治十八年十二月金主は契約期限滿了の口實の下に鑛山への送金を停止し百方依賴するも頑どして應ぜず是に於て翁は『來月よりは毎月必ず產銅一萬貫を以て負債償却の期を早めることゝせん、若し約に違はば誓つて墳墓の地を踏まず』といひ、金主亦翁の熱誠に動かされて快諾す、此夜餘りに話が長引き、冷飯と豆腐汁に舌鼓を打ち、其後あの晩の豆腐汁の味は忘られずといはれしは、有名の話あり、己にして明治十九年幾多の難問題に苦しめられし鑛山も、愈々成熟期に入り產銅無盡藏の如く、二十萬の負債忽にして銷却され、以て今日の盛況を見るに至りしは、全く翁一人の力なり。

一門悉く俊髦

奮鬪努力一代の心血を犧牲とし、拮据以て今日の運命を開拓せし翁は、横山合名會社を翁及び男爵横山隆俊、横山章、横山隆良四氏の共同經營となし、長子章氏を以て社長となし、自ら顧問として子姪を監督し悠々晩年を送り、大正五年四月十三日櫻散る頃溘焉として逝去せられしは今尙記憶に新たなる所なるが、翁の遺されし功勞の最も大なるは、戰國名將の血筋にもあらず、無盡藏の富力にもあらずして、

一門悉く俊髦なるにあり、男爵隆俊氏は新敎育を受けて頗る才幹あり、殊に其資性温厚にして貴公子の風姿あり、尋常世の所謂鑛山業者の亞流にあらず、更に一門の興廢を雙肩に荷へる章氏は、夙に四高に學びしも、家業を繼承するには、專門的智識の必要あるより、轉じて東京物理學校に入り、卒業後雄邁の資敏活の才を以て、着々業務を恢弘し、其間滿洲視察、韓國鑛山踏査をせるが如き、鋭意眼を大勢に注ぎつゝあり、横山合名鑛業部の衝に當つて、參名の理事を指揮す、理事中最も敏腕の聞ゐある俊二郎氏は、實に章氏の令弟にして、尙ほ俊二郎氏の令弟芳松氏は、工學士として技術上の要職に任ず、末弟登氏は今住友總本店にありて、業務を研究中なるが、蓋し將來の好采配役たる下準備なるべし、其他約二百名の事務員、四千餘人の坑夫一團の和氣に包容せられて、陣容の整然たること他に比を見ること能はず隆興翁の遺されし此遺產こそ、無盡藏の鑛山にも代ゐ難き遺產と云ふべけれ、其他顧問西永公平理事中泉旣明同三郎諸氏の如き、何れも當代得易からさる傑物ならずんばあらず。

尾小屋鑛山とは如何なる山

是に於て吾人は、横山家の富を代表せる尾小屋鑛山を見ざるべからず、尾小屋鑛山は如何なる山か。

山は西尾村字尾小屋地內大倉嶽の西北に位し、海拔約五百尺、小松驛を去る東南五里の地點にありて、明治十年の發見にかゝり、山齡は他の銅山の如く古からず、

十四年横山家の經營に移り、爾來漸次事業の擴張を計りて隣接鑛區たる波佐羅、五十谷、阿手の三鑛區及び同郡金野村大谷鑛區を買收し、次で大正元年石川郡河山村內白山鑛區の採掘權を得、同二年西尾村地內倉谷鑛區及び鳥越村地內五十谷鑛區の採掘權を買收して、遂に今日の隆昌を見るに至りしなり、地質は第三紀凝灰岩にて所々に石英粗面岩を噴出し、鑛床は凡て正規裂罅充塡鑛床にて、概して平行線狀に位置し、鑛脈は幅一寸乃至五尺、鑛石は黃銅鑛、班銅鑛、藍銅鑛を主とし、稀には輝銅鑛、赤銅鑛、炭酸銅類を混存し、隨伴鑛物としては鐵英鑛最多く、閃亞鉛鑛、方鉛鑛之に次ぎ、脈石は普通石英及び方解石にて重昌石を混ず、採擴の方法は拔掘法及び階段掘を用ゐ、通氣は自然通風の外、電氣送風機等により、排水は疏水道、蒸氣喞筒、電氣喞筒等にして、運搬は坑內外共に人力鐵道により、十二封度軌條を敷設し、其延長は坑內八百有餘尺、坑外三萬餘尺に達す、選鑛裝置は非常に進步せしものにて、坑內選鑛にて得たる不選鑛を除くの外、粗鑛は總て濕式機械選鑛による、最近の產額は含金銀型銅一ケ月三十五萬斤を下らず、以て其隆昌を知るべき也。

平金大藏其他の鑛山

横山家の鑛山は尾小屋に止まらず、明治二十七年故隆興翁信飛の國境に聳ゆる乘鞍ヶ嶽の西麓にある平金鑛山を買收し、翌二十八年現在社長章氏自ら登山して調査研究を遂げ、充實せる設備を施して、五年の後には尾小屋鑛山に伯仲するに至り、一時に盛況を呈したり、此二鑛山を合併して宗家分家の共有となし、以て今日の横

山鑛業部を組織せしは、實に明治三十七年なりき。

三十八年章氏自ら羽前の國大藏鑛山に登り、經營方針を定めて之を買收し、更に羽前國萩野岩谷澤羽後の宮田又舟木の四鑛山を買收し、最近に於て信濃國は諏訪郡金澤村の大澤鑛山、京都府加佐郡池田村に舞鶴鑛山、岩谷澤隣接なる瀬名坂金山外二三鑛區を買收し、大々的採掘を企畫することによりて、横山家の事業は益々大を加ふるに至りたり。

祖宗の名を顯揚

斯の如くにして、加賀の重臣横山夕菴の子孫は一轉して北陸の鑛山王となり、越中立山に比して加賀の横山の名を益高からしむるに至りては、名家の子孫凋落するもの多き今日、却つて祖宗の名を顯揚したりといふべきにあらずや、同家祖宗の靈や滿足すべけん也。

闕舊友と別れて　（その二）

◉諸兄と相遇はざること既に幾旬、獨り兀々として薄暗き編輯理に筆を走らす、あゝ琴詩酒友無情にも悉く我を拋ちて去る、往事渺茫として都て夢に似たり、春風桃李花開くの日、秋露梧桐葉落つるの時、誰と俱に樂まんや。

◉多年江湖に潦倒し、今も尚ほ白波の寄すなるざさに身をすごす、予は諸君を憶ふて惆悵の情將に他に過ぐるものあり、渭濱の波南山の月、諸君と手を把つて當年を語るも遠からざるべし、起つて障子を排せば雲は無心にして西へ西へと流る、そを寂しく眺めつゝ流雲に對つて獨り斷腸の思ひす、偏へに諸兄の自重を祈る。（泥牛孤客）

發明家田熊常吉氏

——其成功には波瀾萬丈千變萬化の哀史あり——

少年既に變り者

タクマ式汽罐の發明者田熊常吉氏は、斯界の偉才なり、彼の成功には眞に波瀾萬丈の概あり、吾輩の今ま彼を世に傳ふる所以は、多くの發明家中彼の偉才の眞に驚歎すべきものあるが爲のみならず、彼の發明に依りて世を益せること、多大なるを以てなり、吾が寂寥たる發明界は彼れあるが故に、其光彩を發揮すること幾干なるやを知るべからず、是れ發明界より彼れを拔いて氏を傳する所以也。

彼れは伯耆國東伯郡端穩村に明治五年を以て生れ、少年時代よりして既に變り者なりき、彼れは夙に美術思想に富み、彫刻を好めり、而してやゝ長ずるや彼の發明的天才の閃き早くも之を認めらるゝあり、十四歲にして國を出で醫師たるべき勸めを受けて之を諾せず、實兄の從事せる貿易屏風の繪畫を見て、是れ吾が志の一端を伸ぶるに足れりと稱して、繪筆に親しむ、而かも彼の潑剌たる意氣は終日蟄居して自然に親しむが如き、閑生活に甘んずる能はず、麥稈眞田の輸出に着眼し、故郷に歸りて、會社を設立せんと計劃するに至れり、故郷の父老彼を少年と蔑り容易に彼の意見を聽かざりしも、熱心なる彼は東說西論、遂に山陰物產會社を組織せり、而も天は彼に早熟的好運を與へず、此會社は幾干もなくして解散の已むを得ざるに至れ

り、此に於て彼は第二の計劃を進む、ソは即ち傳達會社なり、而も資金容易に得る能はず、天は再び彼の方を試むべく失敗せしめたり、斯くて彼は暫く自重修養の可なるを知り、公證役場の書記となり、或は神戸商品會社の事務員となり、幾多の苦がき經驗を得たる後、いよ〳〵獨立奮闘の境涯に入れり。

茫然自失

之れより彼は人生の悲慘事に遭遇するも屈せず、益々奮闘努力す、彼は一代の精力を發揮し、岡本某と共に輕便動力機の發明に從ひ、改良に改良を加へ、此に岡本式汽罐成る、然れども試驗の結果は良好ならず、之よりして彼の惡戰苦闘は次第に加はり、眞に名狀すべからざる不幸に遭遇しつゝも、其志は毫も屈せず、再び伊東式汽罐の經營に移りたるも、是れまた失敗を免れざりき、大精力主義の天才肌たる彼れも此に至り終に茫然自失せる程なりき。

單獨發明に志す

然れども、彼の志は之によりて挫折せざりき、彼は單獨發明に志せり、萬事を擲つて發明界の爲に奮闘を繼續せり、此間悲慘なる出來事之を筆するに忍びざるものあり、彼れは斯くして思索研究しつゝある間に、發明の歸着點が無意識の裡に具体的考案となりて腦裡に浮び來れり、是れぞ所謂タクマ式汽罐の生命として世界に誇るべき受水器にして、之に内管として降水管を組合はせたるなり、而して水管は必ず内筒に直結する事、水管の上方より火焔を當ること、蒸汽の貯藏量は從來の如く

多きを要せざる事等を直感したるなり、彼は覺ゑず快哉を叫んでこれだ〳〵と怒號したる程なりしと、幾年間の惡戰苦闘の血涙史は此に至り、一轉して其光明の輝きを記さゞるべからざるに至れり、然れども彼の前途は尚ほ遼遠なり、玄妙不可思議の心理作用によりて、意外にも眞髓に觸れたる彼は、茲に始めて理想の考案を製圖に取り容易ならざる苦心の結果、實用的經濟的ならしむべき爲め、發明より以上の努力を吝まず、加之實物製作の資金を得るも亦容易ならざりしなり、而も天は次第に此大天才に光明を與へたり、資金もやうやく得たる彼れは、先づ二十馬力の汽罐を造り、更に幾多の改良を加へ、終に時事新報の厚意により君の苦心漸く天下に認めらるゝと同時に帝大工科の渡邊助教授より、同汽罐の容易ならざる新發明なることを證明せられ、平尾鐵工場に於て製作せるものに初めてタクマ式汽罐の銘を打つに至りたり、之れよりも彼は順調ならざるも、兎も角も漸次其眞價値を認識せらるに至りたるが、而かも加茂博士の彼れに對する甚大深厚なる同情と援助なくんば、彼れの切角の發明も、其光明を發揮すること今日の如くなる能はざりしならん、加茂博士は、眞に彼れの知識なりしなり、あゝタクマ式汽罐！吾等は今之を筆するに方り、偉大なる發明家田熊君の成功を賀すると俱に、之を完全に世に紹介したる同情援助者加茂正雄博士の高誼の決して無にすべからざるを、此に附記し置くを至當と信ずるもの也。（こんどう生）

逝ける炭鑛王貝嶋太助翁

――宛然是れ泰西立志篇中の人――

筑豐の煤田一たび開鑿せられてより以來、身を立て產を興し、陶猗の富を累ねしもの枚擧に遑あらず、然れども身を窮巷に起し、赤手空拳、一意專心石炭と終始し刻苦勵精、あらゆる艱難を排し、終に能く成功し、祖先を顯彰し、國家に寄與せること、我貝島翁の如きは蓋し他に匹儔を求むべからず、翁は宛然泰西立志篇中の人しかも其錚々たるものにして、翁の事業の今日あるに至りし徑路は、轉た人をして感憤興起せしむるに足るものあり、翁が有する所の鑛區貳千四百五拾壹萬四千百五拾六坪、其稼行中に屬するもの九百拾六萬七千五百六拾六坪にして、現時各鑛區使用人員壹萬貳千餘、非働者壹萬五千餘名あり、即ち其計貳萬八千餘名は全然故翁の恩惠に感銘するものなりとす、而して其出炭總額壹ヶ年百五拾萬噸に達し、其量實に我帝國出炭總額の六歩、筑豐煤田出炭總額の一割强に居る、其所有鑛區の含炭量は現時の割合に採掘するも百年以上を支ふべし、世翁の生前呼ぶに炭鑛王を以てせし蓋し溢美にあらざるなり。

翁は弘化元年一月十一日を以て福岡縣鞍手郡直方町に生まる、直方は筑豐五郡煤田の中心にして、翁は炭界最大の偉人なりき、此地此人を生じ此人此地に生まる、

偶然ならざるなり、世に翁を目して時代の好運兒となせしものあり、然れども之れ眞に翁を解せざる徒の言也、翁は至誠至純、飾らず衒はず、温容人に接し、仁愛部下に臨み、任俠よく人の難を救へり、されば德望求めずして至り、部下皆悅服して翁のために粉骨碎身、死だも尙ほ辭せざりしなり、而して善謀善斷技量識見共に一代に冠絕し、氣宇濶大にしてよく人を容れ、加ふるに其膽斗の如く、百折千挫更に屈する所なく、撓むことを知らず、一敗は一智を長じ、一蹶は一事に熟し、終に善く成功の彼岸に到達するに至りしなり、翁はもと其家貧窶にして衣食給せず、八歲既に坑窟に出入して父の業を助け、十一歲骸炭燒夫となり、傍ら又之を鬻ぎ、其所得一日百貳拾文は、一家生計上必須の收入なりしなり、翁は又時々菜蔬を或は柿實を觸賣し、或は鍛工の徒弟となり、或は武家、寺院の若黨厮役に服し、或は綿打職人となり、或は土方となり、人足となり、あらゆる困苦缺乏と戰ひ、具さに艱難を嘗めたり、其時に食を廢し、或は一家僅に粥汁に飢を凌ぐの窮地に陷りしことも一再ならざりしなり、文久二年、年十九にして父を喪ふや、長弟六兵衛氏と共に坑夫となり了せり、一日炭坑の天井陷落するや、翁は土塊堆裏に埋沒せられ、三時間の後、顏面蒼白氣息奄々、僅に生を持して發掘せられしことあり、又ある時天井の一部龜裂し、土塊磐片翁及文兵衛氏の背上に墜落するや、翁は其令弟を警めて、其儘動くことなからしめ、衆を麾きて支柱を立てしめ、辛うじて死運を免れしことあり其膽大にして物に動せず、剛毅沈勇然諾を重んじ、强を挫き弱きを助くるの資性は

克く衆望を一身に集むるを得、漸進大頭領となり、數百の坑夫を統御するに至れり翁は又時に運炭受負に從事し、或は又有望なる鑛區を探り、筑豐の野を跋渉せり、凡そ此等の事たるや、皆翁が他日成功の基礎をなすものにして、翁は之によりて坑夫を統御するの呼吸と運炭上の經驗と、而して他方炭層の研究に於て、天下何人も企及し得べからざる智識を贏ち得るに至りしなり、かくて翁は此豐富なる經驗の上に立ち、獨立經營する所あらんとし、慶應三年親戚知友より若干の資金を借集め、山部炭坑を開鑿せり、これ現時三菱合資會社經營する所の新入炭坑なりとす、しかも當時揚水の方法不完全なると加ふるに天井の陷落とは、其事業を放棄するの止むなきに至り、茲に小獨立坑主は、再び坑夫として、或は大頭領として雌伏せしが、明治八年三百金を借り、第二次獨立を經營するや、又揚水法の不備と斷層水の噴出とは再び翁をして失敗放棄するの外なからしめたり、九年五月片山某のために豐前絲田炭坑を開鑿せしが、尋で直方に歸り三たび獨立經營し、熱心採炭に從事す、十年西南の役あり、炭價暴騰始めて二千餘金を利し、尋で直方町切貫炭坑の協同經營に參加し、此年六月長崎より蒸汽機械を輸入せり、翁の第一次第二次の失敗挫折は實に揚水の不完全に基く、されば此際翁の會心滿悅想像し得べきが如し、而して此擧たる北筑煤田揚水事業の一大革新を促せるものにして又以て翁が文明の利器を用ゆるに鋭意熱心なりしを見るべきなり、而も此長崎輸入の利器たるゝもと汽船に用ひたる朽廢物なりしかば、使用僅に十旬餘にして殆ど用をなさず、加ふるに炭價の

下落と坑窟の陷落と相俟ちて遂に酸鼻すべき大失敗を招來し、一家將に離散せんとするの困厄に臨めり、此際此時帆足義方なるものあり、身を炭界に投ぜんとし、斯道の熟達者を求めんとして直方に宿す、而して翁の斯道に卓絶せる伎倆あるを耳にするや、切に之が組合員たらんことを要望す、翁ために拮据經營奮勵努力する所あり、苦心慘憺、具さに苦楚を嘗む、此間翁は氏のために運炭木道上帶鐵を布き以て運炭に便する所ありたり、此れ亦筑豐諸炭鑛に於ける運炭方法に一進歩を加へたるものにして、特筆するの價値あるものとす、而して馬場山、城立前、南原、新入直方、植木等の諸鑛區は、皆翁が氏のために開鑿經營せし所のものにして、着々氏をして成功せしむると共に、翁の名聲漸く筑豐鑛業社會に鳴るに至れり、十七年十月數百圓を投じ、鞍手郡宮田村大之浦鑛區參千七百坪を購入し、翌年四月更に出願して四萬參千坪の採掘特許を得て、大之浦炭坑と稱し、八月帆足氏の許を辭し、茲に第四次獨立經營の旗幟を飜へしたり、十九年三月百貳拾五尺にして三尺層に着炭す、しかも資金の空乏は炭價の暴落と相俟ち、非常に困頓を極めたりしが、苦戰苦鬪克く艱難を忍び、貳拾壹年炭價騰貴するや、翁更に同郡菅牟田鑛區四萬參千六百坪を買收し、尋で又長尾吉隈の二鑛區を買收し、貳拾貳年參月壹日を以て榮鑛社を組織せり、貳拾參年鑛業條例公布せられ、撰定鑛區の制設けらるゝや、翁は大之浦鑛區を擴張して、五拾參萬貳千五百九拾六坪、菅牟田鑛區を擴張して貳拾貳萬八千貳百六拾七坪となしゝが、ために費す所多大にして負債山積せり、三菱合資夙に此

鑛區に對し垂涎措かず、法外の高價を以て之が讓與を交渉し來れり、此際翁をして之に應せしめば其の負へる所の債務を償却し、優に後半生の怡樂を買ひ得べかりしなり、しかもこれ翁の志にあらず、翁は石炭に生まれ、石炭に死するを以て、其理想とし、抱負とせるものなり、石炭は翁の生命にして炭鑛は即ち翁、翁はやがて炭鑛とも謂ふべく、如何ぞ小成に甘んじて心身の逸豫に耽ることをなさんや、翁は頑として之を拒絶したり、當時又炭價の暴落するあり、加之貳拾四年に至り陰霖瀰久河川横溢大之浦官牟田兩坑は張水殊に甚しく殆ど中道廢絶の外止むなきに至らんとせり、しかも平生翁の至誠と精勵とは、求めずして故侯爵井上馨氏の知遇を得此難關を脱却するを得たり、加ふるに貳拾七八年日清の戰役は炭價の騰貴を伴ひ、翁の得る所の純利一ヶ月數萬圓に達し、忽にして負債を清算するに至れり、斯くて翁は益々鑛區を買收して、其事業を擴張し、一意專心全力を擧げて之がために盡瘁せり、參拾壹年五月翁は其二弟一子と共に合名會社を組織したりしが、四拾貳年拾壹月家憲を制定し、尋て十二月之を現時株式會社に改めたり、而して其重なる幹部員左の如し

▲常務取締役　貝嶋榮四郎
▲取締役　峠　尺吉
▲監査役　渡邊林太郎
▲菅牟田炭坑長　貝嶋健次
▲滿之浦炭坑長　貝嶋龜吉
▲岩屋炭坑長　貝嶋關策
▲常務取締役　中根壽
▲監査役　貝嶋嘉藏
▲本店總務部長　貝嶋太郎
▲桐野炭坑長　貝嶋定二
▲大辻炭坑長　貝嶋百吉

今や翁の事業は創業の時代を離れ、基礎鞏固茲に守成の域に入り、日に月に社運隆昌に向ひつゝあり、翁逝くと雖も瞑すべき也。

翁年齡方に七拾貳にして逝く、其病に臥する迄元氣旺盛壯者を凌ぎ、自から社長の劇職にあり社務を總攬したり、翁や實に精力主義の權化なりと謂ふべし翁が成功の事蹟は實に生きたる一大敎訓にして、儒夫をして尙ほ崛起せしむるに足るものあり、しかも吾人の翁によりて學ぶべきもの只々之に止まらざるなり、翁の翁たる眞價をして、更に向上せしむるもの抑も翁の崇高なる品性なるなからんや。

翁は幼より攷々として勞役に服し元より學ぶに暇なかりし人なり、翁の之がために蒙むりたる不利不便は深く其頭腦に鏤刻せる所にして、其大慈大悲の資性は、人の子をして此の不幸を逐はしむるに忍びず、其の我が主宰する所の炭山に從事する坑夫等、子弟の學なく才なく、終生下層に喻喁するの外なきを憐み、明治貳拾壹年曾は恰も其事業の經營になやみ身自から非常に困厄せし際なるに關せず、私財を投じて私立大之浦小學校を起したり、普て之を翁の追想談に聞く、曰く小學校を起したるも兎角就學を肯んせず、或は學校に出すに着せしむべき被服なし、或は我等の子女には、敎育の如きは全く無用の長物にして、却て彼等をして我等に不從順ならしむるのみと、日夜勸誘督促就學せしめんとし、百方するも能はず、終に出席兒童各自に對し一日五錢を給與するの制を立つるの止むなきに至れり、當時坑夫一日の所得八錢を出でず、されば此給與金は彼等に取りて比較的容易ならざる巨額なり、

是に於てか先に言を左右に託して就學を肯んぜざりし父兄は、却て其子弟を叱咤して登校せしむるに至れり云々と、記せよ翁は業を庠序に受けざりし人なり、しかも斯くまでにして人の子の教育に盡瘁せる翁の心事は、傳へて天下の美談となすべきものならざらんや、　明治天皇兵を久留米に閲したまふや、特に大本營に召され宮内大臣より苦心談を徵せらる、翁即ち謹んで答ふるに此事を以てしたり、參拾年英照皇太后御崩御に付き、大赦の令を布かるゝや、翁は身元引受を有せざる免囚百參拾餘人を引受け免囚保護場を設け、與ふるに正業を以てし、訓誨指導を以て遷善感化につとめしかば之がために化せられて今尚ほ坑務に從事し、中にはやゝ重要なる地位を占むるものすら生ずるに至れり、翁の慈悲心は蓋し天性なり、或は軍事公債應募に、或は濟生會に或は何、或は何、凡そ學校、病院、神社、佛閣、道路、橋梁等百般の公共事業にして、翁の寄附賑恤を俟たざるものなく、其額數十萬圓に達せり明治參拾五年一月其の多年鑛業に黽勉し、國富を開發せるを嘉みし、官授くるに勳六等瑞寶章を以てせり、翁は又嚴然政界に重きをなし、遠賀川改修補助業の如き翁の盡力により議會を通過せるものにして、沿川の住民は子孫百歳其德澤に霑ふものなり、翁にして心こゝに存せば容易に貴衆兩院共に其班に列するを得べかりしも、自から卑下して肯て當らずとなし、他を推輓せり、翁は又資性至孝なりき、直方町三層の舊本邸は、負債山積の裡にありて數萬金を投じて建築せるもの、當時世人翁の心事に對し疑念を挾むもの少からざりしが、これ專ら八十歳に垂んとせる母堂を

して休神靜に老を養はしめんがためにして他意なかりしなり、翁は昆弟に善く故舊に善し、直方の地卑濕健康に適せず、加るに煤烟常に天に漲る、人あり翁に勸むるに他地に轉じて餘生を樂しむべきを以てす、翁頑として應せず、直方は墳墓の地なり、何すれぞ一身の故を以て此地を棄つるに忍びんやと、富貴に居て貧賤を忘れず、鄉友故老を遇する常に昔日と撰ぶ所なし、貝島家の盛業は親子兄弟夫妻協和合同の賜なり、一致戮力は貝島家の精神なり、翁の考、永四郎、氏妣種子、配慶子、長弟文兵衛氏皆逝けり、次弟六太郎氏、三弟嘉藏氏、皆健在せり、與に共に大成に與りて大に力ありしものにして、凡そ此等諸氏の事蹟は、悉く皆翁と共に傳ふ所なからざるべからざるなり、今や本末九家（宗家孫榮一氏相續、本家六太郎氏、本家嘉藏氏、連家太市、定二、龜吉、百吉、永二、蘭策、六氏）門葉益繁昌し皆家業に從ひ、翁の遺業を墜さず、威名廣く全國を震撼しつゝあり、偉なりと謂ふべし。

■五月山下の讀書樓にて

泥牛學人

半日讀書に倦み、西櫺を開いて極目す、平林田疇、村落簇々、電車南北に駛りて、耕鋤駄馬、隱約の間にあり、顧れば簷外の山影、屏顏を硯池に落し、門前の剝啄、佳客來り訪ふもの、如し、野趣山情、吾は吾の廬を愛す。